

---

# 旅の途中

伊吹ノア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅の途中

### 【Nコード】

N0136J

### 【作者名】

伊吹ノア

### 【あらすじ】

とやがわ・あきら  
十夜河晃は、物語の主人公になりたかった。日常から外れ当たり前の生活が一変する……そんなワクワクするような物語の主人公にだが、世界は晃の知らぬうちに変わっていた。人々を脅かす地球が送り出した七つの災厄。それに対抗するためのヒーローを育てるための学園。今までありえない事だとそう思っただけで憧れていたものは、既に現実としてそこにあつて。異世界にある夢のような学園……そこに通うことが決まり、初めは願いが叶ったと、そう思っていた晃だったけれど。すぐに晃は気づかされた。当たり前として存在して

いるそれは、晁の乾きにも似た強い思いを満たすことなどないことを。そんな晁は、学園から一つの使命を与えられた。その使命とは、異世界の扉を開き現世と一体化させ、人々を混沌に巻き込んで滅ぼすと言われる七つの災厄の一つである、フェアリーテイル……その力に憑かれた少女、黒彦葵くろひこ・あおいを救うというものだったのだが……。

## 第1話（前書き）

サブタイトル、変更しました。

## 第1話

自分は世間とのズレがある。

そう思うようになったのはいつのことだっただろうか、とやがわ・あきり十夜河晃は考える。

はつきりとは覚えてはいないが……おそらく中学校に上がる前くらいには、そのズレを実感していた。

それまでの晃は、自身と他人の境界線が曖昧だった。

まるで自分が物語の主人公であるかのように。

自分の身の回りにいる人全てが、何らかの形で自分に関わっていて相手の心の中に存在しているのだと、そう思っていた。

それは……例えば、クラスメイトであるならば男女関係なく全員が晃にとって友達であり。

まったく知らぬ他人でも、晃の興味を引けばその人は晃にとって知り合い……という様に。

だが、世間はそんな風にはできていないのだと、ある日晃は気付く。

それは、一人で電車に乗った日のことだった。

晃の乗った車両のその一角に、実にカラフルな髪の色をした少年たちがいち。

晃自身が自前だったが珍しい蒼髪をしていたせいもあって、ほとんど無意識下で視線を外さず、晃は彼らをじっと見つめていた。

その時の晃は、別に何かをしたかったわけじゃなく。

他人が他人にそうやって視線を向けることが何を意味するのか、その時の晃は理解していなかったのだ。

『何だてめえ！何か文句あんのかよ！』

そう言われた晃は、向けられる敵意に対しての嫌悪や恐怖より先に、  
そう言われる理由が分からなくて、ただただ戸惑い、驚きを感じて  
いた。

俺が君を見ていることの、一体何がいけなかったのだろうか、と。

それは……すれている、と言う言葉と真逆に位置するもので。  
言葉通り感覚のズレといってもよかった。

意味合いとしては世間知らずのほうが近いのかもしれないけれど。

それまでが、世間を知らぬ子供だったと言えばそうなのだろうけど。

それ以降、他人を無造作に注視することは自分の利にならないと知  
って。

誰かれ構わず視線を向けることはなくなっただが。

それからいつまでたっても、そんなの本当は間違っている、なんて  
思っていて。

自意識過剰なところも手伝い、晃は自分ではなく世間がズレている  
のだと、そう思うようになった。

自分ではなく、世間が、世界がどこか間違っているのだと。

だが、それを口を大にして訴え続けるほど傲慢でも強気でもなく。

内心ではそんな不満を抱えつつも、事なかれ主義で生きてきた。

でも、それが大人になる事だと言われるのは嫌で。

気付けばその感情が、平穩無事で変化の乏しい自分の人生の飽きへ  
と昇華していて。

いつしか常日頃、晃は思うようになった。

こんな自分を、世界を、揺るがすような何かが起きないものだろう

か、と。

心躍る不思議な出来事が、自分にやってこないものか、と。

それが理不尽な願いだと分かっているにも止められず。

その思いが日に日に募っていくばかりなのを自覚していて。

そんなある日。

唐突にそんな晃の願いは叶った。

それは、晃が中学にあがる頃……いや、親に半ば強制的に入れさせられた、学校によって。

サウザー学院アカデミーなどと呼ばれるその学校は、世界を救う……厳密に言えば人々の平和を守る英雄ヒーローを育てる機関だった。

両親にその話をされた時は、なんて都合のよい悪夢かと思った晃だったけど。

晃と同じように集められた才能のあるたくさんの生徒たち。

天国とも、地獄ともつかない『異世界』にある広大な校舎と町。

英雄持つべき、夢に見たほどの超常の力。

増えすぎた人々を滅さんと世界そのものが送り出したとさえ言われる、七つの『災厄』。

半信半疑の日々はすぐにゆるぎない現実となり、『災厄』から人々を守る事が未来の目標となって。

それから三年ほどの月日が経ち。

晃は故郷に帰ってきていた。

高校生として、最初の春を迎えるために。

自らに与えられた使命……世界を滅ぼさんとする『災厄』のひとつ。  
【フェアリー・テイル】から、人々を守るために。

しかし。

故郷の高校に入学して、あっという間に三ヶ月が過ぎ去って。  
気付けばそこには半ば使命を忘れ去ったかのように学校生活を送り、  
何起こることもない現実に慣れてきてしまっている晃がいた。

与えられた使命……それがたとえば戦って倒す、と言う判りやすい  
ものならばよかったのだが。

晃にとってその使命は、どこぞの魔王や覇者とやり合うより辛いこ  
とだったからだ。

実際、晃の前にその使命を負ったものは、見事に失敗している。

晃も、その成果は芳しくなく。

最近、今すぐに世界の危機が訪れるわけでもないし、そうせつ  
くこともないだろう、なんて考えている晃がいた。

ある意味、自分の使命から目を背け、逃げているといってもよかつ  
たが。

案の定、それがいけなかったのだろう。

それは……晃が接触するよりも先に、向こうから来た。

「これは……」

一見動揺も何もしていない様子で、辺りを見回す。

そして、自分に何が起こったのか、思い返してみた。



目の前に広がる、あえて一言で言い表すとすれば、『世界の破滅前のワンシーン』。

何故自分は、こんなものを見ているのかを。

## 第1話（後書き）

伊吹ノアです。

三作目にして、三人称に挑戦してみました。

宜しければ御批評、ご指摘、ご教授、エトセトラ、お待ちしております。

## 第2話

晃はその日、いつものように部活、陸上部の朝練に出ていた。

いつものように、5キロメートルのビルド練習……

簡単に言えば後半になればなるほどスピードを上げていく練習で、距離が長くなれば長くなるほどきつさも増していく……が始まって。

ただ単純に実力不足のために他のメンバーに置いていかれて。

（使命やその身の持つ力はむやみに明かしてはならないので、そう言う設定にしている）

いつものように一人旅になって。

そこまでは、いつもと同じだったはずだ。

問題はその後だった。

それは、晃がコースで一番気に入っているポイント……まるで戦闘機の発射台のような角度がついている、空へと続きそうな坂道に差し掛かったときのことだ。

その坂道の終わり、このコースで最も眺めのいいその場所に、ひとりの少女が立っていた。

晃の通う六加市立東雲高校の、紺のブレザーとスカート。

朝もやに包まれて尚、太陽の光を浴びて赤く色づいて見える長い後ろ髪。

当然気にならないわけはなかった。

何せ、晃の興味を引くには充分のシチュエーションだったからだ。

まず、景色がいいと言ってもそれはあくまでこのコースに限られるものであり、

こんな果樹園と畑と田んぼしかないような土手道を通学路にしている生徒なんて、今まで見たことがなかった。

しかも、晃に背を向けていた少女は、ただ景色を見ている、と言った雰囲気でもなかったのだ。

まるで何かを探しているかのような、待っているかのような、そんな感じに見えて。

晃の頭の中に一杯になる疑問と、いつもと全く異なるこの状況への期待。

「…………ふっ」

だが、それらの感情は結局外に出ることはなく。

晃はひとつ息を吐き、アスファルトの地面を見つめながら走る。

現実は無常だ。

期待などしても何も変わらない。

確か、近くに老人ホームがあったはずだから、そこに寄った帰りか何かなのだろう。

そんな風に自己完結して、晃は顔を上げ通り過ぎようとして、

「…………っ！」

思わず言葉を失い立ち止まってしまふ晃。

目の前にいるはずの女生徒の姿がない。

あの一瞬で。

隠れたり立ち去ったりする時間などなかったはずなのに。

いや、その事は目の前で繰り広げられている光景に比べれば些細な問題、なのだろう。

のどかな果樹園と水田との組み合わせでしかないはずのいつもの景色は、瞬きほどの間に七色の火の海に取ってかわり。

多く水分の含んだ薄霧が包むかわりに、怪しげな気が立ちこめ。空には月も星も太陽もなく。

かわりにあるのは、夕焼けとは呼べない赤一色だった。

そんな信じられない世界に、一度は見たことのあるものからまったく知りえないものまで、現実の世界では存在しえないはずの幻想の生き物、魑魅魍魎たちが所狭しと跋扈している。

夜でも昼でもなく、朝に見る夢。

そんなものがあると言うならば、これがそうだろうかと思は思ふ。混乱していた。

どんなに修練を積んでも、なくなることはない不安と驚愕と恐怖。それらがごちゃ混ぜになり、そこに一抹の懐かしさと、得体の知れない高揚感がブレンドされて訳が分からなくなる。

ただ、頬をなでる生暖かい風が。

耳朶を打つ何かの叫び声が。

視界を焼く空の赤が。

全てのものが燃えている焦げた匂いが。

これは夢だと信じようとする晁の思いを否定する。

それは……あまりにも衝撃的な、無常でない現実との出会いで。

何もできず、ただおろおろしていた自分を、後に晁は悔やむことになるのだが……。

そんな出会いに終わりを告げたのは、世界を丸ごと覆うような発光

だった。

それは、どこか太陽の光に似ていて。

発光源は、紫の炎に包まれた晃のいる場所から相対する山で。

晃がそこに注視したのが分かったかのように、視界が凄まじい速度でズームアップする。

すると……。

そこには、まごう事なき晃自身の姿があつて。

晃が情報を得ることができたのはそこまでだった。

他にも誰かがいるような気がしたけれど。

まるでテレビの電源を落としたかのように視界が闇に染まったことで、晃の思考すら完全に……シャツダウンさせられたからだ。

そして……晃が目を覚ましたとき。

晃はただ呆然と、坂道の終わり……急速に左へと折れるカーブのところで、立ち尽くしていた。

目の前に見えるのは、いつもと変わらないのどかな田んぼと果樹園の風景。

やはり、先程までいた女生徒の姿はない。

この、坂を駆け上がってくる数十秒の間に起こった出来事の、そのすべてが夢であつたかのように。

「いや……そんなこと、ありえない」

晃自身自覚のない、芝居がかった……『凍えるような』眩き。その眩きの意味が、こんな事起こるはずがない、なのか。夢であるはずがない、なのかは分からない。

ただ、その分からない答えを導き出せる可能性が一つだけあった。

先程の女生徒。

後姿と僅かに見えた横顔だけだったが、晃には見覚えがあったのだ。

東雲高校1年8組、かみとくま・まさみ上徳間 榎美。

入ってからまだ3ヶ月足らずの一年生にして、演劇部期待の新人。ちよつとした有名人であったから、晃でなくても東雲の男子学生ならばたいていのものは知っているはずで。

幸か不幸か、晃には彼女に話を聞けるつてがある。

そこまで考えを纏めると。

いてもたってもいられない自分を晃は自覚していて。

今起きたことが、晃の哀れな幻覚にしろそうでないにしろ、一刻も早くその答えを知りたかった。

「……さっさと終わらせるか」

晃は自分に言い聞かせるように鋭く呟くと、それを合図にして再び走り出す。

ここまでの力のない無駄に足音の響いていたピッチ走法から。

重力のなくなってしまうたかのようなストライド走法へ切り替えて。

その様は、ここ六加市の方言で言うところの『飛ぶ』と言う表現がふさわしく。

だが既に、思考が走ることで他に集中してしまった今となっては、自分の走りの変化など晃にとっては些細なものだったのだろう。

そして……。

晃がそんな集中から現実に戻ってきたのは。

線路のかかる山なりの陸橋を駆け抜けたその頂上、ゴールテープも何も無い部員たちだけが認識するゴールの辿り着いた時だった。

ふと感じる、もし現実に殺気というものが存在しているなら、きっとこれがそうなんだろうと思える強い強い視線。

「晃君、今日ちゃんとしてくれたじゃん」

顔を上げると、胸元と背中に『しのめ』とプリントされた臙脂色のジャージを着た、小柄な少年が晃の元に駆け寄ってくるのが分かる。

「……ん？ あ、ああ」

いつの間にか追いついていたという意味に気付くこともなく、晃は曖昧に頷く。

射るような視線は、その少年のものではなく。

晃は無意識に道路脇に置いてあった、微妙に趣味の悪い臙脂ジャージを拾い上げると、その視線の主を探した。

「……」

その視線の主は、別コースを走っていた女子の集団の中にいた。



1年8組、黒彦葵。くろひこ・あおい

陸上未経験ながら、そのセンスのよさから早くも期待をかけられており、

入学式の新入生代表（入学試験トップの成績のものに与えられる役目）を務めた才女でもある。

加えて妬みと羨望を含んだ、伶俐と揶揄されるほどの美貌の持ち主だった。

男子生徒の注目度において、同じクラスの上徳間柁美と双璧をなす人物で。

事実、彼女目当てで今年の陸上部入部希望者は大豊作だった。

もつとも、東雲高校の陸上競技部は走ることが目的になれば生き残ることの叶わないほど過酷な部であったため、今となつては駅伝の大会に出られる人数プラス1。晃しか残っていなかったが。

とそんな事を考えながら視線を返していると、

晃と視線があつたことに、烏の濡れ羽色したショートの前髪がゆれる。

同時に、光りしたたるほど混じりけのない黒の瞳の中の、苛烈な敵意に混じる動揺と怯えの波紋。

それがはつきりと分かっってしまう悲しさに、晃は思わず乾いた笑みをこぼしてしまった。

それは、周りから見れば凍えるような……嘲りの含んだ笑みに見えただろう。

そのことに気付かぬは本人ばかりで。

そんな表に出る態度とは裏腹に、晃の内心は自虐による切なさに苛

まれていた。

何故なら、葵がどうしてもそんな態度を自分に向けてくるのか、晃には皆目見当もつかなかったからだ。

これなら歯牙にもかけられず無視されていた方がよっぽどマシだろうと晃は思う。

だったら晃自身が彼女に近寄らなければすむことだったのだが。

今の、自業自得かもしれないこの状況を作ってしまったのは他ならぬ晃自身なのだからどうしようもない。

部活動参加が必須である東雲高校において、入部するリストの中で最終的の残ったのは、水泳部と陸上部だった。

水泳は、運動神経のなかった晃が小さい頃からスクールに通っていて慣れ親しんでいたという理由から。

陸上部は経験こそ皆無だったが、昔から走ることが嫌いではなかった……自分と世間とのズレを初めて感じたものだから（体育の授業でのマラソンといえば、晃のように運動神経のなかったものが不平不満を上げる代表のようなものだが、何故か晃はそう言った不満の感覚がなかった）と言う理由で。

晃はその二つのうち、どちらにすればいいのか……決まり手がなかった。

しかし今、晃が陸上部にいるのは彼女がいたから、と言うことに尽きる。

ただ、辞めていった他の連中のように彼女目当てで、とストレートに言われるのは本意ではなく。

彼女が、晃に与えられた使命を為すための最重要人物だったからであるいは……彼女がまだ世間のズレを知らなかった頃、晃がよく遊んでいた友達の一人だったからに他ならない。

逆に言えば、晃がその使命に選ばれた理由はそのためでもあるのだが。

つまり、表向きに言うのなら、知っている人がいるから馴染みやすいだろうと思ったにすぎないのだ。

そんな安易な考えで、素人お断りな練習メニューが待っていたり、理由も分からず嫌われる羽目になることなど、これっぽっちも知る由もなく。

そんな晃が奇跡的に部に留まっているのは……単にやめる勇気がないだけなのが、余計に悲しくなるわけ。

「言いたいことがあるなら、はっきり言えばいい……」  
ついでに晃は口下手である。

自分に何か至らぬ点があるのか、訊きたかっただけなのに。  
口から紡ぎだされたのは、辛辣と取られても仕方ない、そんな言葉だった。

「……っ」

凜とした空気こそ変わらなかったが、わずかに怯んだ様子の葵。

晃は上手く言葉を扱えない自分が嫌になる。

その自嘲の笑みが、相手にどうマイナスイメージで映るのか……やはり知らぬままで。

と。

案の定、何かに気付いた葵の表情が、怒りのそれに変わった。  
すっと晃のほうへ近付いてくる。

ぶたれる！？

なんて思っ て身構えた晃だったが……。

「あの子に手を出したら、許さないから」

葵はそう晃だけに聞こえるように呟いて、通り過ぎて行ってしまっ

(……あの子？ 手を出したら許さないだっ て？)

ずいぶんと久しぶりに『葵ちゃん』と会話をしたような気のする晃  
だったが。

その意味は分からず、身に覚えもなかった。

何かを勘違いか、人違いでもしているんじゃないかって思える。

だが、それを受けた晃の心中には、昔とは180度変わってしまった  
関係にへこんでいる度合いよりも、その言葉の真意を知りたい、  
と言った興味の方が大きかった。

「……ふむ？ どう許さないのか、教えてもらいたいな」

狙ってやったと思われても仕方のない、周りじゅうに聞こえるほど  
の晃の問いかけ。

「あなたはっ！」

あまりにもつたいぶつた言い方をするから、もどかしくて声が大に  
なっただけなのだ。

どうやらそれがまずかったらしい。

ますます怒りのこもった葵の呟き。

そんな微妙な空気の中、蚊帳の外にいる先輩たちの、「また始まっ  
たよ」なんて呟きが聞こえる。

どうやら地雷を踏んでしまったらしいことに晃は気付いたが、もう  
後には引けなかった。

いつものことと言うが、この部に入って3ヶ月ちょっと、これほど

まであからさまな意思を見せてくれたのはこの時が初めてだった。もしかすると、自分は何故これほどまでに嫌われているのか分かるのかもしれない、なんて考えていたのだ。

「俺がどうし……うごおふっ!？」

だが、そのために続けようとした晃の言葉は。走ると負担のかかるあばら下……横っ腹に鋭い突きが入って、あっさりと中断を余儀なくされた。空気の抜けるような情けない声あげてひざをつく晃。

「だ、大介さん、そこは反則っ……」

力の抜けた声で呟き顔をあげると、そこには二人の男子生徒がいた。そのうちの小柄なほう……晃がゴールした時、真っ先にねぎらいの言葉をかけてきてくれて、

今まさに晃の腹に突きを叩き込んだのが、にしおわりへ・だいすけ西尾張部大介。

晃とは同学年で、クラスも隣同士。

部においても葵に勝るとも劣らない期待を寄せられている、天賦の才能を持つ少年である。

何より称えるべき点は、そんな自分に全く奢ることがなく、気さくで大らかな性格だろう。

同級生なのにさんづけだったり、彼ならばいきなり一発入れられても仕方がないか、などと言う気分させる不思議な少年だった。

「だって晃君、また黒彦さんのこといじめてるし」

「……ぐっ、人聞き悪いな。俺はただ鏡なだけだ」

相手が敵意向けてくるから敵意を返す。

笑顔なら笑顔で。

それが自分の治らない癖なのだから仕方ないって言おうとしたのだが、そんな皮肉めいた言葉が通じるわけもなく。

「また、訳の分かんないことを。だいたいさあ、女の子には優しくしなきゃだめだろ。ただでさえ晃君は顔も雰囲気もコワイんだから」  
逆にコメントしがたい説教まで始まる始末。

優しくしてないつもりなどなく、ひどい言われような気もするが。悪気があって言っているわけじゃないから……きつと事実なのだろうと、晃は結論付ける。

「……俺は、そんなに怖い顔しているのか？」

「そうだねーなんて言えばいいのかなあ、非情な暗殺者、みたいな顔？」

泣きそうな気分で晃がもう一人の人物に問いかけると。

大介とは対照的なほどに背の高い、ぬぼっとした大人しく優しい少年……1年8組小島田剛史が、全然優しくないそんなどぎつい言葉  
を返してくる。

剛史と大介、そして晃、彼ら三人は今年の新生で。

東雲高校陸上部長距離パートに生き残った数少ない同志ということもあり、仲はよかった。

それは、遠慮なくこうして言い合える間柄なせいもあるだろうけど。

「ううっ。そこまで言われるとは……はっ、もしかこれがいじめ？」  
半分本気で半分は気まずい空気を吹き飛ばしてくれたことに感謝しながら、がくり、と頂垂れてみせる晃。

まあ、晃にそのつもりは全くないとはいえ、入部してから顔を合わす度に険悪になってれば彼らもそれ相応に対応してくれるというもので。

遠巻きで観客と化している先輩方も、もはや恒例行事のごとく扱っていたりする。

だからおかげさまで、気まずい雰囲気は長くは続かない。

たとえば、いつもと比べて様子が一味違っても。

それだけが変わらないのは、晃にとってただ唯一なのかもしれない……。

## 第2話（後書き）

感覚的には2日ぶりですな。

一応記録には一日1話更新を守っておりますけど……。  
いつまでそれが続くやらです。



### 第3話

とはいえ、会うたびに気まずいままなのはいただけくない。

(なんで俺はこんな嫌われてるんだろっな?)

晃はため息をつき、そのことをちよつと本気で考えてみることにする。

剛史の言う通り、見た目がいけすかなかったり、あるいは晃自身の性格や態度が気に食わないのなら、その存在を考えない……つまり無視すればいいだけの気はする。

それをしないということは、彼女にそうさせる理由が晃にあると考えるのが妥当だろう。

晃としては、仲良くするしないより先にその理由を知りたいわけなのだが。

結局いつも、晃の空気の読めないところとか、口下手さとかいるんなものが重なって、今みたいなお話にならない状態になってしまう。使命の話など、する余裕すらなく。

しかも今日は気が動転していたというか、不思議な体験をしたばかりでテンパっていたから。

あの時、大介が止めてくれなかったら、ちよつと取り返しのつかないことになってたかもしれない……なんて思うと、空気の読める大介には感謝してもしきれなかった。

後で改めて御礼でも、なんて少しズレたことを晃が思っていると。

「あ、あのっ。……ふう、えつと、十夜河くん？」

「…………ん？ どうした？」  
だいぶ戸惑った、窺うような声。  
それに晃が顔をあげると、今帰ってきたばかりなのか、未だ息を切らせたままの、ボブカットの少女の姿があった。

1年2組大屋奏子<sup>おおや・かなこ</sup>。

葵と共に貴重な女子長距離パートを担う、引つ込み思案だけど陽だまりのような雰囲気を持つ彼女は、部活の仲間と言う以上に葵と仲が良いように見えた。

その流れであまり会話したことがせいかわ、一体何の用だろう？ なんて晃は思う。

加えて、その後ろで（どうやら葵は、奏子のことを待っていたらしい）睨みをきかせている葵がいるのもあって、きつと晃は怪訝な顔をしていただろう。

だが。

「あの、そのジャージ、私のなんですけど……………」

奏子のその一言で、晃の怪訝さは一瞬にして吹き飛んだ。  
慌てて見直せば、袖の所には確かに小さな白文字で大屋と刻まれている。

「すまない。いつものように俺が最後だとばかり思っていた」

「…………変態」

「ぐっ」

平謝りしてジャージを返したはいいが、まるで鬼の首でも獲ったかのごとく、ここぞとばかりに口撃してくる葵。

ついでに背後からやさしい仲間たちの生暖かい笑い声が響いてきて、羞恥のあまりただただ絶句するしかない晃。

何も言えなかったのは、言い逃れしようもなく自分のだと思っ

(練習用ジャージは、男女ともデザインが同じ)、しっかり脇に抱えていたせいもあるが。

先程通りすがりに際に葵が呟いた言葉、あれはもしかしたら『あの子(奏子)の(ジャージ)に手を出すのは許さない』ってことを言っていたのでは?と思っただからだ。

加えて男ギライとも噂されている葵だから、あんな反応をとつてもおかしくないかもしれないな、なんて晃は考える。

「もう、葵つてば。あ、べつに気にしなくていいですよ、十夜河君。私も人のとまちがえちゃうこと、よくあるし」

「……その言葉だけで救われるよ」  
たとえ建前でも、その言葉が出てくるかそうでないかで大違いだろう。

しかし、相変わらずの葵は晃を睨んだままで。

そんな合間を縫った、部長の苦笑混じりの朝練終了の号令とともにまるで晃から遠ざけるみたいに奏子の手を引いて、校舎の部活棟へと向かう階段を下っていつてしまう。

「まー、気にするなよ。黒彦さんは男相手なら大抵あんなものだからさー。」

とはいえ、僕や大介さんは晃君の仲間だと思われてるから、他のヤツより三倍くらい風当たりが強いけどねえ」

「失礼しちゃうよ。きつとアオイちゃん、ヤロー三人も残りやがったか思ってるんだぜ。オレたちは走るためにこの部活に入ったつてのにねえ?」

フォローのつもりなのか、呆然としている晃の肩越しに、そんな声がかかる。

剛史のフォローは論外だが、大介の言葉にも素直に頷けないのがやるせなくて、晃はただ二人の言葉に天を仰ぐだけに留まっ

と。未だ夏の来る気配のない寒々とした風が、汗で濡れてなんだか迷い子のように惨めな顔をしている晃の熱を奪っていった。ぶるっとなつ震えてようやく気付く、自分の上着がない事実。

「……俺の上着は？」

「ない、ね……」

「本当だー。また、誰か親切な人が持ってたんじゃない？」

いつものように、と既に達観したように二人が呟く。

剛史の言葉は皮肉のようで皮肉でもなんでもなくて。

練習中、線路を跨ぐ陸橋の道路端に置いたままの赤ジャージは、よく落し物として最寄りの交番かあるいは直接学校に届けられてしまふのだ。

ただ、今回の場合、他の人のものもあつたはずだから……。

「誰か、晃君のファンの人が持ってたのじゃないかな？」

「なわけないってー。例え万が一億が一そんな人がいたとして、わざわざこんな趣味の悪いジャージ持つてくことないと思うけど」

「……言いたい放題だな」

その可能性は……まあ確かにないだろうけど。

晃はもう一度ため息をついたが、悪ノリしてる二人と同じように、あまりジャージがなくなつたことを気にしてはいなかった。

何故ならば、この三ヶ月で晃がジャージを紛失したのは三度目だが、過去二回、ちゃんと手元に戻ってきたからだ。

それは他の人も同じで。その原因が見ればすぐに東雲高校陸上部のものと分かるくらいに派手なのか、そういう呪いでもかかっているからなのかは、ただいま晃の脳内会議で絶賛議論中だったりする。

だが……。

それもやっぱり、いつものこと、だったから。

晃はその時、気付いていなかった。

晃はその日の練習で、ジャージを脱いでいなかった、ということを知った。  
……。

## 六加市<sup>むか</sup>。

東京都心から一時間半ほどの好立地にある、夏は蒸し暑く冬は極寒といった、ただしく日本の四季を体現した、海のない……四方八方を山に囲まれた、典型的な地方都市である。

十数もの町を吸収して形成される広い土地ばかりを誇るその市は、おりしも来年に開催されるオリンピックの招致で賑わっていた。

(いや、賑わっているというのは少し表現が正しくないかもしれないな)

しかし、根がひねくれている晃はそんな事を考えていた。

晃から見れば、もともと協調性のないことがこらに住む人々のウリであり県民性であり、まとまって世界的なイベントを行おうとしている面倒くささに、みんな実際は戸惑っているのだろうと。

それは、完成間際の開会式場に最も近い、言わば中心にある東雲高校においても例外はなく。

今まさに全校生徒に聖火リレーのサポートランナー募集の紙が配られているが、おそらく参加に をするものはないんだろうなと晃はふんでいた。

晃も当然のようにそのクチだが、それはどうせ誰もいないのならそのお鉢が回ってくるのは自分たち陸上部だろうから、なんてことを

考えていたせいもある。

もしそうなら、晃は参加するつもりではいた。

あるいは、有名人と走れるかもしれない……なんて打算的なことを思いつつ。

(……眠い)

そんな朝のホームルームの最中。

突然襲ってきた眠気に抗いながら、不参加の意を表わす×印をつけた回覧プリントを後ろに回す晃。

いつもなら、授業が始まって眠りの世界の誘われることがないように、朝練はあまり力を入れずほどほどにが晃のモットーだったのだが、おかしな出来事があったせいかなんだか晃は疲れていた。

そのくせ、頭の中は変な高揚感が続いていて。

いったいどつちなんだと自問自答したくなる晃である。

『走るのが好きだから陸上部に入った』。

そんな中、ふと思い出したのは大介のそんな言葉だった。

確かに、好きじゃない……と言えば嘘になるだろうけど。

それに素直に頷けなかった晃がいるのも確かだ。

晃は、陸上選手としてかなり不良の方だろうと自身で自覚していた。気が乗らないテスト期間なんかは勝手に休んでしまっし、教えられたフォームも覚えずに自己流で通す。

さらに、今日の朝のように練習で全力を出すなんてことは滅多になく、それによって本番のときの設定タイムを見誤ってしまう、なんてこともしばしばだった。

真つ当に部活をしている大介に対し申し訳ないこと甚だしいが。

それでも晃が陸上を、この長距離を続ける理由は、辞められないからとか使命のためとか言うよりも先に、外の世界に何かしらの『変化』を求めているからと言えた。

町の中、自然の中を走るのは楽しい。  
必ず何か新しい発見がある。

晃にとつて部活動とは、いつも何か起きないかと期待している自分の欲を満足させる大事な手段だったのだ。

そして今日、その期待を遥かに超える事態が晃の身に訪れた。

消えた少女。終末を示す赤い空。

晃が見たものは一体なんだったのか。

その結果がどう転ぶにしろ、知らなければならぬことは多くあるのだろう。

眠気と遊んでる暇などない、なんてことを考えているうちに朝のホームルームは滞りなく終了して。

鳴り響くチャイムの音。

(よし、とりあえず朝起きたことを記録しておくか)

がたがたと席を立つクラスメイトたちを脇目に、晃は自身のバッグの中に手を突っ込む。

そこにあるはずの、一冊のノートを求めて。

3ヶ月もの間、陸上部のハードな練習に生き残って、体育会系のイメージをクラス内でも植え付けられつつある晃だが、その実趣味は音楽鑑賞と読書だった。

ただ、晃にはアウトドアでいたい日とインドアでいたい日があつて、ずっと家で読書したりゲームしたりしてる日もあれば、夜になつてもウォークマン片手に走ってるなんて日もあるのだ。

興味の沸いたものなら、何でも手を出した結果が今にある、といつてもいいかもしれない。

そのノートには、マイベストを作るための曲目リストや、定期的に

つけている夢日記、自作の小説、詩などが無造作に書き連ねてあった。  
今日起こったことを、文章に置き換えてみれば何か新しい発見があるかもしれない。  
そう思い、晃はそのノートを手にしようとしてみたのだが……。

「トヤちゃん、タローくんが昨日借りたCD又借りたっていうんだけど、いいかい？」  
不意に横合いから声がかかって、晃は慌てて手を引つ込める。  
それ自体は大事なもので別に恥ずかしいものってわけでもないのだが。  
そうは言っても自分の本質を知られるのは恥ずかしかったからだ。  
それが親しい悪友であるならば尚更のことです。

「……む。あ、ああ。構わないぞ？」

バレバレの動揺を表に出しつつ晃が顔を上げると、そこには二人の男子生徒がいた。

声をかけてきたのは内川豊。うちかわ・ゆたか

白欧系の顔立ちで、その瞳は青い。

いまだ夏の来ない弱い日差しにすら焼かれて赤ら顔になってしまうのが玉に瑕な彼は、音楽の趣味があったことをきっかけに、晃と仲の良い友人の一人だった。

見た目の通りかどうかはともかく、演劇部に所属している。

「ヒヒツ、何かエロいモンでも持ってきてるのか、我が友よ？ ポクにも見せるよな」

そして、引きつるような笑い声をあげてそんな事を言ってきたのは、晃のもう一人の悪い？友人である寂蒔太郎じやくまく・たろうだった。

小学校からの付き合いが続いている数少ない人物で、晃にとっては



あの中学の頃の同級生でもあり、この東雲では、晃の素性を唯一知っている人間でもある。

きつめの天然パーマと、人をくつたような大きな瞳が、豊とは別の意味で日本人離れした顔立ちをしている。

地下で怪しげな実験でもしてる方が似合いそうな雰囲気を持っているが、そんな見た目とは裏腹に、彼はテニス部に所属していた。

しかも、『王子さま』なんて呼ばれているのだから人は見かけでは判断できないと、しみじみ思う晃である。

「阿呆、違うわ。ただノートを取り出そうと……って、な、なにに!?」

そして。

タローの人の悪い笑みに反論すべくもう一度バッグに手を突っ込んで示そうとした晃だったが。

やけに手応えのない感触に、晃は思わず声をあげてしまう。

二人が目をしばたかせる中、晃が慌ててノートを取り出すと……。

そこには、シヨッキンググリーンの表紙、背表紙だけしかなく。

「な、中身が……（ぬっ、抜けてるーっ!!）」

晃のまるで人生最大の危機でも訪れたかのような叫びは、人の集まり始めたクラスじゅうに木霊する。

一体何が起こったんだ?と言うより、また晃が何か始めたぞ、と言う感じのざわめきの中。

大げさでなくそれに近い危機感を覚えていた晃は、音もなくリノリウムの床を蹴って教室の外に出ようとして。

「きゃっ?」

「……っ！」

入口の所で小さな悲鳴。

一人の女生徒が自分の進行方向を塞いでいることを晃は寸前で認識して。

ガシャン！

気付けば晃は、呆然としている女生徒の前でチョークの粉まみれになっていた。

その瞬きするほどのわずかな時間に起こったことを、理解できたものは一体何人いただろう？

「ヒヒヒ、いきなり走り出したかと思ったら、そんなにチョークをかぶりたかったのか？」

「……はっ、いつの間にやらトヤちゃんが面白いことに！ って、誰かと思ったら香澄じゃん、平気か？」

まるでこうなることが分かっていたかのような手際のよさで、タロ―が箒とチリトリを取り出し、粉まみれの晃を掃除している。

その一方でようやく我に返ったかのように、豊が入り口ですくんでいる女生徒に笑いかけ、手をひらひらさせた。

「……っ、教室でなれなれしく呼ばないでくださいっていつも言ってるじゃないですか、内川さん」

豊の気安い態度に、ようやく我に返ったのか、慥然とした態度で豊を睨む、香澄と呼ばれた女生徒。

「つれないなあ、香澄ちゃんは。オレとキミの仲じゃないか」

「……ただ部活が同じってだけで、世迷言をいわないでください」  
肩をすくめてそう言う豊に、香澄は冷たく言い放つ。

一年一組、せんぼんやなぎ・かすみ千本柳香澄。

網目の細かい三つ編みと、くりくりしたつぶらな瞳が特徴的な、小柄な少女である。

豊とは同じ演劇部に所属しており、仲がいい……というか、端から見れば軽いイメージのつきまとう豊が、一方的に香澄にちょっかいをかけているように見えた。

「フヒヒ。おかしいな。ボクはお互いのちちおぶごうっ!？」

「余計なことを言っていると叩きますよ」

ガスッ!といい音がして香澄の鞆の角がタローの額にめり込む。

「はは、もう叩いてるじゃん」

悶絶してくずおれるタローを脇目に、豊は苦笑い。

そこで、ゴングを告げるがごとく、予鈴のチャイムが鳴って。

「ぐっ、まずいな……」

「ぐへっ」

一連の出来事がまるで他人事であったかのように、まだ粉まみれのままのろろと自席に戻る昇。

「……私、何かまずいことしちゃったんですかね？」

「いや、気にしなくていいんじゃない? 自分の世界に入っちゃってるだけみたいだし。多分、ぶつかりそうになったのが香澄だったってことも、たった今タローくん踏んづけていったことも、気付いてないと思うよ」

苦笑いのまま呟く豊の言葉に、微妙な間があって。

「それはそれで悔しいというか……相変わらず難儀な人、ですね」

「はは、ま、大目に見てやってくれ。……ほら、タローくん、こんなトコで寝てると風邪引くよ」

眉を寄せる香澄に、豊はただ苦笑を浮かべていて。

「おのれえ、この恨み、はらさでおくべきか……」  
ぶつぶつと呟いているタローを引っ張りあげ、お互いに席につく。

それは、賑やかだがいつもと変わらない、そんな朝の一幕で……。

## 第4話

それから、普段通りに進んでいく授業の中。

晃はノートの方ばかりを考えていた。

（どこかに落としたか？ それとも、部室に忘れたか？ 誰も知れない異次元に紛失したならともかく、誰かに拾われてしまったら……）

考えれば考えるほど、晃の表情が凄みの聞いた焦りに変わる。

周りを生きた心地にさせないまま休み時間を迎えた晃は、急いでそれを探しに出かけることにした。

今度は慎重に、とばかりに教室を出ると、晃は一目散に部室を指す。

校舎棟からクラブ棟に続く吹きぬけの廊下に入り、小太鼓のような音を響かせながら、敷かれたすのこの上をひた走る。

そして、使っていない下駄箱の中から鍵を取り出し、部室に飛び込んで。

それから……きっかり五分後。

「お、のれっ……」

晃はまるで憎い敵を逃がしたかのように（実際はノートなんか部室で広げるわきゃねーっ！なんて、内心半泣きで絶叫していたりする）そんな事を呟いて、部室を出てくる。

そして、その暗い雰囲気のまま鍵を元へあつた場所に戻すと、今度はあてもなくフラフラと歩き出す。

2時間目の休み時間が終わるまで、もう5分なかった。

悶々とした気持ちを抱いたまま昼までの授業を過ごさなければならぬのかと、晃がやりきれない気持ちで……傍から見れば呪われそうなおーラを発しながらやってきたのは、部活動に所属する生徒たちの自転車置き場だった。

すぐ脇には、静けさだけの残る、新しく建てられたばかりの弓道場が見える。

正面には背の低い柵があり、晃を含むなまぐさな人間が校門からまわるよりは近道だという理由で、真っ白なそれはたわんでいて。

「……………むっ」

と。晃の鋭い視線は、その白い柵のところまで止まった。

ちりちりとした嫌な焦燥感と、安堵感がブレンドされた心情の中、そこに引つかかっていた表紙のないノートを手取る。

それは、晃のノートだった。

ざっと見通してみたが、抜けている様子もない。

「ふむ。そう言えば、新曲の発売日チェックのために登校中に広げていた気もするな」

晃はなんだか自分を納得させるみたいにそんな事を呟いて、表紙のないノートの束をブレザーのポケットに折ってしまう。

そのノートは、晃の手帳代わりでもあって。

呟くことで確かに鞆からノートを取り出したことまでは思い出した

のだが。

いつに間に落としたのかは、晃自身全く見当もつかなかった。おそらくウォークマン（晃は未だにテープ派なので）を聞いてたので、落ちたことに気付かなかつたのだらうが……。

「しかし……まずいことになった、かもな」

大問題が発生したかのような深刻さで、そう呟く晃。たまたま偶然で、柵に引つかかっていたとは考えにくかった。誰かが、親切にもそれを拾い、ここにかけ置いたのだと考えたほうが、まだしっくりくる。

そして、その拾った人物は中身を見ただろう。

それが言葉通り、落とし主を捜し当て届けようとした親切だったのか。

こうやって目に付くところに置いてあることから分かるように、さらしものにもするつもりは親切だったのかは分からないが……。結局その呟きは、単純に恥ずかしかったからの一言につきる。

ただそうは言っても、個人を特定できるような情報はなかったはずであった。

もしかしたらタローや豊ならば晃がこのノートの持ち主であると気付く可能性はあったかもしれないが……それならば、朝会った時に話しのネタにしているはずなのだ。

故に、そこまで気に病む必要もない。

見つかったただけ僥倖だと、晃は自分で自分を納得させた。

不特定多数の人間に、自分の深いところまで見られてしまったかもしれない、なんて不快感は残るが、それはそもそも落とし晃の自業自得なのだから。

「…………まあ、仕方ない、か」  
全校生徒の噂の種になるようなことが書いてあるわけでもなし、晃はその事を極力考えないようにしつつ、その場を後にしようとして

薫る花びら纏うように…………。

現に有難き甘い少女の歌声が、部活棟の奥から反響して聞こえてきた。  
それはあたたかく、それでいて哀しげな、初聞にも拘らず心に染み入るメロディで。

「…………なっ!？」  
晃しか知りえないはずの詩で。  
それを聞いて、晃は膝の皿が砕けたかのように脱力する。  
せり上がってくる焦燥と羞恥。

「むごいことを…………」  
本当は、これって俺がノートに書きためてた自作の詩ぢゃねーのか！  
なんて叫びだしたかったのに、晃の口から出たのはそんな言葉で。

やっぱり誰かに見られていたのか、なんてへこみながら晃はよろよろと声のしたほうに向かう。

それでも部活の癖がついて、足音ひとつたたないのは、最早才能と言ってもよかったのかもしれない。

案の定、晃は声の主に気付かれることなく、歌声の出所まで辿り着くことができた。



その場所は……よく合唱部や演劇部、あるいは陸上部などが応援練習などに使う、グラウンドの見渡せるテラスだった。

形なき言の葉よ……。

「……………」

晃は、瞬きすら忘れて立ち尽くす。

そこには、女生徒がひとり、胸に手を添え、瞳を閉じて歌を紡いでいた。

まるで物語の中から飛び出してきたかのような……そんな幻想を湛えて。

それだけをとっても、当たり前前の毎日ではそうそうお目にかかれなそうなインパクトがあったけれど。

額を守るほどの大きめの白いカチューシャと、そこから何かの耳のように伸びてくる、染めたのでは生まれえない、太陽の下で初めて発現する赤色の髪に、晃は見覚えがあった。

彼女は、朝……入るはずのない場所において、そして姿を消した人物。

かみとくま・まさみ  
上徳間 榎美。

間近で見ると、語らずとも健気さが滲み出て来るような、可愛らしい少女だった。

何に縛られることもない小さなころの恋慕にも似た懐かしさを感じ、柄にもなく晃は動揺する。

「……………」

何をどう聞くべきなのか逡巡したのは、一瞬だった。

紡ぐべき言葉は出てこない。

……いや、それを口にする勇気がなかった、と言っているのかもしれない。

朝の部活の時に起こった不思議な出来事。

普通ならばそれこそ夢か幻覚だったと認めるべきことだけど。

世界とズれている晃には、非現実を知ってしまった晃には。

それが自分だけの妄想だとは到底思えなかった。

それは、物心ついた時からずっと自覚して求め続けてきた感動。

自分がズれていると気付いたあの日から、他人との共有を拒み続けた心の奥底にあつてゆるがせにできない感情そのもので。

その大切なものをないがしろにされて、嘲られることが怖かった。

誰にも否定ほしくなかった。

だから……晃は口を開けない。

我が声こゑを借りて……。

ただ立ち尽くし、その歌に終わりが訪れるのを待っていた。

朝起きたことについて口に出す気のなくなった晃の思考は、自然と

その歌に、歌い手へと流れていく。

休み時間にひとり、誰にも強制されず影ながら努力している。

何も知らなければ、そう思えたのかもしれない。

演劇部の期待の新人と言われるだけのことはあると、素人なりに晃が思えるほどにその声は力強く、やさしく、透き通っていて。

深く、心がこもっている気がした。

詩の世界に、入っていると書いてもいいかもしれない。  
当の本人ですら、演じている自分に気付かないほどに。

自分の所有物を勝手に使われているはずなのに、晃はまったく嫌な気分にはならなかった。

耳に入ってくる音階やイントネーションは、晃が漠然とイメージしていた範疇にしっかりと納まっていた。

自分よりもっと、この詩をよく知っているような、そんな気すら晃はしていた。

ここに来るまでもたげていた焦りや羞恥が、驚くほど薄らいでいる。

その姿を……。

清廉潔白とした空気を撒きながら最後の一節を紡ぐ彼女は美しくもあった。

その紡ぎだした言葉によって、本当に何かの奇跡が起こるのではないか、なんて思わせるほどに。

だが、その歌が終わりを迎えることはなく。  
唐突にその歌声がやんだ。

「あつ……」

続き、驚きとともに息をのむ声が聞こえてくる。

そこでようやく、彼女が晃の存在に気付いて歌をやめたのだと、気付かされて。

「……もつたいない」

そんな晃の呟きは、ほとんど無意識下のもとによるものだったけれど

ど。

紛れもない本音でもあった。

そこには、自分という存在が邪魔をしたせいで、芸術が未完のままに終わってしまった、なんて自分自身への迂闊さによる自嘲めいたものが含まれていて。

やっぱり晃はそのつもりなど微塵もないのに。

それを聞いたものにひどく冷たい印象を与えてしまう。

目の前の少女……榎美が、それをどう取ったのかは分からない。

刹那の膠着。

だが、引っ張られるようにここまで来て、それ以上何も言えないでいる晃に対し、

晃へと向けられた榎美の舞台栄えする赤の宝石を秘めたその大きな瞳は、めまぐるしく変化した。

初めに驚きから怯え。

それは、晃に対して初対面のたいていのものが当たり前のように見せるものだった。

タローに言わせれば、ただ晃の顔が怖いだけらしいけれど。

しかしその怯えは、すぐに別のものに変わった。

晃にはそれが、はっきりとは言い表せない。

ひどく馴染み深いもののようで、そうでないようにも思える瞳の揺れ。

葵の、晃に対しての敵意に似ているような気もするが……それはもつと晃に対して攻撃的な気がした。

なのと言うほど不快さを感じないのは、榎美の人のなせる業なのかもしれないけれど。

世界とズれているが故なのか、上辺だけの協調性をもてない……つまり、怒っている相手に対しては怒ることに対応してしまう晃は、自分の向けられるその表情を、鏡のように跳ね返す。それが、ひどく挑発的であることなど、晃は当然知る由もなく。晃自身にだけ自覚のないまま、一触即発な雰囲気は漂ったが。

「……あつ、そそのつ！？ご、ごめんなさい！つ！！」  
榎美は、文句のつけようのないくらいにうるたえ、慌てふためき頬を染め、涙目になりながらぺこぺこ頭を下げると、その突然の変わりように呆然としている晃が次の行動を起こすより早く、陸上部顔負けのスピードで走り去っていつてしまう。

傍から見れば、誰もがそれを自然なままのものと、感じただろう。それはあくまで、スイッチを切り替えたかのような突然の変貌に気付いていなければ、の話だが……。

「……まあ、いいか。なんか可愛かったし」  
それが綿密な計算の上でだろうが、天然素材だろうが、晃にはどっちでもよくなっていて。

結局。

さっきの詩のこと、ノートのこと、そして朝のことを聞き逃したことを晃が気付いたのは。

そのまま教室へ戻って授業を聞いていた、その時になってからで……。



## 第5話

それから、昼休み。

「ユタカ、ちよつと聞きたいことがある」

「何、トヤちゃん。いつにまして怖い顔で」

豊とタローとともにいつものように自席で弁当を並べてすぐ。

相変わらず気もそぞろだった晃が唐突にそう問いかけると、オーバーアクションをした後、なんだか楽しそうに豊が答える。

晃のことが面白いやつだからと言ってはばからない豊は、今日ももれなく晃に対して面白を期待しているらしい。

晃もそういう豊の分かりやすいところが嫌いではないため、こうして気安い関係が続いていると言えるが。

「別に怖い顔してるつもりはないんだが……まあいい。確かユタカは演劇部だったよな？ 上徳間柎美、という女生徒のことは知っているか？」

「ヒヒツ。晃から女の子の名前が出てくるとは珍しいな。……惚れたのか？」

一緒に昼食をとっている以上、横やりを入れるのは当たり前だと言わんばかりにタローが笑う。

「面白い事を言う。……言い得て妙かもしれないがな」

「おいおい、確かに柎美ちゃんは可愛いし、既にファンクラブ設立の話しまで拳がってるけどさあ、

残念だったな。彼女には内川豊という心に決めた人が……はっ、殺気！」

ブオンツ、バキヨツ！

「ふくおうっ!？」

両手上げてため息をつき、軽快なトークをかましていた豊だったが、風切って飛んできた香澄の二撃目である裏拳を後頭部に受け、そのまま机へと沈んでいく。

「…………ヒヒッ」

そのすぐ脇で、タローが引きつった笑みを浮かべているのは、通りがかった香澄の繰り出した一撃目のラリアットを豊がかわしたため、勢い余ってその一撃がタローの前髪を撫でたからだろう。

「素晴らしい動きだな。香澄さんは何か習ってるのか？」

それを…………一部始終見ていた晃は、感心した様子でそう呟いた。

豊の彼女（あくまで豊談）ということもあるからなのか、あまり女の子と話すことのない…………

女子が苦手な晃にとって、今の所一番会話の成立する相手と言えば彼女だろう。

名前で呼んでいるのはそんな彼女の希望だった。

初対面の時に名字で呼ばれるのは嫌いだと、そう言っていたのを晃は覚えている。

それは、晃自身はよく知らないのだが、彼女の父親が有名人であることに理由があるらしい。

正直に知らないと答えたら宇宙人でも見たかのようなリアクションをされたのが気になると言えば気になる晃だったけど…………。

「そう言えば、部活で殺陣を勉強する機会がありましたね」

「な、何を勉強してるんだよっ、あれはフリなのっ！ 本気で当てちゃダメなの！」

「そうですね、先程はすみませんでした寂蒔さん」

「え？ あ、うん。あれは余計なことを言ったボクも悪いしな」



唐突で対応できなかつたのか、いつものキャラすら忘れ気味でしどろもどろにタローは答える。

普段は堂々としているところか怪しげな雰囲気さえ醸し出すタローだが、そんなタローも晃同様、異性に緊張してテンパるタイプだったりする。

もしかしたらこっちが素なのではないかと、なんとなく晃はにらんでいたが。

「つくか、いきなり裏拳はないでしょうよ。香澄ちゃんてば。……

ああ、なるほど。大丈夫、安心して。香澄ちゃんのこともちろん愛してるから」

「……痛い目に遭わないと分からないみたいですね」「いででででっ！」

懲りてない豊がへらへらとそう言うと、見た目にそぐわない剣呑な言葉とともに豊の耳が捻り上げられて、宇宙人の耳みたいになる。

「いたい、いたいっ！こわれちゃうっ！」

「黙れ馬鹿」

続く悲鳴ですら、余計に煽ってることを分かってやっているのだから、ある意味感心してしまう晃である。

ただ、香澄の口調にも容赦がなくなってきたようなだし、そろそろ潮時だろう。

このままで豊の身の安全より、香澄の立場が危なくなってしまうかもしれない。

晃が言えることでもないが、そうでなくても香澄はクラスの中では浮き気味なのだ。

小柄だが私の強そうな美少女だからそうなのか、あけすけなくものを言う性格が災いしているのか、それとも他に理由があるのか……晃には分からない。

だが、今日も弁当持参でこれからひとり、他クラスへ出向こうとしているのは、確かに香澄自身がクラスに居心地の悪さを感じているからなのだろう。

自分の興味ばかりが先行していた一昔前の晃なら、何の躊躇もなく彼女がクラスで浮いている理由を聞いていたのだろうけど。

今は、それがただ晃の自己満足な好奇心を満たすだけにしかならないことであると、分かっていた。

それにきつと、知っていいことならば豊がとっくに話の種にしているはずなのだ。

「香澄さん、豊が愚かなのは日常茶飯事だろう？ 相手にしていると文字通り茶飯の時が失われるぞ」

「……うまいこといいますね。さすが晃さん」

お互いに、何気なく出た、いつものやりとりを終わらせる通過儀礼のようなものだったのだろうけど。

笑顔でそう言う香澄の言葉に、晃は引っかかるものを覚えた。

特に、さすがの部分にだけど……。

「ところで、榎美さんの話をしてみたいですけど、何か用事でもあるんですか？ これからお昼を一緒に向かうところなので、何かあれば伝えておきますけど」

香澄が思い出したように話題を変えたので、晃のその感覚はすぐどこかにいってしまった。

「ああ、トヤちゃんさあ、榎美ちゃんにコケるらしいぜ」

「えっ！？ ……ほんとうですか？」

そして、いつの間にやら復活した豊がニヤニヤしながらそう言うと、何故か今度は疑いもせず、ただ驚きの声をあげる香澄。

「勝手に話を捏造するな。誰もそうは言っていない……興味があるのは本当だが」

晃は慌てて豊の言葉を否定するが、出てきた言葉はあまり否定していないことを、晃はきつと気付いてなくて。

「そうですか。さすがにそれはちょっと……言伝ってわけにもいきませんね」

「ああ、確かに。できるのなら上徳間さんに直接話したいことだからな」

「ヒヒ。見事に話が噛み合っていないな。……いや、噛み合ってるのか、これは」

しみじみとそう言う香澄と晃に、タローが可笑しそうに横槍を入れて。

豊はそれを見、やれやれとため息をつく。

「この際だから昼、一緒するか？ 榎美ちゃんて確か8組だったっけか。向こうの面子は？」

「ええと、葵さんと奏子さんと、後は……テニス部の小船山先輩ですかね、いつものメンバーは」

「なんだ、それじゃあだいたい顔見知りのメンツじゃん。可愛い女の子たちと昼食、最高じゃね？」

「……誰もOKだなんて言ってませんけど」

「えー、いいじゃん？ みんなで楽しく一緒に過ごした方が、有意義っしょ」

再び調子に乗ってくる豊に、ちよつと憮然とした表情の香澄。

「葵ちゃんもいるのか……」

一方、そんなやり取りを聞いていて、もしかしたら自然な流れで榎美に今日起きたことについて聞けるかもしれない、なんて思っ

た晃は、あからさまに落胆してみせる。

「あれ？ 晃さん、葵さんと何かあったんですか？」

きよとん、として問いかけてくる香澄に、晃は我に返って苦笑して「何かあったって言うか……嫌われてはいるようだな。身に覚えのないところが困ったものだが」

そう答える。

せめて、こんな風にまともに会話ができればこれ以上嫌われないよう努力もできるのに、なんてことまでは口にはしなかったが……そのニュアンスは伝わったのだろう。

「そうなんですか？ それはそれで珍しい話ですね。もともと人付き合いの得意な方じゃないとは思ってましたけど、そこまで葵さんがあからさまな態度を取るなんて。一体何をやらかしたんですか？ わざとなのかそうでないのか。結構きつい言葉が返ってくる。」

「それが分からないから、困ってるんだけどな、いろいろと」

「案外、分からないってあたりに原因があったりして」

「……成る程」

それは盲点だったと、深く頷いてみせる晃。

いったん思考がひとつのことに偏ってしまうと、その他のことは切り捨ててしまう傾向にある自分には、それは有り得ることもかもしれない、なんて晃は思っていて。

しかしそうならそうと言ってくれればいいものを、とか考えてしまふところが、晃の無粋なところで。

「んじゃ、善は急げってね。早くしないと昼休み終わっちゃう」

と、すでに食べかけの弁当を仕舞い直し、行く気満々の豊がそこにいて。

「まあ、全く知らない仲でもないですし平気、かな」

ため息をつきながらさっさと出て行ってしまふ豊を追いかける香澄。

「……フヒヒッ。宣戦布告ってわけだ。面白いな、実に面白い」

ひとりぶつぶつと何やら呟き、不気味な笑い声をあげるタローがそれに続く。

晃がやっぱり気まずいからいいや、なんて言える余地すらなくて。

「……まあ、いいか」

こういう展開になっていなければ、豊のついで演劇部に顔を出すつもりでもあつたし、先に話ができるのなら、願ったり叶ったりでもある。

晃はそう自己完結し……その後に続いたのだった。

厄介なことにならないければいいな、なんて淡い期待をしながら……。

そんなわけで、急遽決まった昼食会。

人数が多いこともあって、誰かがいつの間にかやら設置したらしい大人数用のサーキットテーブルのある屋上で食べよう、ということになったわけなのだが。

「……ちょっと、ものすげーびりびりしてるんすけど。何この修羅場、いつもこうなわけ？」

「……そんなわけないでしょ。私にだって何でこんなことになってるのか分からないんですからっ」

小声で豊と香澄がそんな風に言い合っているのが聞こえる。

その正面では、晃の一挙手一挙動を見逃さぬようにと睨みつけてくる葵の姿。

その隣には、葵とは別の意味で、晃を観察するかのように見据えている女生徒がいた。

おそらく、彼女が香澄の言っていた小船山先輩なのだろう。

茶色みがかった長い髪は、いかにもテニスが似合いそうなカールがかかっている。

その気位の高そうな瞳には、大人の余裕のようなものが感じられる。晃はその二人に、何だか似た雰囲気を感じつつも、その視線に表向きだけは平静を装っているように見せた。

内心は居心地が悪すぎて逃げ出したい気分だったのだが……。

そんな晃とは裏腹にその隣では、さつきから不気味な笑みをやめないうたローが、何も言わずその状況を見守っている。

葵の左隣にいる奏子などは、その場の緊張感に耐えられずに、ただおろおろしている。

そして……ただ一人。

そんな緊張感とその場の雰囲気全く気付いた様子もなく。

何故か大量のウサギリンゴをおいしそうに頬張っているのが、榎美だった。

昼食会の輪の中に晃がいることに初めは驚き、何か言おうとして葵に止められて。

バツが悪そうにぺこぺこ頭を下げていた榎美だったけど。

食欲には勝てなかったらしい。

誰も自分の弁当に手をつけない中で一人、満面の笑顔でリンゴをつつき始めて。

ある意味、この場をもっとも楽しんでいる、と言ってもよかったかもしれない。

そんな疋美を見てるうちに、すっかり晃が毒気を抜かれていると。この場の長は自分である、と言わんばかりに葵が口を開いた。

「……一体、何をたくらんでいるの？」

その葵が、怒りにもた表情をしていたせいもあつただらうけど。売り言葉に買い言葉。

返す刀で葵を睨みつけてしまつのを止められず、晃はそれに答えた。

「理解に苦しむな。何故君はそうなのか、俺には皆目見当もつかない。君の言っている意味が分からないのは、百歩ゆずって俺のせいだしよう。しかし、せつかく香澄さんがお互いの友人同士、親交を深めようとしているのに、その態度はないだろう？ たとえ俺のことが憎かるうが、それをこの場に撒き散らし、周りのものを不快にさせる必要などあるまいに」

「……不快にさせてるのはあなたじゃない」

「俺は君の態度を反射してるだけだ。……それとも、不快なのは俺の存在、とでも言いたいわけか？ 俺がいなければこの昼食会は楽しいものになる、と？」

その場の空気がそうさせたのか。

晃は、自分の首を絞めるかのような……言わなくてもいいことまで口にしまつ。

それによって起こる、恐ろしいまでの静寂。

晃が我に返つたのはその時で。

「……そうよ。そういうことよ。分かてるんじゃない。あなたがいなくなればそれでいいのよ」

そんな晃に投げかけられる、決定的な言葉。

「……はは。そうか。……それは悪かつたな」

すつと、晃は立ち上がる。

そこに浮かぶ表情は、場違いなほどの……晃が普段から滅多に見せることのない笑顔だった。

黒彦葵が十夜河晃を嫌いな理由。

そんなものは身に覚えのないものだ、そう思っていた晃だったけれど。

ちゃんと理由はあったのだ。

キラいなのは、十夜河晃の存在自体。

これほど簡潔で分かりやすい答えもないだろう。

きつと、晃が気付かなかっただけで、まだ幼い頃の……毎日のように葵の家に遊びにいらしていたことすら、彼女にとって本当は迷惑だったのかもしれない。

はつきりと、葵の口からその言葉を聞いたこと。

もちろんそれは悲しかったけれど。

嫌われる意味が分かったからなのか、いっそすがすがしくもあって。

「あつ……」

葵が何か言おうとしていたが。

その時には既に、晃は屋上から飛び出していた……。



## 第6話

あの場から去ること、打って変わって昼食会が明るく楽しいものになるとも思えなかったが……。

あそこまできっぱり言われたのなら留まる方が気まずいだろう。

晃はそう思い、屋上を後にしたのだが。

「……こんなことじゃ、使命どころじゃないじゃないか」

容赦ない葵の言葉に、それこそ泣きたいくらいショックを受けているってことを悟られるのが情けなく恥ずかしい、といった意味もあっただろう。

「部活もやめるべきかもしれないな」  
階段の踊り場からベランダに出て。

壁に寄りかかるように座り込み、そんな事を呟いた。

どんだん思考がネガティブに、マイナスに傾いてゆく。

何か一曲、どん底に悲しい曲でも聴いてやる気と元気を回復させないと、何もする気が起きないくらいに。

と。

「あの、十夜河くん」

「……ぬおっ？」

「わわっ」

音もなく気配もなく突然声をかけられて、思わず晃が飛び上がると。そんな晃のオーバーリアクションに目を白黒させている、榎美の姿があった。

「……なんだ、止めでも刺しにきたのか」  
表向きだけは落ち着きを取り戻した晃は、そんな事を言っただけで自虐的な笑顔を見せる。

すると、それをもちろん冗談とは受け取らなかったのか、子供みたくにぶんぶんと首をふって柗美は言った。

「そんな事言わないで、十夜河くん。葵ちゃんはね、ほんとはあんなこと言う子じゃないんだよ。」

ほんとは心のやさしいいい子なの。十夜河くんが嫌いなんじゃなくて……ただ、勘違いしてるだけなの。だからお願いっ、葵ちゃんを許してあげて」

「勘違い……一体何を？」

あるいは誰と、だろうか。

反芻し聞き返すと、柗美は言葉を続ける。

「葵ちゃんね、十夜河くんに命を狙われてるって思い込んでるんだよ」  
「よ」

「……」

言われたことが、すぐには理解できない晃。

「はは、命を狙ってる、だって？ 言い繕うにも、もっとマシな理由があるだろう？」

思わず晃はそう言い、鼻で笑う。

だが柗美は、そんな晃にすぐ反論してくる。

「嘘じゃないよ！ 葵ちゃんはほんとにそう思ってるんだよ！」

「……何故？ 何故葵ちゃんは俺が命を狙っていると、そう思うんだ？ 自分が命を狙われる理由があるとでも？」

それは、嘘にしてはあまりにも奇抜すぎたから。

柗美が嘘偽りなく、本気でそう言っているように見えたから。

反射的に晃はそう聞いていた。

すると柗美は、その言葉に大げさなほどの反応を見せる。

「そ、それは……」

続く言葉が出てこず、奪われる柗美の表情。

それは何だか晁を恐れているようにも見えて。

「……例えば葵ちゃんの正体は世界の破滅をたくらむ魔王か何かで、逆に俺はそんな魔王を倒すための使命を負った勇者……とかなら辻褃はあう、か？」

言っていて自分で馬鹿らしくなってくる晁である。

葵だけじゃなく、目の前にいる柗美にすらつきまとう自分に対しての怯えのようなものを払拭したくて、思わず口から出たしょうもない冗句、だったのだが。

自分の冗談は通じないのだと、晁はつくづく実感させられてしまった。

……いや、この場合はちょっと意味合いが違うのかもしれないけれど。

「やっぱり、そう……なの？」

まじめな顔？ あるいは怒っている？

そう呟く柗美の表情は、一言で言い表すのは難しかった。

まるで表現したいものを封じられているかのような……表現の仕方が分からないかのようにも見える。

晁はそれに違和感を覚えたけれど。

「そんなわけないだろう。……いや、すまない。ちょっとした冗談のつもりだったんだが」

何だかいたたまれなくなつて、晁は頭を下げる。

すると、柗美は首を傾げて。

「冗談？ じゃあ、十夜河くん、葵ちゃんの命を狙ってるわけじゃ

ないの？」

確認するかのようになんかことを聞いてくる。

晃は思わずため息をついて……肩を落とした。

「当たり前だ。命狙ってるってワケ分からん。一体誰がそんなそれこそ冗談にもならないことを吹き込んだんだ？」

「えつとね、英理お姉ちゃんが後輩のテニス部の……あ、そうそう。さつき十夜河くんの隣にいたひとだよ。あの人から聞いたんだって」

（あの野郎……）

だからあんなニヤニヤしてやがったのか、と今更ながらに思い出す晃。

冗談にしては度が過ぎているというか、信じる方も信じる方な気もするが。

晃は知っている。

春になってこの地に戻ってきた晃より先に、この地にやってきていた使命の前任者である寂蒔太郎と言う男ならば。

使命を果たせなかった腹いせに晃の邪魔をしてやろうと平気で考えそれを実行する悪魔なヤツだったことを。

まあ、腐れ縁とも言える長いつきあいだから、どうせ怒ったって、

『ヒビ、潤いのない日常にキミの望むものを提供してやったのさ』とか言われる事は分かっていた晃だったけど。

「はう、よかつた。そうだよ、うん。あんないいお話かける人が、そんなことするわけないって思ってたんだよ」

とても嬉しそうな顔で手を叩く柗美。

打って変わって見てる方まで心が和む、そんな笑顔を浮かべている。しかし、晃にとってはどうにも聞き捨てならない台詞がそこに混ざっていて。

「ちょっと待て。あんないい話書けるって……一体何をしてそんなことを言うんだ？」

「え？ あっ、えと、それはっ、ほら、ユタカくんから聞いたんだよ？」

「すぐにバレる嘘ならつかない方が賢明だな。……いいかどうかはともかく、ユタカとそんな話題で盛り上がったことなど一度としてない」

豊と話すのは大抵音楽の話だった。

近しい間柄だからこそ、恥ずかしく『読書』趣味の話はしたことなかったのだ。

それを、顔見知り程度の柗美が何故知っているのか。

別に嘘をつくことを絶対悪だと思っているわけではない。

ただ、それに慣れているところのある晃は、どうしてそんな分かりやすい嘘をついたのかが疑問だったのだ。

だから、晃はその真意を問おうと、柗美の、朱の混じった瞳を見据える。

それが、相手を射殺さんばかりであることに、やはり本人は気づくこともなく。

案の定……柗美の瞳が波打った。

一瞬だけ、きつく言い過ぎたのか？ なんて思った晃だったけど。

「ごめんなさい！ 悪気はなかったんだよ？ 間違えて拾っちゃったの。そしたら何か面白い話とか乗ってるし、ほかに魔法みたいな詩とかすごいなーって」

柗美はすごい勢いで首をふりつつ、まくし立てるように……半ば混乱した様子でそう言った。

何かの耳のように前方に伸びた髪が、ぴよこぴよこと揺れる。

「ほう。それじゃあ2時間目休みのあれも悪気があったわけじゃない、と」

「うんうんっ、すっごく感動して思わず歌っちゃったんだよ！ 晃くんのポエム！」

いつの間にか名字で呼んでいたのが名前呼びになっていることすら気づかないくらい、動揺しているらしい。

もうすでに、晃はやり場のない羞恥と怒りからくる震えを止められそうになかった。

「……成る程。やはりそうか。よく分かったよ。俺の顔を見て逃げ出したのも悪気はなかったと。見たらすぐに逃げ出したくなる顔だから仕方ないと、そう言いたいわけだな？」

「うううっ」

まさしく、ぐうの音も出ない、というリアクションをする柗美。

そして、そのまま恐縮したように俯いたままの柗美を見て、晃はひとつ大きなため息を吐いて空を見上げる。

やっぱり自分は皆の言う通り、逃げ出すくらいの顔をしているんだなと内心へ込こみつつ。

「……まあ、落とした俺も悪いからな。自業自得、ってヤツか。俺が言うのもなんだがあまり気に病まなくていい。上徳間さんじゃなくて拾ったのが俺だったら、多分似たようなことをしていただろうしな。……いや、流石に曲を付けて歌い上げるようなことはしないと思うが」

苦笑しながら晃はそんなことを言う。

本当はちよつと、いい話だとか感動したとか、お世辞でも建前でも言ってもらえたのが嬉しくて。

これ以上怒ったりする気も筋合いもないだろうと思っていたからだ。

「……怒ってないの？勝手に中身読んじゃったのに？」  
やがて伺うように、榎美が顔をあげる。

「何か、上徳間さんの慌てっぷりを見てたらどこかに消えたよ。あ、でも」

「で、でも？」

言葉を止める晃に、びっくりと跳ね上がる榎美。

その前髪のせいもあって、それはなんだか寒さに震えている小動物みたくにも見えて。

「気になることがあると言えばあるな。……ほら、今間違えて拾ったって、そう言ったらろう？一体何と間違えて拾ったのかな、と」  
晃自身がそう言ったように。

相手の態度や雰囲気、あるいは表情を鏡のように写すその口調は柔らかく。

そう言う晃の表情にもトゲトゲしいものが消えていて。

そんな晃を見てぼかんとしていた榎美は、しかしすぐに我に返り、ううむと悩みだす。

そして、しばらく晃をちらちらと伺っていたが、やがて意を決したのか再び口を開いた。

「えっとね、その、本とかノートとか巻物とか……読む媒体なら何でもなんだけど、この六加市にはね、たくさん落ちてるんだよ。いるんなとこに」

取って置き秘密を打ち明けるように。

もったいぶって間を置いたあと、榎美は言葉を続ける。

「でもそれはただの本じゃなくて『旅の本』っていう本の中の世界を旅できる不思議なものなんだ。

それでね、今日の朝たまたま近道を通ったら、はだかんぼのノートが落ちたの見つけて。あっ、こういうのもあるんだなーって、どん

なお話なのかなって。……それで、拾って、中身を見ちゃったの」

突拍子もない言葉。

そう片付ける事は簡単だったけれど。

晃はそれをそんな風にはとらなかった。

いや、思えなかったというほうが正しいのかもしれない。

朝練のときに起こった、不思議な出来事。

信じられない世界の光景。

確かにそこにいたはずの榎美の姿。

普通じゃない、確かに普通じゃないが……榎美の言葉と朝の出来事を符号させれば、なんだか辻褄が合う、そんな気がしていて。

「もしかして上徳間さん、今日の朝、茶城山ちやしろに続く土手道のところにいたりしたか？ ほら、大きな老人ホームが近くにある」

「え？ うん。いたよ？ よく知ってるね、晃くん」

すぐに返ってくる、晃の考えを肯定する、そんな言葉。

「それでは、あの赤い空の世界も……？」

そう言う晃は、変な高揚感、あるいは焦燥感に襲われていた。

それは普通じゃない、現実ではありえないと思われていた……晃のずっと求めていたもの。

しかし今では確かに存在している、晃の使命に直接関係するだろうもの。

『フェアリー・テイル』。

それが、晃の前に明確に姿を現しただけでなく。

晃のようにその存在を知り、共有してくれるかもしれない者が目の前にいたからだ。



それを知っている彼女は何者なのだろうかと思はう。  
晃のような同じ穴の貉は、確かに存在してはいるはずだが……。

「ええっ!? 晃くんも『旅の本』の世界に入ったの!? すごい、すごいよっ! わたし、わたし以外で本の世界に入れる人に会ったの晃くんが始めてだよ!」

対する柗美は、随分と興奮し、喜んでいるように見えた。

今にも手を取り合わん勢いで身を乗り出してくる柗美に、ただただ晃が戸惑っている。

柗美は自分を落着かせるみたいに大きく深呼吸し、再び顔をあげる。

そこには花咲くような笑顔が浮かんでいて。

その薫りすら届いてくるような、そんな気がして。

心臓が自棄のように動き出す感覚に翻弄される晃。

「ねえ、晃くん! だったら晃くんもわたしと旅しない?」

それは、非日常の誘い。

「……ああ、別に構わない」

それは願ってもないことで。

晃にそれを断る理由などあるはずもなく。

俯いてそう答える晃。

たぶんきつと、嬉しさとか喜びとかわくわくとか、色々なことがごちゃ混ぜになって……とてつもなく変な顔を、していたらうから。

「やった! じゃあこれからは同じ旅の相棒だよ。他人行儀もなしだからね。わたしのことは名前で呼んでね、晃くん?」

しかし、柗美はそんな晃に構わず、下から覗き込むようにしてそう言うてくる。

「分かった。嬉しいのは分かったから。ちょっと離れてくれ柗美さ

っ……」

渋い顔をしてそれでも何とかそう答え、何だかいてもたってもいられなくなって晃がベランダから出ようとすると。

「わたしはちゃん、じゃないんだね？」

あるうことかそれについてきた柗美が、そう呟いて。

まるで捕まえるかのように……晃の手を握ってきた。

それは柔らかく、弱いぬくもりの手のひらだった。

少しでも力を入れれば、儂く消えてしまいそうなほどに。

「え？ ちょっと、まっ……」

「ま、いつか。……よし！ その調子で葵ちゃんの誤解も解いて仲直りだよ！」

手を握ってきたその意味は、文字通り晃を逃がさないためだったのだろう。

哀れなほどに狼狽える晃を気にした風もなく、ぐいぐい引っ張って階段をあがってゆく柗美。

なされるままの晃は、しかしすぐその言葉の意味に気づき、はっと我に返って立ち止まった。

急に静止の力が加えられた柗美は、転びそうになって慌てる。

「わ、ど、どうしたの？」

「いや、しかし。今戻っても気まずいだけじゃ」

「平気だって。今頃葵ちゃんだって酷いこと言っちゃったって落ち込んでるもん」

「葵ちゃんのこと、よく知ってるんだな……」

それは何気なく出た言葉だったけど。わずかな羨望も混じっていて。

それを柗美が察したのかどうかは分からない。

ただ、元気よく頷いて。

「うん。もちろんだよ。仲良しさんだからね。……大丈夫だよ。だって晃くん話してみたら全然話しやすいし、いい人なんだもん。きっとすぐに葵ちゃんもその事分かってくれるよ」  
そう言った。

まるで晃の背中を押すように。曇ることのない笑顔で。

なんて綺麗な笑顔をするのだろうと、晃は思った。

あまりに綺麗すぎて、それは現実では演じなければ存在できない……

…そう思っくらしいに。

あるいは、たとえ嘘でも構わない、なんて思えるくらいに。

だから……。

結局晃は、その手をほどこうことができなかつた……。

## 第7話

「ごめんなさい……言い過ぎたわ」

「いや……こちらこそすまない」

「そう言いながら睨み合うなよ。………つたく」

それこそ、柗美が望む通りに。

屋上に戻った晃を待っていたのは、葵のおおよそ信じられないくらい、真摯な謝罪だった。

どうやらあの後、驚くべきことに豊が何やら葵を諭したらしいというのは、香澄から後で聞かされることになるのだが。

常に軽いノリの男だが、熱いときは熱いらしい。

そう言う豊がなんだか格好よく見える。

ちなみに、お互い睨みを効かせているのは、諸悪の根源であるタロ―が葵の背中後方にわざと隠れていたり、柗美と手を取り合っていてきたことに葵としては酷く不満があったりと、一応理由はあったりするのだが。

まあ、流石にこれだけですぐ仲良く、とはいかないのだろう。

晃自身、本当の意味で葵が晃を嫌う理由が棚上げになっていることくらい、ちゃんと分かっていた。

『晃が命を狙っている』………なんてタローの言葉を、葵が信じるほうがおかしいってことくらいは。

しかし、別に棚上げだっていいじゃないかと、晃はそう思うようにしていた。

たとえば晃そのものが純粹に嫌いなのだとしても、こうして表向きでもうまくやっていけるのなら、事なかれでもいいじゃないかと。

そんな晃の考えが、間違っていた事など……そのときは知る由もなく。

それから放課後、部活の時間。

『さっそく旅に出ようよ！』

なんてうきうきな榎美に誘われたのだが、晃という男、これがまた真面目なところがあって。

『部活があるから駄目だ』、とにべもなくそれを断っていた。

むくれる榎美だったけれど、榎美だって部活があるだろうし、そもそも『旅』に出るなら色々準備が必要だろうと考えたからだ。

というか、未だ踏み込む勇気がない、と言ったほうが正しいのかもしれない。

その『旅』とはいったいどういうものなのか。

何が目的なのか、とか。

知らなければならぬことが多すぎて、その説明がまず必要だろう、という話になったのだ。

まあ、どちらにせよ、部活終了後時間が合えば、ではあるが。

明日は祝日なのでその時でもいいかもしれない。

なんてことを部活動開始と同時に始まった、東雲高校陸上競技部オリジナルの体操をしながらは晃が考えていると。

「おい、十夜河君！。ニヤケてると黒彦さんが凄い目でこっち睨んできてヤなんですけど」

横合いから剛史ののんびりとしつつも毒のあるそんな呟きが耳に入ってきた。

「……………」

「…………」  
なるほど、確かによりもよって対角線上にいる葵が、変わらぬ睨みで晃の方を見ている。

……いや、今回ののはちゃんと理由は分かっていた。

晃がその口にできるほどではないはずだが、榎美と仲良くなったのが多分お気に召さないのだろう。

(…………浮かれているのは確かか。自重しよう)

でもよく考えれば、ちよつと話が通じるって分かつたくらいで休日の都合はどうだろうかなんて考えるのは調子に乗っていると思われなくても仕方ないのかもしれない。

そういう意味では葵が睨みをきかせるのは分かる気がする……なんて自虐的なことを思いつつ、晃は気を取り直して体操に集中した。それでもやつぱり、葵はずっと晃のことを睨んでいたけれど。

「今日の一年のメニューは、jog<sup>ジョグ</sup>だね。仲良くよろしく頼むよ」  
そして、体操が終わってすぐ。

空気が読めているのかいないのか、長距離パート三年の部長が男女の一年を見渡し、そう言い放った。

その場に流れるいいような悪いような何とも言えない空気。

もっともそれを感じたのは晃ばかりなのかもしれないけれど。

その理由の一つは、jogという練習が東雲高校陸上競技部長距離パートにおいて、一キロ五分ペースの八キロ走のことで、練習や試合で疲労した身体を回復させるための休息トレーニングであり、正直に言えば楽だからという安堵によるものだろう。

もう一方は、そのjogメニューが、男女合同であるといった気まぐさによるものだ。

入ったばかりの頃なら、八キロも走って何故休みなのだろうかと理

不尽に思っばかりだっただろうが。  
今では本当にそれで身体が休まるのを晃は知っている。  
他のメンバーもそれは同じだろう。  
そうなるかと、否が応にもその場の雰囲気を意識せざるを得なくなる  
わけ。

そんな中、晃たち一年生は、グラウンド脇にある陸橋へと続く横道  
に出て、走る前の軽い運動をする。

このメニューにスタート地点は存在しない。  
当然ゴールも同じで。

ようは決められた40分間が過ぎるまで走ることになる。  
加えて、特に指定のない限り走る場所が決められているわけでもな  
かった。

この六加市全てがコースになる。  
晃にとっては、単純に楽なメニューのせいもあったけれど、そう  
いう自由なところがお気に入りメニューでもあった。

せめて、表向きだけでもいいから楽しく走ればいいな、なんて思  
いながら晃は自然と最高尾に位置どり、腕時計をセットする。  
走るためのタイムを計れる時計どころか、シューズすらもっていな  
かった晃がこの部のためだけに買ったお気に入り。

黒いボディがごつごつして走るにはちょっと重いが、その重さすら  
気に入っていた。

「んじゃ、始めますか。今日はどこに行く？」

と、大介が晃の杞憂など払拭するかのように明るい調子で一同を見  
渡した後、最後に葵の方を伺った。

「……そうね。朝、男子が走ってるコースが走ってみたいわ」

「いいけど、それだと時間余っちゃうよ？」

「途中で茶城山によりましょう。公園の芝生の上を走るのもいいんじゃないかしら……天気もいいし」

朗らか、と言うか普通の会話が成立しているのを見て、内心驚く晃。いつもだったら聞いてもどこでもいい、なんて返ってくるのがせいぜいだったのに、一体どういう風の吹き回しだろうと。

晃がそのやりとりで感じるのは、葵に対しての違和だった。たとえば、何か別の意図があるような……そんな気がしたのだ。

(……こんなことを考えてるようじゃ嫌われて当然か)だが、そこまで考えて、葵に対して妙なレッテルを貼ってしまったている自分に気づく晃。

誰だって、敵意剥き出しにして気を張り続けるなんて嫌に決まっている。

きつと……彼女は気付いたのだ。

そんなことをしても自分にとって何の特にもならないって事。

あるいは、それほどまでに豊の喝が効いたのかもしれない。

今更ながらその場にいなかったことにちよつと後悔する晃である。

豊は恥ずかしかつていたのか何も言っていないなんて言っただけでくれないし……今度香澄にでもいてみよう、なんて思いつつ。

「よつし、それでいこ。いざ出発ーっ！」

そして、そんな大介の命令とともに一斉に腕時計のストップウォッチの作動する電子音が響いて……今日の練習が始まった。

陸橋を越えて線路を通過し、他愛もない話をしながら歩道脇を赤い集団が占拠する。

なるべく車通りの少ない道を選びながらいつもの土手道へ。

「そう言えばさー、聖火リレーのサポートランナーの通知って回っ



た？」

「うん、うちのクラスはもう回ってますよ」

「参加に した人いた？」

「いなかっただんじやないかな。私は×をつけましたけど」

先頭に葵と大介、次に剛史と奏子、そしてその後ろに晃。

たった五人の一年生長距離パート。

それでも去年よりは多いというのだからこの種目のハードさが窺えるわけだが。

そんな中、剛史がふと思いついたように隣の奏子に話かける。

キ口五分ならば、のんびりと歩いていようが変わらない、そんなやりとり。

そこに慣れというもののすごさを感じずにはいられない晃であったが。

「黒彦さんは？」

と、そこでよりもよって剛史が葵に話題をふった。

しかも、何だか親しげに。

一瞬やばいんじゃないかと晃は思ったが。

「ええ、私も×ね。なんとなくだけど」

そう言えば剛史は葵と同じ8組だし、その程度は日常なのだろう。

晃の思考が独りよがりであることを証明するかのように何事もなく葵がそれに答える。

「まあ、ほとんど歩くくらいのスピードでちよつとの距離だしねえ  
それに続いて大介が、賛同するような呟きを発つしているところを  
鑑みるに、どうやらみんな×をつけたらしい事が分かって。」

「……だが、全校に回って希望者がいなかったら、俺たちの所にお

鉢が回ってくるんじゃないか？」

気づけば晃は、そう口を挟んでいた。

あまりに会話がスムーズであったから、ほとんど無意識に。

自分が口を挟んだらまずいんじゃないかなかろうかと晃が思い立ったのは、全ての言葉を吐き出してしまった後で。

「うーん、そうだったら……参加するかもです」

「そだね。そうだったらしゃーないか」

だけど、そんなことを気にしていたのは晃だけだったらしい。

すぐに奏子と大介の言葉が返ってくる。

「……もしかしたら有名人と走れるかもしれないしな」

「はは、そんな都合よくいくかなー」

「……流石にそれはないと思うけどね」

安堵の勢いで口からついて出た晃の言葉。

返す剛史の気の抜けた笑い声に続いて、独り言のような葵の言葉。

晃は最後尾でそんな葵の背中……昔は長かった黒髪を見ながら、驚きに目を見開いてしまった。

それはちよつと否定的なものだったけれど、晃にとってみれば大きな前進だった。

昔なじみのよしみを信じて使命のためと東雲高校へ入学して早三ヶ月。

まともな会話ができた　これが初めてで。

それ以上の何があったわけでもないのに、自然と弾む晃の足取り。

それは、このやりとりがきっかけに普通の関係が築けるんじゃないかって。

そう思ったからなのかもしれない。

晃はその時確かに、使命達成への第一歩を、感じていて……。

そんなこんなで。

練習時間が半分ほど過ぎた頃。

いつもの朝コース……いつもと違う不可思議な出来事が起こった坂道では、一人緊張していた晃だったけれど。

特に期待していたような事が起こることもなく。

朝コースを抜けてしばらくすると、茶城山へと続く山道へと入った。

茶城山は標高千メートルを超える、六加市の観光地の一つである。

六加市自体も三百メートルを超える標高があるせいか、背の高い山というイメージはないが、その敷地はなだらかでとにかく広かった。そのうちの半分が動物園と博物館、そして恐竜公園で占められている。

恐竜公園とは、文字通り恐竜のいる公園だ。

……と言っても当然つくりものではあるが、そのほとんどが実寸大らしい大きさを座していて、中には宙に浮かぶ（吊されている）ものや、遊具のように中がくり抜かれてあって遊べるもの、電動で動くものもあった。

その公園には、他にも山の斜面を利用した長いローラーの滑り台や、アスレチックなどがあり、入園にお金がかからないこともあって、晃が小さい頃からよく遊びに来ていた場所でもある。

現在では、東雲高校から近いことと、距離を変えてぐるりと一周できる山道がいくつもある好立地のおかげで、陸上部の練習に使われることの多い場所だ。

「小コース回ってくればちょうどいいくらいかな」

「……そうね」

公園の看板のある入り口までやって来てすぐ、大介がそう提案した。それに葵が賛同し、とくに反論もなく進路をそちらに向ける。

(……ん?)

と、長い桜並木の続く木陰の土手道に入ったときだった。左手下方、そこは野球グラウンドやアーチェリー部の練習場ある場所だった……から、強い光が発せられているのを感じ、晃は視線を向ける。

そして、眩むほどの目を見張った。

視力の悪い晃はそれからすぐにそれがなんなのか見極めようと眉をよせる。

実は目つきが悪かったり顔が怖い、なんて言われるのはそのせいでもあるのだが。

そこにあっただのは、自らで発光し続け、宙に浮かぶ何かだった。

アーチェリーの射的の据えてある辺り……敷居の外、裏手だろうか。宙に浮かぶその光が、普通でないのは確かだろう。

しかしはつきりとそれが何であるのか……見えないのがもどかしく、思わず立ち止まる晃。

「ん?十夜河君どうかしたー?」

それに気付いた剛史がしばらく進んだ所で立ち止まり声をかけてくる。

すぐに他のメンバーもそれに習って晃を見てきた。

我に返った晃は、一瞬悩む。

宙に浮かぶおかしなものが光っている。

それは、確かに晃の目に見えるものであつて事実のはずだから、そのことをそのまま口にすればいいだけの話であるのだが……。

少し考え、晃はアーチェリー上の方へと視線を向ける。

相変わらずのまばゆい光。

それは人工的なものではなく。太陽の光とも違っていて。

「アーチエリー場に何かあるんですか？」  
つられて同じ方向に視線をやった奏子が、小首を傾げて呟く。

(……おかしい)

その言葉を聞いて、すぐに晃はそう思った。

どうやら奏子にはあの光が見えていないらしい。

と言うより、光のある場所は今いる土手道より低い場所にあって見通しもきくから、晃よりも先にその光に気づいても良さそうなものだが。

剛史も大介も葵も、その光に気づいていないように見えた。

「時計止めてないんだから、何かあるなら早くして」

少し怒りかけの葵の言葉。

だが、彼女は別に間違ったことを言っているわけではない。  
走っている途中で身体を止めてしまうのは、あまりいいとはいえないからだ。

「……すまない。トイレに行ってくる」

だからそれは、自然と出た嘘だった。

どうしてそう言ったたのか……晃にも分からない。

ただ、あれがなんなのかどうしても確かめたかったのは確かだ。

「またかい晃君？ 走る前に行っておけばいいじゃん」

「……それができないから、困るんだ」

脱力したような笑顔で大介が言う。

練習限定ではあるが、走り出すとトイレに行きたくなるのは事実なので、大介は全く疑ってないようだ。

それがよくあることなのは、女子の方にも伝わっているらしく、奏子は対応に困ったような笑みを、葵は呆れたような顔をしていて。

「行つてきなよ。先に行つちやうけどねー」

「……すまない」

晃は、ちよつと冷たい気がしなくもないのんびりした剛史の言葉に、いろんな意味で詫びを入れつつ、くるつときびすを返して走り出したのだった。

もっとマシな言い訳はなかったものか、なんて思いながら……。

## 第8話（前書き）

いつもより少し早めの投稿です。

## 第8話

「これは……本、か？」

そして、アーチェリー場脇にあるグラウンドに降りて名目上トイレに立ち寄った後、すっかり目でそれが見える所まで近づいて。

晃は半ば呆然と、そう呟いた。

すぐ近くで……アーチェリーの的に鋼鉄製の矢が撃ち込まれる鈍い音が聞こえる。

アーチェリー部の生徒もこれに気づかなかつたのだろうか？  
言葉を失いながら晃が思ったのはそのことだった。

確かにそれは、建物の裏手で死角にはなっているけれど。

「これがもしかして……榎美さんの言っていた？」

呟きに答えるものはいない。

思わずぐるりと辺りを見回したが、大介達の姿は土手の先にはなかった。

他に人の気配もない。

晃は意を決し、さらに近づく。

それが本であるならば。

その羽ばたくように開かれたページには何かが書かれているはずで。  
風起こすこともなく浮かんでいるそれを、晃はそつと覗き込んだ。

「……ラキラの懐中時計？」



その本のタイトルだろうか。

飛び込んできた黄金色に光る文字を、晃は無意識のままに呟いて。

そのとたん、ふっと消える光。

さらに、それはその光が浮力そのものであったかのように、すつと落ちてきた。

晃は思わずそれを手に取って……。

「……………なっ？」

その瞬間、ひどい耳鳴りが起こり。

視界が高熱を出したときのように定まらなくなり、回転を始める。

そして……。

ついには、立っていることすらできなくなつて。

そのまま、晃の意識は闇へと飲み込まれた。

何かの、強い力に吸い込まれていくかのような感覚とともに……。

ざわざわと、草葉の騒ぐ音がする。

風が強いのかもしれない。

草の匂いが近いことを、晃は感じていた。

……思い出すのは、小さい頃遊び回った恐竜公園での記憶。

坂道を転がって滑って。いつもその側に、この草の匂いがあった。

「……………」

晃は、ひどく懐かしい気分におそわれながらも目を覚まそうとする。深い眠気に溺れつつも起きようとしている……身体の動かない、だけれど悪い気分じゃない感覚。

晃は委ねれば委ねるほどに甘いその感覚に敢えて抗い、かぶりを振ってなんとか起きあがった。

後ろについた手に、ごわごわの草の感覚。

すぐに感じる違和。

振り返ると、青々と背高い草々に埋もれている自分を知って。

「おかしい……………」

ちよつと前に同じことを言った気がしなくもないが、とにかく違和感の正体はそれだった。

今はまだ夏はもう少し先のはずで。

こんな真夏の時期に見られるくらいに草々が成長しているはずはなくて。

一体どういうことだろう？

晃は少し混乱している自分にも気づかず、それを考えようとして。

「ヒヒ、よつやくお目覚めか。いい身分だよな、友よ」

背中にかかる、聞き慣れたタローの声。

思いも寄らぬ人物の声に不思議さと安堵感を同居させつつ、晃は声のした方を振り返ったが。

「なっ……………」

そこにいたのはタローではなく。

ずいぶん頭の大きいフクロウのような何かだった。

だが、ぎよろりとした目が。特徴的なウェーヴのかかったその毛並みが。そのわざとやっているような怪しげな雰囲気、声で思った通りにタローを思わせる。

……なんて分析した所で。晃はようやく自分の置かれている状況を理解した。

いや、理解できない状況を理解した、と言っべきだろうか。

「ん？ どうしたいラキラ。どこか変化に不具合でも？」

フクロウが喋っている。

しかもタローの顔とタローの声で。

「……」

あの朝の時も身に沁みた晃だったが。

どんな経験を積んでいたとしても、人は思いも寄らない事が起こると思わぬ思考停止に陥るらしいことを改めて実感する。

「おい、大丈夫か？ ボクが分かるか？」

喋るフクロウも、どうやら晃のリアクションに何か異変を感じたらしい。

ひとをくったような笑顔のままだが、それでも様子を伺うように近づいてくる。

そして、見慣れた薄茶の大きすぎるくらいの瞳に覗き込まれて。

寸前まで起こったことを理解できずに混乱気味だった晃の思考が、すっと落ち着いた。

その、タローによく似た瞳の中に、真に心配する波を見たからだ。晃は、それを返すかのごとく、そのフクロウを見据える。

アーチエリー場裏手で光り、浮かんでいた本。

それを手に取り、タイトルらしきものを読み上げたたん、気がつ

いたら今の状況、だった。

『一緒に旅に行かない?』

思い出すのは、榎美のそんな言葉。

本の中にある異世界への旅。

それにより導かれるのは、そんなことで。

どうしてこんな現象が起こるのか。

何故他のみんなにはあの本が見えなかったのか。

考えなければいけないことはたくさんあるような気がしたけれど。

まずは、この世界のことを知らなくてはいけないんだろう。

「いや、すまない。……君は、誰だ?」

晃は本能的にそう思い、包み隠さず正直にそう聞いた。

すると、何故かタローに似ているフクロウは、ただでさえ大きい瞳を飛び出さんばかりにして叫んだ。

「おいつ、本気で言ってるのか? この『時』の魔精霊ませいれいにして《水鏡の盾》ラキラの朋友と言えはこのボク、ジャック・リヴァ以外にないだろうよっ」

そして、心外だとばかりに羽を散らす、ジャックと名乗ったフクロウ。

色々な事を言っただけだが、晃に分かったのは、彼がタローに似ていてもタローではないということと、どうやらこの世界での自分はラキラと言っただけだった。

「ラキラ……? それが俺の名前なのか?」

それは、ついさっき晃が目にしたばかりの言葉だった。

あの、光る本のページ目……タイトルに書かれてあった名前。

だとすると、ラキラと言う人物は、十中八九あの本……この世界の

中心的人物、主人公ということになるわけで。  
晃は早くも興奮しだしている自分に気付いていた。

……物語の主人公になること。

それは、子供の頃から夢見続け、今も尚消えることのない願いのよ  
うなものだったからだ。

「……何だか分からんが嬉しそうだな。キミのそんな顔を見たのは  
初めてだよ。

ああ、カラクリがよめたぞ。姿形だけを変えるなんて言っておきな  
がら人格や記憶まで変えたんだろ？ 流石フェアブリーズ、底が  
知れないということか……」

フクロウのジャックは、ぶつぶつ言いながら晃の周りを飛び回って  
いる。

やっぱり、晃にはジャックが何を言っているのかまるで理解はでき  
なかつたけれど。

興奮しているせいなのかなんなのか、目の前の日本語を話すフクロ  
ウを、晃はすでに当たり前のものとして受け入れ始めていることに、  
晃自身驚きを隠せなかつた。

いつも上辺ではいきなり異世界に放り出されても順応できる、なん  
て考えていたりする晃だつたけれど。

それを証明できる日が来るとは思いも寄らなかつたのは確かだ。

「すまない、ジャック。良かったら俺にこの世界のことを一から教  
えてくれないだろうか。先程から君の言っていることが、どうにも  
理解できないんだ」

「見たことないくらい笑顔でそんな事言っても説得力ないっての。  
……いや、見たことのない笑みだからこそ信じざるを得ないってこ

とか。……ヒビっ。全く面倒なことを。  
ま、キミの話に乗ったのはボクだからな。仕方ない、付き合ってるよ。

……まずは、そうだな。キミが書いたキミの日記を読め。そうすれば今後の予定とキミの人となりがわかるんじゃないのか？ それでも分からないことがあったら教えてやろう」

そう言っで指し示した先には、旅のためらしき道具袋があった。

「へえ、日記か」

高校に入るまではそう言えばつけてたな、なんて思い晃は言われるまま道具袋を手にとって。

「……これは」

すぐに、さっき目にした光る本が入っていることに気付く晃。

「ヒビ、それだな。……友よ、本当にキミは記憶がないんだろうな？」

いぶかしげにそう言うジャックに、晃は曖昧な笑みを浮かべつつ、恐る恐るその本を手を取った。

今度は別に吸い込まれることもなく、晃の手に収まって淡い光を放っている。

「なあジャック、どうしてこの本……いや、日記帳は光っているんだ？」

「そんなことまで聞くのかよ。そりゃもちろん、盗難防止の魔法がかかっているからに決まっているだろう？」

「魔法か！？ はは、何でもありだな」

何だか呆れているジャックを脇目に、晃はもうわくわくを止められない様子で本を開く。

始めの1ページ。

飛び込んできたのはやはり『ラキラの懐中時計』といったタイトル。

「……それじゃあ、読んでみることにするよ」

「おお、んじゃボクはちよつと辺りを見てくるな」

晃はそう言つて薄青の空へと飛んでいくジャックを見送つてから、手の中にあるそれを改めて読んでみることにした。

ジャックが日記帳だと言つていたその本は、少なくとも晃には日記帳には見えなかったが。

そう時間かけることもなく読み終えて。

タイミングを見計らつたかのように帰つてきたジャックにも色々とは分からないことを聞いて。

晃がこの世界のことを理解したのは、日が沈んで野営を始めなくてはならない、そんな頃だった。

ジャックに文句をその都度言われながら本格的な野宿というものを体験した後、

焚き火の火にあたりながら……晃は今日知つたこの世界のことを、自分なりにまとめてみる。

まず、この世界……今まで晃のいた現実の世界とは違うものであることは確かなのだが、逆に共通点も多かった。

まだ会話を交わしたのはジャックだけだったけれど、問題なく会話が成立するし、夕食として食べた食材も、晃が今までいた世界のものとは変わらない。

いや、敢えて言うなら、缶詰やカップめんのような加工食品のない、自然のままの食料のみという点では違つかもしれないけれど。

時代背景としてはゲームやファンタジーの物語にありがちな中世ヨーロッパ……と言つた感じだろうか。

そんな世界……『イクス・カロ』の世界は、《魔精霊》と呼ばれる、人によく似た種族が暮らしているらしい。

魔精霊は、12の種族があつて、それぞれに崇める神が存在しているという。

12の神は、この世界を創つたものとされ、12の種族に分けられた魔精霊たちは、人間にはないそれぞれの神の力に添つた奇跡……俗に魔法と呼ばれる超常の力が使えるらしい。

それだけならば考えうるによくある話、ですむのかもしれないが。そんなファンタジーな世界で大きな意味を持つだろうものが、ジャックが日記だと言つた光る本だつた。

おそらくはこの世界へ誘つた本と同じもの。

そこには、ある物語が書かれていた。

ラキラという水の神ウルガウに属する一人の騎士のたどる幻想と冒険の物語が。

水の国ウルガの若い王国騎士であるラキラ・フェアブリッツは、身分違いの恋と知りながらも一国の女王であるマーサ・トクマを慕つていた。たとえ叶わなくとも、その命を王のために賭ける……そのつもりだつた。

時代は魔精霊同士、血で血を洗う戦火の真つ只中。

しかし、そんな時代にあつて他のものを傷つけ害することをよしとしない穏やかな心を持つ水の魔精霊たちは、世界でもっとも強大な国力を持ち、豪胆な心を持つ地の魔精霊たちに戦いを挑まれ……戦わずに事実上降伏の道を選んだ。



それが、お互いに犠牲者を出さない最良の方法だったのは確かであったが。

地の国は、ガイアット水の国が降伏を受け入れ、地の国へ従属するその証として、地の王に水の女王マーサを嫁がせるといふ条件を出してきたのだ。

水の国の民の平和と引き換えの人身御供。

結局、マーサはそれを受け入れたのだが。

そのことに、ラキラは耐えられなかった。

マーサが、地の王に嫁ぐことを、本心で受け入れたのかそうでないのかは関係なく、ラキラは許せなかったのだ。

ただ、マーサを想う自分自身のために。

わざと城の中で狼藉を働き、騎士の地位を捨て、水の国を捨て、相棒の時の魔精霊であるジャックと城を出たのだ。

地の国へと乗り込み、地の王を……説得するために。

それは、簡単にできることではないことくらいラキラはよく分かっていたけれど。

ラキラには、それができる自信もあった。

何故なら、ラキラは《フェアブリッツ》と呼ばれる水の国に一人しかいない希少な種族だったからだ。

世界一進化の早い種とも呼ばれるフェアブリッツは、水の神に与えられし魔の力で、何にでも誰にでもなれる。

ラキラは、その力を使って地の王に近づくことを考えたのだ。

さしあたって、水鏡の盾、ラキラという自身の身元が割れぬよう、全く別人に変化したまではよかったのだが。

生まれて初めて使う大掛かりな変化のためか、ラキラはそれに失敗してしまった。

顔や身体だけでなく、心でさえも別人に変化してしまったのだ。今までの自分を忘れ、新しい自分になったラクキラは。相棒のジャックのことも、マーサへの想いも、自分自身の目的すら忘れてしまっていて……。

その光る本に書かれている物語は、そこまでで終わっていた。始まってから、数十ページ程度。

まるで、そこで筆を止めているかのよう。

ほとんど導入部分だけで、完結には程遠かった。

そして何より重要な点は、その登場人物と、書きかけの部分だろう。

『ラクキラとジャック』

『変化して心すら別人になってしまったラクキラ』

そのくだりで分かることは、今晁が身をおく状況と一致するということ。

この世界に晁がやって来たとき、ジャックは晁のことをラクキラと呼んでいたことは間違いなかったから。

この本は、途中で途切れているのではなく。

まだ物語がそこまでしか進んでいない、と言うことを意味していてつまり……この先の物語はラクキラではなく、晁が紡がなければならぬのだらう。

そして、そんな晁の考えは。

次の朝、目を覚ますことにより実証されることとなる。

「なあ、ジャック、そのシノイって街には後どれくらいかかる？」

それは、朝起きて野営をした山中から出発するその前に、すぐジャックが口にしたことだった。

地の国と水の国の境にある、シノイという街に向かうと。

案の定、覗き見たラキラの本には全く同じことが書いてあって。

改めて自分がラキラであることを実感した晃は、逸る気持ちを抑えられない様子でそうジャックに問いかける。

基本的に自分のしたいこと、本気になれることに関してはとことんプラス思考でいられる晃である。

その声色には、昨日から続く高揚感がありありと滲み出ていただろう。

ジャックは、そんな晃に呆れたようなため息を吐く。

「キミのろまな足で三日ほどだよ。……いや、しかし、そんな事すら忘れちまつてるのか。シノイは仕事でよく行かされただろう？

ま、戦わず降伏じゃ、意味のない仕事だったけどな」

そのジャックの呆れはきつと晃に対してだけじゃないのだろう。

晃にとってそんなジャックの気持ちを本当の意味で理解することはできないのかもしれないけれど。

こっちが弱いからとか、戦いたくないからといって強者に一方的に抵抗もせずに弄ばれることが我慢ならないことだってことは、晃にも賛同できた。

それは、晃が所謂いじめられっ子に分類される子供だったせいもあるだろう。

その他大勢に馴染めなかった異質。

あくまで晃の自己判断であるが、よくいじめられていたのは確か。ただと晃は、今の今までうまく抵抗して、ここまで生きてこれた。

それは直接的な抵抗ではなく、歌や本といった媒体を通して生まれるゆるぎない自己の領域の強化や、周囲のものに対する、鈍感さによつてだった。

それは例えば……自分にはこんな素敵な歌や物語の世界を知っているからこそ、

異質を排除しようとし、他者を傷つけようとするような存在とは元々相容れないことなど分かっている、と言った風に。

「確かに、やられっぱなしで抵抗もしないのは、俺もどうかと思う。

……だから説得に行くんだろう？俺たちは」

「ヒヒ、説得、ね。本当に都合いい言葉だよな。ま、せいぜいこっちが説得されないように気をつけるこつた」

窺う晃に、心なしか不安を覚えるような、ジャックの言葉だったけれど。

「ほら、さくさく行くぞ、友よ。こちららキミの徒歩に付き合つてやっってるんだからな」

まるでフォローであるかのように。

発せられるそんな言葉とともに、ジャックはひとり、翼で飛んでいってしまつて。

「友か……」

それは、何気ない疑問の呟き、だったのだろう。

どうしてジャックは、こんなある意味自分勝手も甚だしいラキラに付き合っているのか、と。

果たして彼は本当に、友であると言っただけで晃に付き合っているのか、と。

「いや、友を疑うのはよくないよな」

ただ、晃は自身の考えに首を振って……ジャックを追いかけたの

だった。

根拠もなしに疑うことより、根拠もなしに信じているほうがカッコイイ、なんて思いながら……。

## 第9話

それから、ジャックを追って下り坂の多い森の中を駆け下りて。しばらくすると、下り坂が平らになり、視界が開けた。

どうやら、街と街を繋ぐ街道に出たらしい。なだらかに固められた土の道が伸びているのが見える。

「……何だ、こんないい道があったのか。ここを通れば楽だろうに」「ヒヒツ、何言ってるんだ。姿形を変えたってボクらはおたずねものなんだぞ。こういうデカイ街道には関所だってある。下手に調べられたらバレるかもしれんだろ。身元不明なのは確かなんだからな」

それは、晃にしてみれば独り言のつもりだったが、耳ざとく聞きつけてきたジャックが、諭すようにそう言ってくる。

「それは中々に笑えないな。一体何をしでかしたんだ？」

「ボクの方を見て言うなよっ、やったのはキミだろうが……いや、しかしそれは日記に書かれてなかったのか？」

「ああ、詳しくは書かれていなかったな」

晃が日記……ラキラの懐中時計と言う名の物語の内容を思い出しながらそう言うと、ジャックは眉を寄せ考え込む仕草を見せる。

そして、一瞬だけ逡巡した後、言った。

「ヒヒ、自分でやっておいて思い出したくもないってことか……なあに、そんな難しい話じゃない。ただ、水の王を暗殺しようとしただけさ」

「まさか？ ラキラは確か……」

水の王に思いを寄せていたはずで、命を賭して守る人だったはずで。

晃が信じられない、と言った面持ちでジャックに顔を向けると、やっぱりそれも覚えていないのかって顔をしていた。

「まあ、本当はフリ、だけどな。未遂で捕らえられて、普通なら極刑ものだったんだが……水の王の温情やお前の騎士っていう身分の高さとか、いろいろあつて禁固刑ですんだってわけさ」

すぐに付け加えるように、ジャックはそんな事を言つて人の悪い笑みを浮かべた。

「禁固刑？ ならば何故俺はここにいるんだ？」

「ヒビヒツ、そんなのボクの時の力を使えば簡単さ」

晃の当然の疑問に、身も蓋もなくそう答えるジャック。

「つまり、それで俺たちはお尋ね者、という訳か……」

「ヒビ、そう言うことだよ。しかし、今考えても無茶な賭けだったよ。本当に殺されてもおかしくなかったんだからな。ま、お前はそれでも良かったのかもしれないねえけどさ……」

それは、意味深な言葉だった。

その時、何を思つてラキラがそんな行動をしたのか、晃はラキラではないから本当のところは分からなかったけれど。

本当に本気で好きになった人がいたとして、だけどその思いが叶わないと分かつてしまったのならば。

自分はこの世にいる意味がないのだと、そう思うことはあるかもしれない……なんて晃は思う。

とは言つても。未だかつて本気で誰かを想うことやその思いが叶わないことを知る経験なんて、晃自身したことがなかったから……そ

れすらも想像の域を出ないのは確かであるが。

「その無茶な賭けにのってるジャックもたいしたものだと思うけどな」

「キミが言うか、それを？　って、そんなことはどうでもいいんだよ。とにかく街道はなしだ。このまま横断して川から下るぞ」

思えば、自分勝手な気もしくもないラキラに、こうして付き合ってくれ手いる時点で、ジャックに何故ついてきたのか、なんて聞くのは野暮なこと甚だしい気もする晃である。

たとえジャックにこの無茶な賭けに付き合う理由があるとなかろうと、少なくとも晃にそれをどうこう言う権利はないはずで。

晃は自身の中でとりあえずそう納得させ、晃を置いてさっさと飛んでいってしまったているジャックの後を慌てて追いかけてようとする。

だが。

これから向かう方向にある街道の遙か先。

何かが爆発するような音がして、晃はそちらを振り返る。

「なんだ？　何かあったのか？」

はつきりと目で確認できないほど遠い距離のところ、何かが煙をあげている。

おそらくは道いっぱいの大きさの、白い何かだ。

「ん？　ああ、たぶん乗り合い馬車かなんかが魔物にでも襲われているんだろ。……この辺は多いからな。よくあることだよ」

思わず立ち止まる晃に気づき、ため息を吐いて舞い戻ってきたジャックが、何でもないことのように呟く。

「魔物？　それはつまりこういった世界にはつきものな、敵対する



生物、ということか？」

ファンタジーものの小説や、ロールプレイングゲームなどに良く出てくる魔物。

旅人や冒険者を襲い、邪魔する存在。

訓練……あるいは授業の一環として、相対したこともある厄介な存在。

知っている単語が出てきたので思わず晃が聞き返すと、ジャックは少しだけ驚いたような顔を見せてみせて。

「ん、何だ？ 魔物のことは覚えているのか？ 変なやつだな」

そう言つて首をかしげる。

そこで晃は、無意識にそう口に出してしまったことに気づき、慌てて言い直した。

「い、いや。なんとなくどこかで聞いたような気がしたんだが……  
どういふものなんだ、その魔物って？」

「面倒くさいけど説明してやるよ。魔物ってのは、まあ言わば魔精霊になれなかつた生き物つてことだな。基本的に意思疎通はできないといつていい。ヤツラはボクらをただのエサとしか考えてないからな。んで、そんなヤツラだからこそ、魔法で操つて戦争の駒として使うのもいる。現に、ここ最近シノイに魔物が増え始めてるのは『地』のヤツラのせいだつて噂もあるくらいだしな。……ちなみにこれは蛇足だが、一人の神に従るのが常識とされるボクたち魔精霊だけど、たまに二股をかけるやつがいて、そいつらのことを暗に魔物って呼ぶこともあるぞ」

面倒くさいといつつも、興がのつたのか長々と説明してくれるジヤック。

そんな所もタローに似ているんだなと、晃が内心そう思いつつ目を白黒させていると。

ジャックはふいに視線を川へと続くという道なき道へと向け、言った。

「ま、そんなわけで触らぬ神に祟りなしだ。さっさと行くぞ」

どうやら、今の会話に対しても、別に理解を求めることはしないらしい。

興味をなくしたようにフラフラと飛んでいってしまつ。

「……………つ、ちよつと待ってくれ」

「ん？ 何だよ、まだ何かあるのか？」

慌てて声をかける晃に面倒くさそうに翼をばたつかせて振り向くジャック。

「あの馬車、魔物に襲われているのかもしれないだろう？ 助けなくていいのか？」

「ヒビ、何を言い出すかと思えば。そういうところは変わんねーんだな。……………助けなんていらないだろ、きつと。馬車のヤツラだって、魔物に襲われることくらい分かってたはずだ。護衛のひとつも用意してるだろ」

「……………しかし、凶暴なのだろう？ だとしても手伝つに越したことはないと思うんだが」

「それで、一体ボクらに何ができるって言うんだよ」  
「……………」

こういう物語ならば、助けにいつて当たり前じゃないのかなんて思っていた晃だったけれど。

ジャックの発した一言で、晃はほんの一瞬、言葉を失う。

それは、言い得て妙、だった。

それこそ物語の主人公のような活躍など、そうそうできるはずもないことを諭すかのような言葉で。

晃自身、そんなこと重々分かっているつもりだったけれど。

「できるできないじゃないだろう、こういうものは」  
まるで我侭を言うかのように、晃はそう反論していた。  
現実で使命も果たせない自分を責められているかのような、そんな  
気がして。

「ヒビ。そんなこと言って助けたって、実際は迷惑がられたり余計  
なお世話だって思われるのがオチだぞ」

「……そこでそうくるか。性格悪いな、ジャックって」  
「ヒビッ、それこそ今更だろ」

晃が困り顔でそうばやくと、ジャックは底意地の悪い笑みをこぼし  
てみせ、何だかんだ言いながらも進路を変えてくれる。

晃は、そんなジャックのまんまるの後頭部を眺めながら。

やっぱりタローを相手にしてるみたいだなあと、しみじみ思うのだ  
った……。

やがてたどり着いた場所は、背の高い木々もまばらな湿地帯だった。  
その、ひととき大きい濁りの深い沼地のひとつに、馬を失ったらし  
い大きな幌馬車が半ば引きずりこまれようとしているのが見える。  
何かが燃えているのか、鼻の曲がりそうな、あまり嗅ぎたいと思え  
ないいやな匂いのする白ではない煙が幌の中から上がっていた。  
おそらく、この幌が遠目から見えたのだろう。

「ヒビ、考えてみれば妙だな？　こんな水辺の多い場所で煙なんて」  
見た感じ水没しかけた馬車以外には何もなく。

首をかしげてふらふらと馬車へと近づいていくジャックの後に、晃

も続く。

そして、革靴に感じる生温かい水をかき分け、幌の中を覗き込んで、  
晃を襲ったのは後悔ばかりだった。  
声を上げそうになるのを何とかこらえて、だけど目の前に広がる光  
景から目を背けることは止められなかった。

「火薬でも投げ込まれたのか？ 魔物のヤツラの仕業にしちゃ、やる  
ことが狡猾すぎるな」

苦いジャックの呟きが聞こえる。

そこには、晃の求めてはいなかった残酷な現実があった。

ジャックの言葉通り、火薬が何かを投げつけられたのか、ひどい火  
傷を負って折り重なるようにして倒れる、一様に黒い翼を生やした  
人々……魔精霊たちがそこにいた。

煙の正体はこれだったのかと思うと、こみ上げてくる吐き気。

それは、ずっと求めてきた幻想の世界だからこそその衝撃によるとこ  
ろもあつたのかもしれない。

逃げ出したい。

晃がまず思つたのはそのことだった。

その思いのまま、そこから一步下がろうとする。

「う、うう……」  
だけど。

幌の中から、生きていることの証であるかのような、呻き声が聞こ  
えてきて。

ぴたりと、晃の足が止まった。

(俺が……今しなければならぬことはなんだ?)  
辛いことや面倒なことから逃げ出したい。  
そうだとするなら、それはあまりにも情けなすぎて。  
そんな弱い自身を叱咤するように。  
魂のうちから溢れてくる感情のままに、晃は叫んだ。

「早く、助けなければっ!」

「そうだな。取りあえず馬車からおろそう。このままじゃ馬車ごと燃えちまう」

助けるための方法すらろくに考えないままに言葉を発してしまった事に晃が気づいたのは、それからすぐのことだったけれど。

ジャックはそれすら見透かしたかのように、さっきまでとは違う笑みをこぼしつつ、そう答えてくれる。

「分かった」

晃の方もさっきまでの自分が嘘のように、それに頷き返して。  
沈みかけた幌の中へと、一步足を踏み入れた。

そして、意外にも慣れた手つきで倒れている一人を抱え込もうとした、その瞬間。

「……っ!」

いきなりドン! と地面の底から突き上げられるかのような衝撃が晃を襲った。

「ちっ!」

足元を見ると、馬車の底板を突き破って青黒い何か(それは、言うなれば蛸の足のようなものだった)が蠢いているのが分かる。  
とたん、充満する濃い水の匂い。

「ラキラっ!」

そして、ジャックが鬼気迫る声で叫んだのとほぼ同時に、底板にい

くつもの亀裂が走って。

気がつけば……晃の視界には薄青の空が見えていた。かち上げられ、幌を突き破って、そのままの勢いで水辺に叩きつけられる晃。

「ぐうっ……」

呻いて、それでも何とか起き上がると。

目の前に鎮座するのは、全身青のそれ自体が別個に生きているようにも見える、いくつものうねる足と鈍い赤の瞳を持つ、巨大な軟体生物だった。

「ガアアアアッ！」

そいつは、怒りとも悲鳴とも取れる咆哮を発している。よく見ると、そいつは血だらけの満身創痍にも見えて。

身体のおちこちに刺さるようになっているのは木の根、だろうか？

「あれはっ……」

晃はそれに、目を奪われる。

いや、正確に言えば目を奪われたのはその巨大生物ではなく。

伸び上がったその足……触手のひとつに巻きつかれて動かない一人の少女に、だった。

花飾りにしては大きな、その栗色の髪に咲き誇る紫の花。

闇色染みる、影のような翼。

まさしく天の使いか何かが身に纏うような、儂いほどの細身を示す、純白の羽衣。

それらは一様に濡れそぼり、傷ついて尚美しく。

別人であること一目瞭然なのに。

だけど、タローに良く似たジャックと同じように。

晃には、その少女が自分の知っている人物に見えてらなかった。

「香澄さんっ！」

晃は、無意識のまま少女の名を呼び、走り出していた。

目の前の少女が香澄だと認識してしまつたら、もう止められない。

全身が沸き立ち、沸騰する感覚。

それは怒りだろうか？

あるいは、それを超越した苛烈なほどの名もなき感情、とでも言えばいいだろうか。

猛烈な勢いで近づいてきた晃に、巨大な青きものすぐに気づいたようだった。

感情の読み取れない濁った瞳を、しかしそれでも確かに晃のほうへと向けていて。

「……っ」

すくみにも近い感覚で、晃は立ち止まる。

あるいはそれは、予感だったのだろう。

刹那、その蛸のような口が膨張し、その標準を晃に定めて。

はつきりそれと分かる、砲撃のような発射音。

わずかに、何かの燃える匂いを感じて。

晃はその時、確かにそれと目があつた。

撃ち出された赤く透き通るもの。

それに貼り付けられているかのようについていた、虚ろな目と。

感じるのは戦慄。

漠然と浮かぶ、爆発のイメージ。

根拠などないのに、馬車の人たちが傷つき倒れた原因はそれなのだという確信があつて。

それに対抗するかのよう。まるで生きているかのごとくざわめき震える、晃の足元にある水。

しかし、赤く透き通る何かを見据えていた晃は、そのことに気づかなかつた。

ヒインッ！

「ラキラッ、投げ返してやれっ！」

何故ならば、鋭い耳鳴り音がしたかと思つたら、そんなジャックの声が聞こえたからだ。

晃が顔を上げると、いつの間にかジャックが意識失つたままの少女を助け出し、その嘴で抱えていて。

そこで代わりに気づいたのは、世界の異常。

晃に向かつてくるはずだった虚ろな目をした赤いやつだけが、中空で凍りついたように止まっている。

ジャックは、自分のことを時の魔精霊だとそう言つてたから……きつとその力を使ったのだらう。

指定したものの、時を止めるその力を。

それは、ジャックがそう名乗つた時点でそうだらうとは期待していたことだつたけれど。

中々どうして、目の当たりにすると感嘆のため息しか出ない晃。

しかし、そんな晃も、そう言われてからの反応は目を見張るものがあった。

自分から一步踏み出し、赤色のそれを手で掴んで。

「はっ！」

気合い込め振りかぶり、投げ返す。

すると、ちょうどそのタイミングで時が動き出し……同時に気づく、



自分がノーコンだという事実。

赤く透き通るそれは、まっすぐとは行かず、青い巨体のすぐ前……  
水面に落ちるように炸裂して。

突如として発生したのは。

すさまじい爆発音と、熱波。

その勢いで水は抉られ、それにより起こった水しぶきがあたりに霧  
を生じさせる。

衝撃で穿たれた水は意思を持ったかのような濁流と化して。

気がつけば。

晃の放ったそれは。

小さな沼地がいくつもあつたはずの地形を、ひとつの大きな湖へと  
変えてしまっていた……。

## 第10話(前書き)

中々文章量が一定しませんね。  
今回も短めです。

## 第10話

すさまじい勢いで水は抉られ、それにより起こった水しぶきがあたり霧を生じさせる。

衝撃で穿たれた水は意思を持ったかのような濁流と化し、小さな沼地がいくつもあつたはずの地形を、ひとつの大きな湖へと変えてしまった。

その衝撃で跡形もなくなったのか、霧に紛れて逃げたのか。今までそこにいたはずの青い巨体の姿はなく。

それでも尚水は勢いを止めず、離れた場所で傾いていた馬車すら飲み込んでゆく。

晃が我に返ったのは、その時で。

「……お、おい。やりすぎだろう、これは」

「それはこっちのセリフだろうがっ！ ちったあ手加減しろっ！ 思わず晃がそう言つと、すぐさまジャックにそう返される。

「俺はただ投げただけだぞ……？」

「ウソつけっ、思いつきり魔力込めてただろうがっ……っで、でもよく考えたら結果オーライだな」

ぶつぶつ言っていたジャックは何かひらめいたのか頷いて、そのまま抱えていた少女を澄んだ水の中へと降ろした。

「お、おいジャック。何をしている？」

「何って、さつきキミが助けるって言ったんじゃないか」

「……いや、意味が分からない」

助けるのに水の中へ降ろすとはどういう了見か。  
なんて思っただけで再び晃が疑問符を浮かべると、ジャックはやれやれ、  
とばかりに深い息をついて。

「どうして広大な土地と強大な力を持つ地の魔精霊のヤツラが、小  
さく脆弱な水の国を、水の魔精霊を求めめるのか……それも忘れちま  
ったのか、友よ？」

唐突にそんなことを聞いてくるから……晃は訝しげに思いながらも、  
読んだ日記、物語の内容を思い出し答える。

「……確か、水の魔精霊が住むところにある水は良質なものになる  
から、だったか？」

「ヒビ、そんな生易しいもんじゃないよ。水の眷族が祈りと魔力を  
込めた水は、魔精霊にとって万能の水になるんだ。瀕死の怪我や重  
い病気すら治るほどのな」

するとジャックは首を振り、そんな事を言う。

「そんなことが？」

できるのだろうか、あるいは自分にも。

続く言葉は口から出てはこなかった。

それはもう、魔法などと呼べるレベルを遥かに超えている気がして  
代わりに、そんな晃の心のうちが顔に出ているのだろう。

ジャックは大げさなほど大仰に頷いて。

「本来ならやつぱりそれはこっちの台詞なんだけどな。……まあい  
いか。できるかできないかなんてやってみなければ分からないんだ  
もんな？」

晃が一度口にした、もっともな言葉を返してくる。

「ああ、うん。それは分かるんだが……一体どうやって？」  
そもそものやり方の見当もつかないのだから困りもので。

それを聞いたジャックは、処置なし、とばかりにため息をついて。それから暫く、悩みこむように考え込んでいたが。

「今からボクの言う通りにしてくれ。そうすればうまくいくはずだ……多分だけど」

ややあつて、自信のないところを隠しもしないジャックのそんな言葉が返ってくる。

「そ、そうか。じゃあ頼む」

それに対し晃のできることは、ただ頷くことだけ。

「よし、まずは精神集中だ。魔力を高める。ちょうどおあつらえ向きに周りは水だらけだ。後はキミが彼らの傷が癒えるようにと、心から祈ればいい。……水の神にな」

「あ、ああ。やってみる……」

内心それだけでできるのならばは思っていたけれど。

まくし立ててくるジャックに圧されるようにして、晃は頷いてしまっていた。

どうにも流されている感のある自分にちょっとへこみつつも、それでもやるだけやってみようなんて思い、晃は目を閉じる。

「……………」

すると、暗闇の中で水の流れが息づく気配を感じた気がして、晃はちょっとそのことに驚きを隠せない。

実の所、目を閉じたことに意味なんてなかった。

言うなればなんとなく、だったのだが。

もしかしたら身体が覚えていたのかもしれないな、なんて思う晃である。

そんなことあるはずなのに。

言われもしないのに目を閉じたことが、それを証明している気がする。

(生命育みし悠久なる水よ、その大いなる力で傷つきしものを癒せ……)

そのことでうっかり調子に乗っていたらだろうと、その時晃は思った。

水に包まれる感覚とともに、心うちで口にしたのはありがちで格好悪い、だけどできうる限り心を込めた、そんな一節。

台詞回し、声の出し方……そのイメージとしては、演技であることなど見るもの全てに忘れさせる、神をも欺く演技。

幸いなことに、それは柗美に出会う前から晃の身近にあつて。

見よう見真似だったけれど、晃自身としては自分も中々捨てたもんじゃない、なんて自負していて。

そんな自惚れは、ある意味晃の思っていたものとは別のベクトルで、顕在化した。

(……っ!?)

瞬間、晃の身体全身にかかる負荷。

それは、痛みもなく苦痛もなかったが。

何かに吸い込まれていくかのように力が抜け、さらに強力な睡魔のようなものが晃を襲う。

声をあげようとしたが声にはならず。

それどころか声を出さなくては、といった思考すら働かなくなっていることに気づかされて。

当然、開こうとした目も開けない。

まるで、最初から目などなかったかのように。

そして、それは比喻ではなく、正しかったのだろう。

声を発する喉も、脳も瞳も今の晃には存在していないのだ。

何故かは分からないけれど、晃はそう確信していた。

今まさに晃は辺りの水と一体化し、水そのものになっているのだと。

なんにでも姿形を変えられる水の魔精霊、フェアブリス。

それは、水の神ですら例外はない、ということをも晃は実感して。

「あれ？ わ、私……」

「……やべっ、やりすぎだったの！ 目、覚ましちまったぞ！」

晃が、抗うこともできずに睡魔に敗れて意識を手放そうとしたその時。

聞こえてきたのは、香澄の面影のある少女の声と。

何だか焦っているジャックの、そんな声だった……。

「……はっ」

そして。

晃が再び目を覚ますと、世界は一変していた。

いや、戻ってきたといったほうがいいのかもしれない。

そこは、随分懐かしい気がしなくもない、茶城山のふもとにある、アーチェリー場の裏手……晃が本の世界へと旅する前にいた場所だった。

ふと腕時計を見やると、ストップウォッチは動いたままで。その日付と時間の経過から判断するに、あの世界に行ってからほとんど時間が経っていないことがわかる。経っていたとしても2、3分だろう。

それも晃にとっては不思議なことではあるのだが……。

何故なんの前触れもなく戻ってきてしまったのか。

そっちの疑問のほうが大きかった。

それを確かめるために晃がまずしたことは、力失ったように地面に落ちていた本を拾うことだった。

そして早速中身を見て、戻ってきてしまった理由を、晃はなんとなく理解する。

どうやらこの本は、晃……あるいはラキラがあの世界で行動したことが自動的に記される……ジャックの言葉を借りれば日記のようなもので間違いはないらしい。

その本には、晃がしたことがちゃんと書かれている。

ラキラは、自らに授けられた力を使い、傷ついたものたちを救うことにした。

最終的にはそのようなくだりでページが終わり、次のページを開けば背表紙になっていたのだ。

その意味するところはつまり。

「この本は、一冊じゃ終わらない続きもの、ということか？」  
そういうことになるわけで。

「……戻れたのはいいが、中途半端なのは気分が悪い、な」



その時の晃は既に、普通でないことへの不安や恐怖など、どこかになくなっていて。

そう呟く晃は、生き生きとした挑戦的な笑顔をしていた。

「分からないことが多いな。柊美さんに話を聞くか……」

晃は自身にそう言い聞かせ……足取り軽快にコースへと復帰する。

その様は、いつもの晃ではないと思えるほどに浮かれて見えて。

（水の力……か）

そんな晃は何を思ったのか、瞳を閉じて……目一杯に広げた手のひらを突き出した。

まるでごっこ遊びか何かのように。

その行為は、根拠もなく魔法が使えると頑なに信じて真似をし、その現場を見られるという恥ずかしい体験をして以来、封印していたものだった。

当然そんなことで魔法など使えないことなど分かっている。

昔と違うのは根拠があつてそう思っていることで。

だとするならば、何故今更にそんな事をしたのか。

その答えは、意味のないなんとなく、と言うことで丸く収まるはずだったのだが。

バシャン！

瞼を閉じたことで赤黒い視界のその先で。

大量の水を打ったかのような音がしたから、慌てて晃は目を開く。

晃の目の前……グラウンドにあるのは、なかなか大きな水たまりだ

った。

ここ数日は雨など降っていなかったはずなのに。それは、通常起こり得ないはずの異質。

「……本当に出るとは」

思わず昔とは間逆の意味で辺りを見回す晃。幸い目のつく所に人はいなかったが。

「現実に何らかの影響を及ぼす、か。……取り敢えず自重しよう」

晃は自身だけ納得するようそう呟いて。

何事もなかったかのように……とは行かず。

逃げ出すようなスピードで、その場を後にしたのだった……。

## 第11話

そして……部活終了後。

いつもと様子がひと味違うテンションの高い晃は、大介たちに訝しがられつつも、ダッシュで演劇部が練習している旧体育館へと向かった。

それは、すっかり日も暮れ、夜の帳が何迷うことなく降り始める時分。

晃のすのこ打つ音は、その雰囲気に合わせてたかのごとく、微かに辺りに染みていく。

まだ演劇部が活動しているかどうかなど考える余裕すらない晃だったが。

しかし晃の期待通りに、旧体育館の灯りはまだついていて。

晃はその事に一心地つき、旧体育館の……音を漏らさないように創られた大きな両開きの扉を開け、静かに中に入る。

そして、スリッパに履き替えて舞台のあるフロアをそっと覗き込んだ。

どうやらまだ終わっていないらしく、数人が舞台に立ち何かを演じている様子がうかがえる。

そこに、冴美らしき姿はなかったけれど。

よくよく見ればそこには豊や香澄の姿があつて。

「……無事、か」

あの本の世界にいた香澄によく似た少女。

今日の前にいる香澄とは別人のはずなのに、その変わらない凜とした雰囲気不思議と安堵感を覚え、ついつい当たり前のことを呟い

てしまう晃。

すぐに気を取り直すようにしてそこから離れ、玄関ホール両脇にある階段を上がった。

それは、舞台のあるフロアへと続く扉を開けることで部活の邪魔になるかもしれないという配慮もあったけれど。

せっかくだから東雲高校演劇部の演じる物語がどんなものなのか、広く見渡せるところで見てみたいという理由もあった。

コンクリートそのままに近い階段を上がっていくと、たどり着いたのはいわゆる二階席だった。

舞台に相對するようになって席の後ろには暗幕が引かれていて、その隙間から僅かに茄子紺色に染まりつつある空が見える。

と、暗幕に寄りかかるようにして舞台を見ていた一人の男子生徒が晃に気づき、何も言わず軽く手を上げた。

そしてそのまま再び舞台へと視線を向ける。

晃はそれに習うようにただ頭だけを下げ、黙したままその男子生徒の側まで行き、同じように舞台を眺めた。

お互い話をするにはあるだろうが、それは舞台の終わりを見届けてからという暗黙の了解がそこには成り立っていて。

当の舞台は、どうやらクライマックスにさしかかっていたらしい。

それが青春学園もので、主に香澄と豊の二人の掛け合いがメインの話だということが分かった所で、演技が終わってしまった。

「ふむ、どうかねウチの演劇部の実力の程は。晃君の正直なところを聞かせてほしいものだな」

緊張感のようなものが解けて、練習の終わりを告げる緩やかな空気が流れる中。

晃の隣にいた男子生徒は格式張った物言いで開口一番そんなことを

訊いてくる。

「こんな短い時間で、素人に良し悪しの判断なんてできるわけがないでしょう、滝ノ川先輩」

それに対し、晃にしては珍しく、半ば呆れながらも礼節と気安さをもって言葉を返した。

二年五組滝ノ川秀一。たきのがわ・しゅういち

三年生を差し置いて演劇部の部長を勤める鬼才であり、晃とは中学の頃……部活の大会で知り合った先輩だった。

あるいは、晃のもう一つの側面を知っている、タローとはまた別の意味でやりにくい友人、といってもいいかもしれない。

「それでも構わないよ。聞かせてくれ、自称素人の意見をね」  
もう一つの側面。

それは、使命など負わず何事もなく生きていけば、という仮定の話。晃は、元々入りたい部活リストに、本当は演劇部しか存在していなかった、ということ。

東雲と同じ学区内にある六加中央高校。

毎年必ず関東大会へ出場するほどの強豪校。

実は、晃の第一志望はそこだったのだが。

元々学力が足りなかったのか……その後に伝えられることになる使命の軋轢故か。

見事に落ちたのだ。

それは、まるで運命づけられていたかのように。

その第一志望が私立で、市立である東雲とは試験日かずれていて。

結局、家も学力もそれほど遠くない東雲に晃は受かった。

それは、十夜河家には家訓よろしく「浪人」という言葉が存在していなかったせいもあるだろうけれど。

東雲高校に入った晃だが、結局演劇部に入る部活のリストに入れることはなかった。

それは、使命の為なんてことは言い訳に過ぎない。

入らなかった全ての理由は、晃の背中を追いかけるようにして演劇を始めた、しかし晃とは比べものにならないほどの才能を持った：

…一つ違いの妹がいたからである。

東雲の演劇部だって秀一がいることを考えれば決して悪くない環境であると想像はつくけれど。

一流を育てるのはやはり堅実な一流なのだろう。

事実、中央の演劇部にはそれだけの実績がある。

それは彼女がこれから歩くだろうその栄光への道。

とにかく晃は邪魔したくなかった。

そんな事を考えること自体自惚れも甚だしいが、ここで自分が東雲の演劇部に入ろうものなら彼女が道を逸れついてきてしまうおそれすら感じていて。

だから……晃は演劇部だけは入らないようにしようと、決めたのだ。でもそれは、晃が自分を正当化するていのいい表向きな言い訳で。

本当はその才能の差に負けて逃げただけだった。

彼女と同じ舞台、同じ道を歩きたくなかった。

比べられるその事で、恥をかきたくなかっただけなのだ。

秀一は、そんな晃の本心を知ってか知らずか、晃を演劇部へと勧誘してきた。

秀一としては、その事でいずれは彼女を東雲へと誘引し、無敵の王者である中央に立ち向かうという壮大な目論見があったのだろうけど。

晃はそれに首を縦には振らななかった。

ただ、逃げたのだ。  
その理由、本音を全て語ることによって。

……それなのに。

晃は今こうしてここにいる。

そのことに晃は秀一に対しての申し訳なきでいたたまれない気分になったていたが。

演劇への未練が未だくすぶっているのも間違いはなくて。

晃はそれに、正直に答えることにする。

「ユタカや香澄さんの経験がまだ浅いせいなんでしょうけど……見  
てる側としては聞きづらい、分かり難いという印象がありましたね  
お互いの良い部分を出せずについて、折角の台本が生かしきれてない  
ようにも見えます。……オリジナルの台本でこのままのレベルなら、  
県も厳しいかもしれません。先輩のようなインパクトのある舞台慣  
れした演者が一人いれば印象としても大分違ってくるんじゃないが…

…」

舞台上に慣れること。それは、その物語の領域を認識している……つまり  
まりどれだけその世界に入り込めるかどうか、なのだが。

それこそが一流の証で。

全ての部員を見たわけではないが、そこまでの実力を持っているの  
は、秀一とあるいはここにいない榎美くらいだろう。

なんて思い至ったところで、ようやく自分が榎美に会いに来ていた  
ことを思い出す晃だったが。

「言うではないか。しかも中々に的確なのだから参るよ。やはり惜  
しい人材だな。いっそのこと掛け持ちで演劇部に入らないかね？」  
気分を害した様子もなく楽しそうにそう言われて。

逆に気づく、部外者の通りすがりのくせになんて傲慢で偉そうなことを口にしてしまったのか、という事実。

「ほんと、ずいぶんとお詳しいですね。わたくしもあなた自身が演じるところを見てみたくなりましたわ」

「……っ」

そして、そんな晃の口から出た言葉は、すっかり秀一以外の人間にも届いていたらしい。

かえってすがすがしいほどに嫌味を隠さない声色に晃が顔を上げると、そこにはお嬢様、としか言い表しようのないくらいインパクトのある女生徒がいた。

晃の知らない顔だからおそらく先輩だろうけど……不思議な色合いの、きつめのカールがかかった髪と。ハーフかクォーターか、舞台映えするだろうシャープで整った顔立ちが、否が応にも晃を引きつける。

思わず息をのんでリアクションしてしまうくらいに。

「副部長兼脚本を担当してもらっている飛田隆子君だよ。で、こっちは前から話の種にあがっていたもう一人の新人部員の星、十夜河晃君だ。」

……ふむ、星と晃って似ているな、今度からスターアキラと呼ばうだが、晃の遠慮のない暴言のせいで辺りの空気が微妙なものになっていることに気づいているのかいないのか。マイペースにお互いの紹介を始める秀一。

「新人部員ではないので変な呼び方はやめてください。それから……飛田先輩の言う通りですね、すみません。少なくとも部外者の俺が調子にのって言うようなことじゃない」

この時ばかりは自分に非があることが重々わかっていたので、素直



に頭を下げる晃。

ついでにもともと体育会系気質のある晃だったから、その口振りは丁寧だった。

それが冷たく凍えるようであれば尚良かったのだが。

「……あ、いやその。分かればいいのよ」

隆子としては、まさか素直に謝られるとは思ってなかったらしい。調子を狂わされたのか、なんだかひどくうろたえている。再び別の意味で微妙な雰囲気になったけれど。

「なんだ、つれないな。そこはノリで頷いてくれればいいものを。まあ、その所は地道に行く、ということ……隆子君、良かったら晃君に今終えたばかりの台本を読ませてやってくれないかね？ 晃君、君の話を気に入ってくれたみたいだしね」

やっぱりそれに気づいているのかいないのか、妙案、とばかりに一つ手を打って隆子にそう言う秀一。

「え？ ほ、本当ですか？」

「はい。聞いたのは最後の方だけでしたが、観る側が欲していることを第一に考えて作られている、という印象を受けました」

驚いたように聞き返してくる隆子に、晃はまたしても思ったままを口にしてしまっていて。

「すみません。言われた側から知ったような口を利いてしまって」

「分かってる、ですか……」

反省の意を示したのだが、隆子は自分の世界には入ってしまったかのように、それを聞いてはいなかった。

また何か失敗してしまったのだろうか、晃が後悔しかけていると。

「部長、そろそろ上がっても……ってトヤちゃんじゃないか。何してんのそんなトコで？」

舞台をはけてきたらしい豊の声が聞こえてきた。

「ああ、スターアキラが我が部に入ってくれるらしくてな。その話をしていたのだよ」

「デタラメを言わないでください。……違つぞ、そんなんじゃないからな」

一瞬でも気を抜くと部員宣言をしだす秀一の言葉を遮るようにして晃は叫ぶ。

すると、豊の隣にいた香澄が首を傾げて。

「それじゃあ何しに来たんですか晃さん？ あ、もしかして私たちの演技、見に来てくださった、とか？」

ちよつとからかうような、親しげな笑顔を見せてくる香澄。

晃がその時感じたのは不思議な違和だった。

確かに香澄とは同じクラスで豊という共通の友人？がいて比較的話すことは多かつただろうけど。

何故かその親しさが唐突なものに思えたのだ。

ただそれは。

今まで晃が気が付かなかつただけで。

本の中で彼女とよく似た少女と出会つて、晃の方が香澄に対し注視するようになったせいなのかもしれない。

「どんな感じですかね？ 正直なところ、聞かせてほしいんですけど」

続けてそう聞いてくる香澄に、そういうのは俺じゃなくて先輩に聞くべきなんじゃ、と思いはしたが、口から出るはずのそんな野暮な言葉はすぐに引っ込んで。

「秋の文化祭でならいけると思うぞ。……県大会だったら所謂一回戦負け、だろぅがな」

下手な嘘をつくくらいだったら正直に言った方がいいだろうと考えも確かにあつたけれど。

演者にありがちな挑戦的で自我が強く、気位の高いその笑顔が……なんだか頭の上がらない妹の姿とかぶって。

ついて出たのはあけすけのないそんな言葉だった。

「うっわ、酷いです。一瞬あげといて落とすなんてやな性格してますねー」

「正直なところを口にしたらこうなってしまうた。……なんて言うかその、すまん」

苦笑いの香澄にすかさず詫びを入れる昇。

「そこで本気で謝られると私たちが下手っぴだって宣言されてるよ。うなものですけど」

すると、返す刀でそう返されて。

なんて言ったらいいか分からなくなった昇をフォローするかのようにな、豊が口を挟んだ。

「たちつてオレも数に入ってるのかヨ！」

「……当然です。だって豊アドリブ多すぎ」

「え〜？ そんな胸一杯の愛で受け止めてくれよう。愛が足りないな、愛が」

「そんなものは元から存在してません。……金輪際ないですね」

終始軽い豊に、つれない香澄。

本当の所はどうなのか分からないが、少なくとも舞台の上では、豊の言葉の方が言い得て妙で正しい気もする……そう思った昇だったけど。

さすがにそれを口にするとはなかった。

そうやってからかって酷い目にあってる夕ローを幾度となく見てい

れば、仕方のないことなのかもしれない、などと自分を納得させて。そのまま何とも言えない表情で晃が秀一に目を向けると、秀一は晃の心の内を理解した、とばかりに頷いてくれる。

「ああ、つまり今のようなラブラブっぷりを舞台の上でも見せると、そういうことだな、うむ」

そして、よりにもよって一番してはならない表現で、旧体育館じゅうに響くいい声を披露する秀一。

「……分かりました。先輩だろうがなんだろうが潰します」

「ひ、ひいっ！ て、撤退……じゃなくて今日はもう解散っ、お疲れしたっ！」

それが舞台でできればパーフェクトだなと思える、よく通る底冷えした香澄の声。

真に受けて本気で逃げ出す……もとい解散の宣言をする秀一。

それに苦笑して、帰るための片づけを始めるその他の演劇部員。

「……」

それがきつと日常なのだろう。

この部に所属していない自分にちよつと後悔する晃だったけれど。

「おーいトヤちゃん。帰りの支度をするからちよつと待っていてくれやーい」

「……分かった」

そんな豊の声に言われるがままきびすを返しかけて。

再び思い出す、ここへ来た目的。

「すみません、飛田先輩。今日ま……上徳間さんは休みなのでしょうか？」

香澄達とのやりとりの中ただ一人、何やら考え込んでいた隆子は。晃に声をかけられ、はっと我に返る。

「榎美さん、ですか？ あっ、そうでした。部活が終わったのですから呼びに行かなくては！ 今、別メニューの自主練で図書室にいるんですの」

「図書室ですか、遠いな。……なんなら俺が呼んできましようか？」  
言ってから気付く、さしでがましき、だっただけ。

隆子はそれに、願ったり叶ったりとばかりに手を打って。

「悪いけどお願いしてよろしいかしら？ わたくし、その間に台本のコピーをしますわ。その、部員分しか台本を作っていないものですから」  
そう言うや否や、一目散に駆け出して行ってしまふ。

なんだか台本を見せてもらっただけのはずが、話が大きくなっているような気がして。

もしかしたらこれは秀一の演劇部に入れさせる罠だろうか、なんて思ってしまう晃。

「ま、そんな事はないだろうが……用心だけはしておこう」  
そもそも、一度入った部活を辞めるなんてナンセンスなことをするつもりはなかったから、その点では安堵してはいたのだが……掛け持ちについては流石に盲点だった。

このまま演劇部に入り浸るようになって、気付けば部員になってしまっている。

そんな姿が容易に想像できてしまうのが嫌で。

下手に流されると許容してしまいそうな自分があるのが困りものだったけれど。

「……とにかく、榎美さんに会おう」

晃はその事を、考えないで置くことに決めた。  
その時になつたらまた考えればいい。

そんな、一時しのぎな思考が、後になって痛いツケとなって帰って  
くることなど。

その時の晃は気付くこともなく。

## 第12話

それから……榎美を迎えに行くことを豊に話して。

そこに一仕事終えた香澄も加わり、三人で榎美を迎えに行くことにした。

もう、すっかり日は暮れていて。

普段ならとつくの間に帰途についている時間帯。

旧体育館のあるクラブ棟とも、教室のある教義棟とも離れた場所にある図書室は、

教義棟にある図書館とは別に、学習室が併設されているプレハブの建物の中にあつた。

受験勉強が締めを迎える秋頃にもなればこの時間帯でも賑わっている場所なのだが。

時期外れの今は、そこへ向かうものも帰るものも、晃たち以外にはいなかった。

「……ところで、自主練というのは？」

その道すがら、晃はふと疑問に思っていたことを口にする。

「ナニナニ？ トヤちゃんつては榎美ちゃんのコトが気になるのかい？ しかしっ、残念だったな！ 彼女にはオレという心に決めた人が………とうっ！」

ひゅんっ、ごすっ！

「ぐほっ」

あれほど目の当たりにし、学習していたはずなのに。

華麗にかわした豊を脇目に、気付けば香澄の裏拳は晃の横っ腹に炸

裂していた。

「ああっ!?!」「ごめんなさいっ!」

「い、いや、平気……」

上手く避ける豊がにくいのか。

避けられない晃がどんくさいだけなのか。

あの本の世界で遭った蛸の魔物から受けた一撃よりよっぽど効いたぜ、などとは言えず。

曖昧な笑みで誤魔化す晃。

「よけるな、この馬鹿っ!」

「へっへっん。つかまえてごらんなさい。愛しのボクの元へっ」  
再び腕を振り上げる香澄をからかうようにへらへらと駆け出す豊。  
流石、上手い逃げ方だなと密かに感心する晃だったけれど。

「晃さん、聞いてないんですか? 柗美さんのこと?」

切り替えるように発せられた香澄の言葉内には、どこか深刻そうな  
雰囲気があつて。

「……? 彼女に何かあるのか?」

先を促すように晃が問いかけると、香澄はしばらく迷った後、重々  
しく頷いて。

「晃さんなら大丈夫かな。まあ、演劇部のみんなは知ってることではあるんですけど。」

実は彼女、感情が欠落……っていうとちょっとおおげさかもしれませんが、どうやらうまく感情が表せないらしいんです」

「……………」

雰囲気通りの、ヘビイな香澄の言葉。

豊が気を使って席をはずした理由がよく分かるくらいに。



「感情が欠落？ 別のそんな風には……いや、待てよ」

言われてみれば、確かに思い当たる節があった。

笑顔などは、とても自然なのに。

それ以外の感情を見せるときに、何かを考えて固まっているような……そんな表情を見せていたことを。

「そう言えば……榎美さんが泣いたところや怒ったところを、見た記憶はないな」

まだまともに会話を交わしてそれほど経っているわけでもないし、泣く機会も怒る機会も、そうそうあるものでもないだろうけど。

「よく見ていますね。そうです。榎美さんは喜怒哀楽のうちの二つ、怒と哀を上手く表わせないそうなんです」

晃の考えと言葉に頷く香澄。

しかし、そうなっているとさらに新たな疑問が浮かんでくる。

「一体何故、そんなことに？」

それに関しては、おいそれと聞いていいものでもない気はしたけれど。

案の定、香澄は首を横に振った。

「その辺りは私たちもよく知らないんです。……ただ噂では、榎美さんの両親がいないことが原因らしいですけど……」

またしても初めて耳にする、榎美のこと。

いないとは、亡くなったからいないのか……それとも別の意味なのか。

それこそ聞いてどうにかなるものでもないだろうけど。

そんな事を考えている間に、香澄は再び気を取り直すように言葉が続ける。

「それですね、征美さん本人はその事を取り立てて大事だとは思ってないみたいなんですけど……演劇部に所属する身としては大事なんですよね、これが」

大きく分けて四つある感情のうち、二つがまともに表現できない。それは、生きていくには周りがフォローすればなんとかなることなのかもしれないけれど……演じる、となれば流石にそうはいかないだろう。

「……一年期待のエースだって聞いてはいたがな」

「期待のエースですよ。私なんか到底足元に及ばないくらい。だけど、今の演劇界で評価されるのは悲劇、なんです」  
言われて理解する、演ずるものにとつての大事。

喜劇だけで頂点は取れない。

それは、ここ数年の関東大会、全国大会に如実に現れていて。

頂点を目指すならば悲劇の枠から外れられないことはもはや常識、  
と言つてもよかった。

「だから征美さんは自主練をしているんです。泣くこと、怒ること、それを目や耳で感じて覚えるために。……そんな努力をされたら私たちだつて全力で全国を目指すしかないじゃないですか。そう言う意味でも、征美さんは演劇部のエースですね」

その言葉に強い意志を込め、微笑む香澄。

今更ながらそんな事も知りもせず自己欺瞞も甚だしい上っ面の評価をしていた自分が恥ずかしくなってくる晃。

「軽率だったな。……重ね重ねすまない」

「だから、そこで謝っちゃったらダメなんですって。まだまだなの

は重々承知してます。それをふまえてポジティブになれるセリフ、  
お願いしますよ？ 私のやる気が出るようなのを」

言葉通り前向きにまとめる香澄。

しかし、気の利いた言葉の一つも出てこない晃は、余計に申し訳な  
くなるばかりで。

「ま、それはこれから期待つてことで……それより晃さん、今思  
い出したんですけど柗美さんに何かしたんですか？ 随分と怒って  
いたみたいですけど」

そんな晃を察して話題を変えてくれる香澄に、晃は気遣いを感じず  
にはいられなかったけれど。

それと同時に、また浮かんでくる疑問。

「怒っていた？」

「ええ。……まあ、表情の上では変わらないんですけどね。結構分  
かるものなんですよ、これが」

返ってくる答えは、たとえ感情がうまく表現できなくてもちゃんと  
それを受け取ることができることを誇りに思っていることがよく分  
かって。

「……と言うか、その原因は俺なのか？」

「はい、それはもう。覚悟しておいたほうがいいんじゃないですか  
ね。あんな柗美さん、私初めて見ましたから。存外、晃さんもやり  
ますね」

「うむ」

打って変わって意地悪そうな香澄の笑み。

そこはかかない不安が晃をよぎって。

仏頂面のまま、晃は足取り軽く図書室へと向かう香澄の後を追うの  
だった……。

そして。

すぐに図書室のある二階建ての大きなプレハブの建物の前へとたどり着いて。

「そんなところで何してるんですか、豊」

「ん〜、なんてーかな。トヤちゃんさ、榎美ちゃんに何かしたのか？」

その二階にある入り口へと続く階段下で手持ち無沙汰に立っていた豊に、香澄が訝しげな様子で声をかけると。さっき香澄から聞いたばかりの、同じような言葉が返ってきた。

「いや。思い出せる範囲では何かしたつもりはない、と思うが……」

「随分自信なさげだな、オイ」

呟く晃に、苦笑する豊。

考えてみれば、葵にしたって晃が預かり知らぬうちにあの手に負えない状態になってるわけで。

晃がそう思っただけでも、いつの間にか怒らせるような何かをしてしまった可能性はないと言い切れなかった。

晃が自嘲めいた苦笑を浮かべて返答に困っていると、かわりとばかりに香澄が口を開く。

「……やっぱり榎美さん、怒ってるんですか？」

「怒っているっつーか、あれは拗ねてるって感じかな。ヘッドホンしながら画面に夢中になってるかと思っただけなら聞こえたんだよね、」

『晃くんの嘘つきっ！』って呟きがさ。……で、これはオレが出し

やばるよりトヤちゃんに任せただけが面白……じゃなく、その方がいいと思っただけだよな、これが」

「なるほど」

柗美の口調を真似てみたり、わざと言い間違えたりいそがしい豊の言葉に、あっさりと納得してしまう香澄。

そのまま二人の視線を受けた晃はますます困惑するしかなかったが、全然全くもって似ていないのに、嘘つき、という言葉が深く晃の胸に突き刺さった。

「……分かった。ちょっと行ってくる」

「お、おう。健闘を祈る」

「そんな深刻に取ることもないと思いますけどね……たぶん」

まるで決死の気分で図書室へと続く階段の一步を踏み出す晃。

からかい半分のつもりが、マジな晃にちょっとひいてる豊がいて。

背中から聞こえる、あまりフォローになってない香澄の弦きが晃に追い討ちをかけてきたけれど。

はたして柗美は、図書室の最奥にある視聴覚スペースにいた。

ちょうど晃に背を向ける形で、晃の知らない古い洋画にかじり付いている。

それは一見、ただ夢中になって時間を忘れているだけにも見えるけれど。

その表情が見えないせいなのだろうか。

香澄や豊にそう言われたからなのか、怒っていると分かるような……近づきがたい雰囲気を感じられた。

「……さて、参ったな」

すぐ近くにまで来たのはいいもののどう声をかけるべきなのか分からず、立ち尽くすしかない晃。

どうもこうも肩をたたけばいいんじゃないのかと頭では思うのだけれど、どうにもそれ実行に移せないのだ。

端から見ればなかなか怪しい人だったのかもしれない。

だが、幸か不幸か、そんな晃が不審人物としてここを管理している先生に見咎められるよりも先に。

柗美は先に晃のこと……背後に誰かがいることに気づいたようだった。

停止ボタンも忘れて、はっとなって振り返る。

「……………」

「……………」

それは、一瞬の間。

一瞬の邂逅。

なのに晃は、その沈黙がもの凄く長く感じられた。

感情が欠落している、と香澄は言っていたが。

それが間違いであるかのように、柗美の表情には様々な感情が浮かんでいた。

敢えて言葉に表すとするならそれは驚愕、警戒、恐怖……そして空しさ、だろうか。

それは巧妙に姿を隠すように、あっという間に霧散して消えてしまったけれど。

晃の目ははっきりとそれを捉えていた。

それは、誰もが気付けるものではなく。

ある意味晃の才能、と言ってもよかったのかもしれない。

その、普通なら気づかない細かな感情の機微を読みとる力があつたからこそ、相手の感情を鏡のように反射できるのだろう。

そのことに本人が全く気づくことがないからこそ、宝の持ち腐れど

ころか晃にとってマイナスの効果を及ぼしてしまっているわけだが……。

その表情は、思い起こせば晃が初めてあった会った時に垣間見たもので。

覚えがあるなしではなく、そんな表情をさせてしまう自分自身の存在がひどく申し訳ないと晃は思った。

謝って済むのなら話は簡単なのだろうけど。

切に思うのは、そんな表情を向けられる理由を知る事で。

「榎美さん、俺は……」

一体どうすればいいのか？

思わずそう聞こうとして。

「晃くんどうしてここに？　もしかしてわたしに会いに来てくれたの？」

純粋な驚きと、嬉しそうな口調。

それは、一見して完璧なものに思えた。

直前まであった表情の変化に気づいていなければ……

その心は別の所にあるのかもしれない、なんて考えもしないくらいには。

「どうして？　ああ、昼間の詳しい話をしたくて君に会いに来たんだ。旧体育館を覗いたら、ここにいて聞いていたから……」

「君、じゃなくて名前と呼んでよ。わたしたち旅する仲間ですよ。」

……誰かさんは約束させといてひとりで『旅』楽しんでたみたいだけどー」

だが、晃は一番聞きたくて、でも聞きたくないことを棚上げし、流されるままにここに来た経緯を話した。

すると、柗美はそんなことを言って頬を膨らませる。それが柗美なりの怒り、だったのだろうが。前段のこともあり、どこか空しく感じてしまう晃。

だけど。

そう言われて、気づいたことがあった。

その一つが、へたに相手の感情の機微が分かってしまうからこそ、人から距離を置かれるのかもしれないということだ。

もう一つは、柗美の怒っていた……あるいは拗ねていた理由だ。

「……すまない。柗美さんに『旅』に行くのは詳しく話を聞いてからと言ったのは俺の方だったのに。光る本が浮かんでいるのを目にしたらいてもたってもいられなくなってしまった」

本当は……知らなかったのではなく、知ろうとしなかっただけなのかもしれない。

自分が怒られたり嫌われたりする理由なんてないなんて、おこがましい決めつけに自分が情けなくなる晃。

「そっかあ。……うん。その気持ちは分かるよ。わたしだって同じ状況だったらきつと我慢できないと思うもん。今回だけは許してあげる」

だけど。

正直に謝ったからなのか、柗美は笑って許してくれた。

そう、今までの上辺だけだと感じていた表情じゃなく。

子供っぽく、無垢で尊大で無邪気な……そんな笑顔で。

それは、本の世界を認識し楽しむものとお互いが認識した時の、『たとえ嘘であってもかまわない』とさえ思える、始まりの笑顔と同じだった。



言葉通りそれを見ただけで、今までくすぶっていた疑念のようなものが弱まり、消えていくことを自覚する晃。

誰にだって表に出したくない含みの感情はあるのだろう。

榎美が晃に対し思うことがあるように、晃にだって思うところがあるのは確かだからだ。

それを隠そうとするだけ、榎美は葵や晃と比べても大人なのかもしれない。

そして、それに気づかないフリをすることも……人生うまくやっっていくコツなのだろう。

それがなかなかできないから、晃は世間にズレを感じるのかもしれないけれど。

「それでそれで？ 晃くんの見つけた本の世界は、どんなのだった？」

榎美は、そんな益体もないことを晃が考えていることなど知る由もなく。

実は聞きたくて聞きたくて仕方がなかったのが如実に分かってしまっくらいに、身を乗り出してくる。

あまりの近さに、思わず逃げるように一歩下がる晃。

「……晃くん？」

榎美の呟きに……微かに浮かぶ不安感。

そのせいで返す言葉を言うべきかわざらるべきか、随分悩んだが。

「悪いが……詳しいところはまた改めてしよう」

「ええ！ なんで？」

にべもなくそう呟く晃に、榎美は不満そう……というか驚いた顔をしていただけれど。

「……後ろの野次馬二人組に聞かれてもいいなら話は別だがな」  
下がったままの自分がなんだか負けたみたいでなんだか嫌だったから。  
自分でも信じられないくらいの労力を使って、晃は一步近付きそう耳打ちする。  
後から思えば、その行動そのものが野次馬を喜ばせることになっていたわけだが。

「あ、香澄ちゃんと豊くんも来てくれたんだね」  
晃が思っていた通り、本と本の世界のことは、二人には話していなかったらしい。  
榎美は晃の意志をくんだかのように顔をあげ、いつからそこにいたのか、本棚の影に身を寄せて晃たちを窺っていた香澄と豊に声をかける。

「あはは。えーと、もう部活終了なので、迎えに来ました」  
そのまま駆け寄る榎美に、誤魔化しきれしていない笑顔で弁明している香澄。  
「なんだ、バレてたのかよ、隠れてたの」  
「隠れてるつもりならヒソヒソ話は止めることだな。逆に目立つ」  
一方、ちよっぴり悔しげに榎美と入れ替わりで近付いてくる豊に、あのどうしようもなくなつてた状況で逃げ道を作ってくれたことに内心感謝しつつ、晃はそう答える。  
すると、豊は何を思ったのか、腕を晃の肩に回して。

「いつの間にやら随分といい雰囲気じゃないかね？　くのくの」  
なんて言ってきた。

「……すまん。言っている意味が分からない」  
「トボけんなよう。榎美ちゃんだよ。いつの間にあんな仲良くなっ

「たんだ？」

なるほど、傍目から見ればそう見えたらしい。

「……秘密だ」

しかし、柗美その仲良くなった理由を彼らに話していないことを分かった以上、晃がそれを口にするわけにはいかなかった。

そのまま一足先に、晃は図書室を出て行く。

「何だよ、嬉しそうな顔しやがって。……気になるじゃんよ」

後ろ手に聞こえた豊の言葉は、正しかったのだろう。

そんな顔になってる自分が何だかこそばゆくて。

こうして逃げ出すようにして図書室を出たのだから……。

## 第13話

そして……。

晃たちはいったん旧体育館に戻って。

隆子からの台本のコピーを土産に、晃は榎美と帰路についていた。時間があえば豊やタローとは東雲の駅まで一緒に帰るのがいつものことだったが、豊が変な気をきかせたらしい。

気付けば榎美と二人きりになっていて。

「……で、本の世界のことなんだけどな」

「うんうんっ」

すっかり暗くなった帰り道。

右手にある新幹線のための背の高い防音壁を眺めながら、晃が本題を切り出した。

思ったよりも近くで、弾んだ声。

それはまたしても沈んだものにしてしまうかもしれないことに、晃は罪悪感のようなものを覚えずにはいられなかったけれど。

気づかれなくらいにお互いの間を空け、晃は言葉を続ける。

「榎美さんが俺に聞きたいことがあるように、俺自身にも榎美さんに聞きたいことが山ほどあるわけで……どうにもこのまま立ち話とはいきそうにない。つまりその、なんだ。同じことを繰り返すようでなんだが、また後日、ということにしないか？」

もうすでにいつもの部活の終わる時刻を大幅に過ぎてしまっている。東雲の駅から15分ほど電車で揺られた隣町にある晃家は、今時珍しく、できうる限り食事は家族全員で、と言うことが決まりになっ

ていて。

あまり遅くに帰るわけにはいかないというのが半分。

そして残りの半分は、榎美の家族が余り夜遅いと心配するだろうと思っただけなのだが。

「え？ 晃くん何か用事でもあるの？ 立ち話が嫌なら駅前のマックで話す？」

今更ながらに気付かされる、その心配する両親がいない、と言っていた香澄の言葉。

そしておそらくは、榎美の感情が欠落してしまっているという、その原因。

早く帰りたい理由を口にしたわけではないが……。

何だか晃は言っではいけないことを言ってしまったような気がして、コンクリートの壁に向けていた視線を榎美に向ける。

彼女の背が、晃の頭ひとつぶん以上低いせいか、その表情は窺えなかった。

きつと、完璧なあの笑顔を浮かべているのだろうけど。

「……ここから駅まで歩いて10分、そして俺の乗る予定の一番遅い電車が来るまで12分。流石に10分で話が終わるほど簡単じゃないだろう？ それにもう遅いしな」

「それはそうだけど……12分後の電車に乗らないとダメなの？」

次の待つてればいいんじゃないの？」

「ああ、駄目だな。何だか負けた気がするからな」

榎美が言うように、都会ほどではないとしても、30分もすれば次の電車はやってくる。

榎美の言う通りだからこそ、晃は何だかわけの分からない言葉を返すことしかできなくて。

「ふうん……そっか。葵ちゃんの言う通りだね」

「葵ちゃん？」

だが、そこで思いも寄らぬ名前が出てきて、晃は思わずそのまま反芻してしまう。

すると柗美は、おかしそうに笑みをこぼして、言葉を続けた。

「うん、葵ちゃんがね言っただんだよ、晃くんのこと。『あいつは、何だか知らないけど、必ず決まった電車に乗って帰ってる』って。

『走って間に合うのなら走って帰る』って」

流石演劇部のエースと言われるだけはあるのか、葵のセリフのころだけ完璧に葵になって見せる柗美。

本当に葵にそう言われたみたいで、しばらく固まっていた晃だったけれど。

「言われてみれば、そうかもしれないな……」

葵と柗美の話題に自分の名前が出てくることすら、晃にとっては驚きではあったけれど。

確かに晃の帰る時間はだいたい決まっただけ。

帰る時間が近付くと常に電車の時間を気にしていた。

どんなに遅くても、今から10数分後に来る電車で帰っていた。

時間などは考えず、来た電車に乗ればいいだけじゃないのか、という発想は晃の中にはなかった。

それは実のところ、理由がないわけでもないのだが……晃がその理由を口にしないので、部では帰り間際になると理由もないのに早く帰りたいがる変なヤツ、で通っているのだろう。

晃はそんなことを考えながら、頷いてみせる。

「ふうん、誰かと待ち合わせしてるんだ？ わたしとの時間より、その子との時間のほうが大切なの？」

「……え？」

そんな話は一度たりとてしたことはなかったはずだ。  
それなのに何故柗美はそんなことを言うのか？

……そう思い、晃は柗美をまじまじと見つめたが。

「なんてね。ちょっと前に見た本にそんな台詞があったからつい」  
しかし、柗美は可笑しそうにくすりと笑って、そんな言葉を返して  
きた。

そこでようやく気付かされる、彼女がカメラをかけていただけだと言  
うこと。

というより、そもそも冷静に考えてみれば柗美が晃に対してそんな  
事を言うはずがない、という点で気付くべきだったのだろう。

(……懲りないな、俺も)

晃は内心そうひとりごち、苦笑する。

こういった類の騙し……『演技ごっこ』は、妹の常套手段で。  
騙しやすいとよく言われる晃は、律儀にも毎回それに引っかかって  
いたのだ。

「もしかして……本当に誰かと待ち合わせしてたりする？」

そんな晃を、窺うように見上げてくる柗美。

真面目に自分との時間より、他の人との時間を優先しようとしてい  
ることを憂いているような、そんな口調。

暗がりで見えるのは、そんな柗美の外灯を映し出す瞳の色ばかりで。  
晃はその時、単純に柗美の演技ごっこはまだ続いているのだと、そ  
う判断して。

だからがらにもなく、それに乗ることにした。

「待ち合わせなんかしていない。ただ単純にいつものリズムを崩し  
たくないだけなんだ。

……それに話が長引いて柗美さんの帰りが遅くなったりしたら、俺

が心配だから」

それは、その場の勢いに任せての、ちょっと都合のいい事実。帰る時間が決まっている理由は、実は塾通いをしている妹と帰りの時間を合わせる意味合いが強かったのだが。

わざわざ待ち合わせなんかしちやいないし、当たり前のように外れたい割に、いつもを意識しているのも事実で。

あまり遅くなると柗美のことが心配になるのは当たり前のこと。

「……」

「……」

それは、一瞬の静寂。

そんな遠くない所で、電車の警笛の音が聞こえて。

「そつか。晃くんが心配で眠れなかったら大変だもんね。ここは大  
人しくひいてあげましょう。」

あ、それじゃあさ、明日休みでしょ。会って話さない？ そうだな  
、午前10時、駅前とかで」

「そつちから誘ってくれると助かる。実はそれを切り出していいも  
のか迷ってたんだ」

お互い、未だにちよつと芝居がかったままに、そんな約束をする。

「じゃ、また明日ね。今日はありがとーっ」

「……ああ、また明日」

そして二人は、簡単な挨拶を交わし、駅前で別れたのだった。

柗美が発したありがとこの本当の意味を、その時の晃は気付くこと  
はなく……。



そして、次の日。  
学校が休みの日。

いつものように東雲駅に降り立った晃は、しかしいつもと違った新鮮な気分を味わいながら改札口を出る。

そして、明らかに駅構内なのに何故か市道になっている渡り廊下を抜けると、いつもより陽の高い澄んだ青空が見えた。

確かに、いつもとは違うだろう。

何せ、晃が思い出す限りでは、こうして私服でこの東雲に降り立ったのは、東雲高校に入学する前、学校見学をしにきて以来だったからだ。

それだけはいつもと変わらないストップウォッチつきのごつい腕時計を確認すると、時刻は約束の30分前だった。

「……流石に早すぎたか」

ちようどいい電車がなかったから仕方がないと言えば仕方がないが、晃はとみに自身のみに対して時間にするさいとこころがあった。

どうしても時間に遅れてしまう人がいるように、それが自分の性分なんだろうなと晃は考えている。

逆に、相手がルーズだとしてもあまり気にしない。

むしろ、待つのは好きなほうでもあった。

だから、晃はそれをあまり気にした風もなく、待ち合わせ場所のバス停のベンチに腰掛ける。

ベンチには、誰もいなかった。

とりあえず、時間が来るまで読みかけの小説でも読んでしまおうか、

なんて考えて。

晃自身使い手がよくないので普段はあまり使わない手提げタイプのカバンから、本を取り出そうとして。

「……………光ってる？」

取り出したのは目当ての小説ではなく、あの異世界へと運んだ、宙浮かぶ光る本。

昨日の夜、カバンにしまう時は確かに何の変哲もない古ぼけた薄い本だったのに。

宙に浮かびこそしなかったけれど、それは淡い光を放っていた。まるで脈打っているかのように。

「……………」

一体どんな仕組みで光っているのだろうか？

あるいは、何故今になって光り出したのか。

ページを開いてみたが、中身の文章に変わった様子はない。

その原因を知りたくなって、晃は太陽の光に透かしてみたり、ふつてみたりといろいろ試してはみるものの、そんな事で原因が分かるはずもなく。

それも柎美に聞いてみればいいんじゃないのか、と言う結論に達して。

晃がひと心地つこうとしたその時。

「その本だかなにかは他人には見えないから、扱うときは気をつけたほうがいいわよ。十夜河くん？」

いきなり、全く前触れもなく声をかけられ、晃は内心ぎょっとして顔をあげる。

「……………ああ、確か、テニス部のタローの先輩、でしたか」

3年3組、小船山英理。こぶねやま・えり

葵とひと悶着あったあの屋上で出来事の時に、榎美の隣にいた少女。

反射的に言葉を返して、そこまで思い至った晃は、あることに気付いてまじまじと英理を見つめる。

英理は屋上で会った時と同じ、何だか晃を観察するかのような目で見ていて。

「つまり、先輩もこの本のことを知っている、関係者……ということですか？」

「残念ながら、あたしには見えないわ。あの子から本の話と……あなたの話は聞いていたから、カマをかけてみただけよ」

あの子、と言うのは榎美のことだろう。

榎美が本のことを話している時点で、彼女が関係者であることは間違いはなさそうだったけれど。

一石を投じるつもりで発した晃の言葉をあっさり否定し、そう言って笑う英理。

晃はそんな英理に、どこかで見たような……そんな既視感を覚えていたけれど。

「それにしても早く来すぎじゃない？ 早く来すぎるのだって、時間を守れないヤツって言われるの知ってる？ しかも戦闘態勢ばかりなカツコしちやって気合入ってるし。ま、あたしとしてはその方が都合がいいけど」

続いたその言葉は、案の定あまりよく思われてはいないんだろうなという雰囲気がよく分かるような、からかいの成分が混じっていた。

「どこか変ですか……？」

時間にするさいのは晃自身の性分であるから、言いたいことは分かるし、英理がそう言うのならそうなのだろうと納得してもいいが。

服装に關しての台詞はちよつと黙つていられなくて。思わず晃は威圧のこもつたそんな言葉を返してしまつた。

「ふふ。お茶目な挨拶じゃない。そんな顔して意外と沸点低いのね。大丈夫、心配しないで。第一印象じゃセンス悪そうに見えたけれど、なかなか決まつてるわよ」

すると英理は、僅かばかり目を見開いて、それから大人の余裕を持つて穏やかに微笑む。

実の所、センスが悪いというかそういうことに晃が無頓着であるのは確かだ。

今日着ている服は、そんな無頓着な晃に腹を立てた妹が見立ててくれたものだった。

いざという時のもの、と言われて。

晃は何がいざなのがよく分かつていなかったけれど……英理の言う通り、らしくない怒りの感情は、妹のことを貶されたと思つたからなのかもしれない。

しかし、そうではないことが分かつて。

再び落ち着きを取り戻した晃は、何故英理は桎美との約束を知つていて、さらに声をかけてきたのだろうか？ という疑問が浮かんできた。

「それはどうも。……それで、小船山先輩。何か俺に用ですか？」  
桎美と同じように本と本の世界のことを知つているのなら、英理にもその事を詳しく聞いてみたいところだったが。

本自体は見えないと言つてはいるし、晃が早く約束の場所に来ていたことを助かつたと、そう言つていたことを考えると、何か事情があるのかもしれない。

それを窺う意味も込めて、そう問いかけたわけなのだが。

「ええ、あの子のことで、十夜河クンに話しておかなきゃいけない

ことがあってね」

「…………話しておきたいこと？」

英理は、晃が半ば予想していた通りのことを口にした。しかしだとすると、英理が柎美との約束を知っていたことはもちろん、晃が早く来ることまで見越していたことにもなるわけで。

それはきつと偶然では片付けられない理由があるのだろう。

晃はそんな英理の真意を問うように英理を見据える。

「そう、あの子が『旅』に出る理由……………ううん。あたしから言わせてもらえば、『旅』っていう幻影にとりつかれてしまった理由。その幻影に付き合おうとしているあなたに、知ってもらいたかったの」とすると帰ってきた言葉は、確かに本人の前で言うべきではないと思える、辛辣とも取れそうな言葉だった。

つまり、何らかの原因があつてないはずの幻にとりつかれてしまつていると、そう言いたいのだろう。

もしかしたら、晃のことも、ありもしない幻影に分かったフリをして付き合っている、なんて思っているのかもしれない。

「幻影なんかじゃない。幻想の世界ではあるが……………気のせいでも迷いでもなく、それは確かに存在していて……………」

だから、それは違つと晃は必死になつて弁解しようとした。

しかし、本の見えない、あの世界を知らない人物にどうやってそれは幻影ではないと説明、あるいは証明すればいいのか、晃には分からなかった。

どうしても、しどろもどろになつてしまふ晃。

だが英理はさつきと同じように、可笑しそうに笑みをこぼして。

晃のすぐ隣のベンチに腰掛けた。

何か近い、とも言えず晃は自主的に詰める。

それを見ていた英理は、何故だか大笑い寸前で。

訝しげに見やる晃の肩を、ばしばし叩きながら再び口を開いた。

「ふふつ、何よ。聞いてたのと違うじゃない。あなた、普段からいろいろ誤解されて損するクチでしょう？」

「……」

初めは独り言のように、続いて晃自身に問いかけるように。

対する晃は、何を誤解され、何を損しているかすらはっきり分かっていないせいもあり、何も言えなかった。

それがいけなかったのか、ふと英理は笑みを止めて。

「一体何が嘘で何が本当なんだか……」

今度は間違いないく、そう独り言を洩らした。

それは、どこか自嘲的にも聞こえて。

ますます何と言えばいいのか分からなくなる。

それが申し訳ない気がして、晃が渋面を浮かべていると。

英理は切り替えるようにして誤魔化し笑いを浮かべた。

「ま、そんなのどうでもいいことよね。あたしはあの子が悲しい思いをしなければ別にいいの。」

十夜河クン、あなたはその責任が……持てる？」

そして呟くのは、何だか先程の辛辣さが嘘のような……何故だか母親を思わせる、そんな言葉だった。

少なくとも……その言葉においては、真実であると。

晃にはそれが理解できたから。

晃はそれに答えるようにひとつ頷いて。

「……責任が持てます、なんて大それたことは言えません。ただ彼女の悲しい顔を見たくない気持ちは俺にもあります。表情としてそれを見たことはありませんが」

その、一見変わらない表情の先に見えるもの。

それがもし自分の責であるのならなおさら見たくないと、晃はそう思った。

「そこは嘘でも頷いとかなないと話が続きませんように」

「そう言う嘘は嫌いです」

「またまたあ」

再度からかうような英理の笑み。

そこからは、発した言葉の本当の意味に気付いてくれたのかどうかははっきりとしなかったけれど。

「ま、いいか。少なくとも十夜河くんはあの子の内面にあるものが見えてるみたいだしね。……わっ、後15分しかない。それじゃさっそく本題といきましょうか」

ようやく入ったらしい本題。

どうやら晃には、それを聞く権利が与えられたらしいことは、なんとなく分かった。

権利もなにも話しかけてきたのは英理のほうだったけれど。

それを言うのは野暮なこと、なのだろう。

どうせ証美が来るまでまだ15分ある。

晃は黙って頷いて、先を促したのだった……。

## 第14話

「あの子が旅に出る理由はね、亡くなった両親にあるの」  
「……………亡くなった？」

英理の語る本題。

それは、のっけから重苦しい雰囲気があった。  
確か、香澄はいないようなニュアンスで話していたはずなのに。  
思わず聞き返してしまう晃。

「ええ。もしかしていなくなったって、そう聞かされた？」

「本人からじゃないですけど」

「それも仕方ないわね。だってあの子本人がそう思ってるんだもの。  
お父さんとお母さんは遠い遠い世界のどこかへ行ってしまっ  
てこないんだ……………って」

「それは……………」

死の意味が分からない子供を諭すための言葉。

普通なら大人になるにつれ、そうでないことに気付くはずで。

「そう、普通なら本当はそうじゃないって気付けた。だけどあの子  
はそれをそのまま信じたの。」

……………その遠いはずの世界が、手に届くはずのない別世界が、あの子  
にとってはそれほど遠くなく、手の届く場所にあったから」

「それが、『旅』の世界？」

もう出ていた答えを、晃は口にする。

英理は、それに頷いて。

「そういうことになるかしらね。だけどあたしはそのことを、あの



子が両親の死を認めたくなくて作り出した幻だと、そう思っているわ。……さつきも言った通りにね」

「しかし、俺の見た世界は確かに存在していた。あれは絶対、夢でも幻でも……」

ない、と言いかけて晃は口を嚙む。

何せ、自分や柁美の言葉以外に証明できるものがないのだ。

あれは夢じゃないと、晃が思い込んでいるだけにすぎないと言われれば、どうしようもない。

逆にあれが柁美の幻影だとすると、何故それを晃も共有しているのか、という疑問が出てくるわけなのだが。

「ううん。その『旅』の世界が本当にあるのか、それとも幻なのかは、本当はどっちでもいいのよ。

それより問題なのは、あの子が両親の死を受け入れようとしないところにあるの」

その疑問よりも先に、英理は首をふってそんな言葉を口にする。

「その、両親は……」

聞きづらい質問。

いい澱む晃に英理は察したのか、それに答える。

「あの子が中学にあがったばかりの、高速道路での事故だったわ。

仲のいい親戚と一緒に家族旅行の帰り。助かったのはあの子とその親戚の娘だけだった。

……あの子にとって、目の前で降りかかってきた両親の死は、とても辛いものだったんだと思うわ。

そんな両親の死を否定し、感情をすら捨ててしまっくらいにね」

典型的な巻き込まれ型の事故だったと英理は言う。

何故自分だと運命を呪い、原因を引き起こしたものへの制限なき怒りと、戻らない日常への悲しみ。

精神こころが耐え切れなくなつた柗美は、それらを全て忘れることにしたのだらう。

「『遠い遠い世界へ行つてしまった』って言葉は、そんなあの子にとつて例え幻でもいいから……」

縋り付きたかつた希望の糸だつたんだと思うわ。それが本当か虚実かつて考えることは結局あだし個人のエゴみたいなもの、なんでしょうね。……事実、あの子の言う『旅』の世界が、あの子の心を救つてくれたのは確かなのだから」

「……………」

言い終えた英理は、まるで自身で体験したことであるかのように、深い息を吐く。

それは、最近知り合つたばかりに晃が聞く話としては重すぎて。

「何故、その話を俺に？ 本人の知らぬところで俺なんぞがおいそれと聞いていい話じゃないでしょう？」

沸き上がるままに出たのは、何に怒っているのかも分からないような、そんな苛立つた呟き。

それは、昨日香澄から柗美のことを聞かされた時にもちよつと思つていたことで。

両親の死も、それによる感情の欠如も、本人の口からでもないのに、自分が聞いてしまつてよかつたのかと。

晃には、罪悪感があつた。

何を憂うことなく、何起こることもなく普通に暮らしてきた自分がそれを聞くことに。

何故なら……そんな柗美の気持ちを、本当の意味で理解することはできないだらうからだ。

「俺なんか、なんて言わないで。あなたはもうあの子の目の届く場所にいるんだから。」

……それに、知らないで傷つけることほど性質の悪いものはないでしょう?」

晃の発した言葉に、一瞬だけ驚いたような表情を見せる英理。だが、それに続いた英理の言葉は、負う理由のない罪悪感を覚えていた晃の目を覚まさせるほどに真理をついていた。

いみじくも、晃は本の世界を体験し、それを柗美に伝えた。

そのことに、こっちも嬉しくなってくるほどに喜んでいた柗美。あれは、世界を共有できたことへの仲間意識からくるものだけではなかったのだろう。

あの本の世界を共有した時点で、確かに晃は責任を負ったのだ。

『あなたはその責任が持てる?』

そう言った英理の言葉が、今になってじわじわと身に染みてくる晃。そして、英理の言う通りに。

そのことを予め知らなければ晃はきっと柗美を傷つけただろう。

『責任なんて持てない』

先程発したばかりの自身のその言葉が、痛いほどそれを証明している。

「せっかくのデート前に、テンション下げようなこと言っちゃってごめんなさいね。でも、どうしても知ってほしかったから。……あの子の彼氏候補としてね?」

打ちひしがれて言葉を失う晃に気を遣うかのように、からかい口調の英理の言葉。

「一応彼女の名誉のために言っておきますが、デートでも彼氏候補でもないですから」

確かに、このまま下手に沈んでいたら柗美も訝しがるだろう。

晃は半ば無理矢理気分を上げて、英理のからかいに応える。

「そう思ってるのはあなただけだったりしてね」

「……え？」

しかし、何だか聞き捨てならないような事を言われた気がして。

思わず晃が間の抜けた声をあげると、いつの間にやら立ち上がった英理が、見本を見せるかのような笑顔で言った。

「笑顔笑顔、この話をしたことはあの子にはオフレコなんだからしつかりしてよね。十夜河クン！」

「そうですね。なんて言うか……ありがとうございます」

晃自身、何に対して感謝の意を口にしたのか、自分でもよく分かっていなかった。

でも、わざわざ話してくれた英理に、そう言わなければならないよ  
うな、そんな気がしたのだ。

「……変な子ね、十夜河クンって」

そのよく分からない言葉を受けた英理は、言葉以上に何だか戸惑っているみたいだった。

その顔に浮かぶのは、それこそ罪悪感、だろうか？

晃には英理がそんな表情をする理由が分からなくて。

じつと英理の顔を見据える。

「……あ、やばっ。もう行かなきゃ。それじゃあまたね、十夜河クン！」

それに耐え切れなくなったのか、何だか逃げるみたいに英理は走り去っていった。

「……」

それを、晃はただぼうつと見送っていて……。

それから、約束の時間のちょうど一分後。

柗美は英理の言葉通り、時間通りにやってきた。

「お待たせ、晃くん」

向けられるのは、何にも縛られることのないだろう眩しい笑顔。

「いや、別に。……待ってはいない、と思う」

だが、返す言葉に、晃はどうしてもぎこちなさが出てしまう。

あんな話を聞かされて、こんな笑顔を見せられて。

まともなりアクションなどできるわけもなく。

「晃くん、何か怒ってる？ わたし、時間間違えたかな」

不思議そうに首をかしげる柗美に、晃は首をふる。

「私服、見慣れないから。その、何だか新鮮だな、と」

「そう？ 変かな？」

「いや、いいんじゃないかな」

「ふふっ、ありがとう。晃くんもかっこいいよ」

「……どうも」

咄嗟に出た言葉が、あながち嘘じゃないからこそ、そんな型枠に嵌まったかのような会話が浮いて聞こえた。

誤魔化したけど、怒っていたのは事実だったんだろうなと晃は思う。そんな事を思ってしまう自分と、だからこそ柗美に気を遣わせてしまっていることに。

「それで、本の話はどこでするんだ？」

近くに落ち着ける場所があったかどうか。

晃は、それまで考えていたことを脇においやり、そう柗美に問いかける。

「どこって、もちろんわたしの家に決まってるよ！」  
すると、即座にリアクションに困る答えが返ってきて。

それでも晃が何か言葉を返すよりも先に、柗美は言葉を続けた。

「わたしね、昨日帰った後に偶然見つけたの『旅』の本！ ほんとはすぐに本の世界へ行きたかったんだけど、約束だもんね。晃くんと一緒に行こうと思って！」

何だかその様子は、すごく嬉しそうと言うか、冒険好きの子供のような雰囲気があった。

だけど、その興奮冷めやらぬ気持ちは、晃にもよく分かった。

それと同時に、茶城山でその本を発見したときに、自分で約束しておきながら一人で言ってしまったことを、改めて晃は申し訳ないと思った。

昨日、柗美が怒っていた理由が身にしみる。

「…………どこで見つけたんだ？」

しかし、晃はその気持ちこそで蒸し返しはしなかった。

何故ならそれは昨日、柗美が許すことで解決したことだったからだ。

「うん、それがね、わたしの家の土蔵にあったの。うちね、冷蔵庫二つあるんだけど、古いほうは土蔵にあって、前に買っておいたアイスが食べたくなくて土蔵に行ったら、あったんだよ。冷蔵庫の上に！ 触ったら『旅』の世界に行っちゃうから、アイスは食べられなかったんだけどね…………」

柗美は、その時あったことを細かに話してみせる。

言葉の最後でしょんぼりしてるように見えたのは、きつと気のせい

じゃないだろう。

「……そうか。それでは早速向かうとするか。アイスはそのコンビニでよければ奢ろう」

「え？ ホント！？ いいの？」  
本当に嬉しそうなアクション。

「……存外、計算づくだったりしてな」  
深い意味はないが、流れでぼそつと、そんな事を呟く晃。

「ゾンガイケイさん？」  
「何でもないよ」

返ってくるのは、思ったのと違う反応。

そう来るか、といった新鮮さ半面、余計な一言だったなと反省して。何だかそんな自分が恥ずかしくなり、背を向けてコンビニへと一歩踏み出す晃。

「あ、待って！わたし、ぱるむうのチョコがいい」

「……6個入りのボックスしかないだろうが、それ」

「へへ、バレた？」

思わず突っ込むと、誤魔化し笑いの榎美。

やっぱり計算だったんじゃないのか、なんて言葉が頭の中に浮かんだけれど。

それは結局言葉にならなかった。

そして……。

駅から歩いて15分程度。

辿り着いたのは、歴史の長い旧東雲小学校が近くにある、静かな住

宅街の一画だった。

その辺りに経つ家屋は古く、とにかく大きい。  
今も、長い長い石垣がずっと続いていて。

「到着！」

柗美はその長い長い石垣の途切れ目で、そんな声を上げた。

晃は、呆気に取られたまま柗美の後に続く。

入ってすぐ見えたのは、広大な芝生。

その間を縫うようにしてある、飛び石の道。

飛び石の先には、どっしりとした構えの歴史深く格式高そうな玄関  
口が見え。

芝生の向こうには、巨大な盆栽がいくつも並んでいるかのような、  
松の木を中心とした庭園が広がっている。

「広い庭だな。手入れとかどうしてるんだ？」

気付けば開口一番、晃はそんな事を口にしていた。

英理の話を聞いていると、ひとりぼっちの淋しい生活を送っている  
んだろうかと、変な先入観があったのだが、どうやら違うらしい。

流石にこの庭の手入れを、楽しみに飛び石を渡っている少女がやっ  
ているようには見えなかったからだ。

「うん？ おじーちゃんだよ。あ、ちなみに目の前にあるのはおじ

いちゃん家なんだ。わたしたちの家はあっち」

くるっと振り返り、横道に逸れるように芝生に入った柗美。

指さす先には、なるほど、目の前にある古い大きな屋敷に寄生して  
いるかのようにくっついていて現代風の一軒家があった。

そんなわけで、唐突に思い浮かんだ疑問はあっさり解決したのだが。

（私、たち？）

言葉には出なかったが、他に家人がいたことに、ちよっと驚く晃。



一体誰だろう？　なんて考えて。

「おかえり〜。 榎美。 それといらっしやい、 十夜河クン」

聞こえてきたのは、 さっき聞いたばかりの、 からかうような声。

「あ、 英理お姉ちゃん。 さっきはどこかに行ったかと思ったら、 もう帰ってきてたんだね。 晃くん、 屋上で会ったと思うけど、 英理お姉ちゃんだよ。 わたしの従姉で、 今は一緒に暮らしてるの」

(……………そういうこと、か)

助かったのは榎美とその親戚の娘だけ。

道理であそこまで、 まるで体験したかあのように話せるわけだと。 今日、 榎美との約束を知っていたわけだと。

また、 とはこういう意味だったのかと、 深く納得させられる晃。

「ほら、 ぼつとしてないであがってあがって」

「……………どうも」

何だかしてやったりな笑顔の英理。

対する晃は、 苦味ばしったかのような顔をしていて。

「あれ？　英理お姉ちゃんいつの間にか晃くんと仲良しさん？」

そんな二人のやり取りに、 何かを感じ取ったのだろう。

交互に見やっつて、 不思議そうにしている榎美がいて。

「ええ、 まあね。 あー、 でも大丈夫安心して。 可愛い妹の邪魔になるようなことはしないから」

榎美ではなく晃に向かってそんな事を言うと、 お茶でも淹れましょうか、 なんてひとりごちてさっさと家の中に入っていつてしまう英理。

「なんの邪魔をするつもりだったのかな」



## 第15話

『旅』に行く前に、まずずっと引き伸ばしにしていた本と『旅』の世界の話をする事になって。

晃が通されたのは、二階にある榎美の部屋だった。

女の子らしい淡い暖色系でまとめた部屋。

あまり頻繁に使っているようには見えない綺麗に整頓された鏡台。部屋中……それこそベッドの上にまで鎮座している色とりどりのぬいぐるみたち。

しかもそれは、晃のよく知っているRPGゲームのキャラばかりだった。

それ以外のぬいぐるみは一切なく、そこにこだわりを感じさせる。入ったとたん、変に緊張している自分を晃は自覚した。それは、きつと昔ならなかったはずの感覚で。

「はい。晃くん席はここね」

部屋の真ん中にある小さな丸テーブル。

言われるままにそこにあつた座布団に腰掛ける。

その相對側に、榎美が座つて。

距離の近さか、その場の雰囲気か。

さらに緊張の高まる晃だったけれど。

しかしそれは、目に入った大きな本棚の上にある、写真立てを見て霧散した。

家族の写真だった。

榎美と、おそらく榎美の両親との。

きつとそれは、当たり前前の幸せがそこにあった頃のもので。

「あ、もう気づいちゃった？ うん、そうだよ。ここにある本はね、全部『旅』へ行ったことの証なんだ」

「え？」

一瞬何を言われてるのか分からなくて、ぼかんとする晃。  
だがすぐに柗美がその大きな本棚の中にある本のことを言っていることに気づいて。

「これが全部か？ 一体何冊あるんだ？」

かなり大きめの本棚だ。

詰め込めば三桁は軽く超えるだろう。

一体どれほどの間一人で、『旅』を続けてきたのか。

そのことを思うと、どうにもいたたまれなかつたけれど。

「ええと、今97冊かな。見た目はいっぱいに見えるけど、奥の方はスカスカだから、まだまだたくさん入るよ」

そう答える柗美は何だか嬉しそうだった。

事実、『旅』の世界が楽しいからというのはあるだろうし、それに関しても晃も分からなくはないけれど。

もしそれが本当に柗美が現実を認めようとしないうことで創り上げた世界であるのなら、それは悲しいことなのかもしれない。

どうにかしたいと、晃は思う。

現実をつまらないと思ってしまうている自分に、それが上手くできるだろうか、とも思っていたけれど。

「あ、そうだ。晃くんの本、持って来てくれた？」

と、そこで思い出したようにそう聞いてくる柗美。

「ああ、持ってきたぞ」

晃は頷き、カバンからそれほど厚くない本を取り出す。

その本はもう、本棚にある本と同じように、もう光ることもなく、浮くこともなく。

一見ただの本のように見えるけれど。

「持ってきたはいいんだが……これって、他の者には見えないものなのか？」

晃は英理とのやり取りではなく、部活のメンバーが光るこの本に目を止めなかったことを話した。  
すると、柗美は頷いて。

「うん。見える人ってほとんどいないよ。でも……わたしも、晃くんも見えるんだよね」

そう言って、また嬉しそうに微笑む。

それは、本当に嬉しさの滲み出た、眩しい笑顔だった。

晃が、直視できないくらいには。

「一体、どういう仕組みで見えたり見えなかったりするんだろうか？」

この本がどうして見えないのか、見える晃には分からないし、晃には答えを出せそうになかったが。

しかし、それを聞いた柗美は、何だか得意気に頷き、それに答える。

「きつとね、選ばれたんだよ。『そなたらには旅へ行く資格がある』、みたいな感じで」

「何だ、そんな声でも聞こえたのか、柗美さんは？」

「うう〜、そこはそういうものかってとりあえず納得するところだよー」

別に他意はなく、素直にそう思って聞いた晃だったが。

そう言う柗美は何だか拗ねているようにも見えた。

ようは、はっきりとは分からない、ということなのだろうけど。

「ふむ、つまり……日々日常に空虚を感じ、外の世界をずっと求めていた。だから選ばれたと。……そう言いたいのか？」

晃と柗美、共通点があるとすればそれだろう。

退屈程度に思っている自分と比べるには、ちょっとおこがましいかもしれないな、なんて晃は思っていたけれど。

「そうなの？ わたしよく分かんないかも。普通に現実の世界も楽しいよ？」

しかし柗美は、なんでもないことのようにその言葉を返した。

それは、楽しいと言えるほどに強いのか、辛いことを忘れ去って封じ込めるほどに弱いからなのか、判断はつかなかったけれど。

「……そうだな、分かりやすく言えば、柗美さんってゲームとか漫画とか、好きだろう？ 今回りにいるぬいぐるいみたちが出てくるようなRPGとか」

「あ、うん！ 好きだよ、よく分かったね晃くん」

この状況で分らないでか、と言うか。

テレビの下にあるガラスラックに、一通り揃っているハードとか、明らかに100冊以上あるだろうと思っていた本の中に、自分がよく読むようなものから知らないものまでマンガ本が混じっていたからなのだが。

それを言うつと、ジロジロと部屋のを物色していたように見えて嫌だったから、黙って晃は頷くだけにしておく。

「俺も好きだからな。多分、そう言う好きって感情が強ければ本に選ばれ、見えるんじゃないかな、と考えたんだが」

実際はもっと複雑な条件とかがあるのだろうけど。

「そっかあ、そう言われるとわたし分かるかも。だって……」

それだけで変に納得したらしく、うむうむ頷いていた柗美が、もっ

たいぶるかのようにそこで言葉を止めた。

視線が晃から晃の背後に向く。

何事かと思つて晃も振り向くと、まさにそのタイミングでドアがノックされて。

「大変失礼しまーす」

そして、大変を強調して入ってきたのは英理だった。

今まで潜んでいたんじゃないかってくらい唐突に現れたが、そう言えばお茶を淹れてくるとは言っていたなど、今更ながらに思い出す晃。

「あ、英理お姉ちゃんありがとう。テーブルの上に置いてもらつていい？」

そして、そう言う榎美に再び視線を戻すと、何だかいたずらっぽい笑顔を見せていて。

「はいはい、邪魔もんはさっさと退散しますよ」

それは……何気ないやり取りにも見えただけ。

まるで本当に見えていないかのように。

閉じて置いてあつた本の上にお盆を置くのを見て、晃はあつと声をあげてしまった。

「何？ 紅茶嫌いだった？」

「あ、いえ。……そうじゃなく」

答えに窮し、榎美のほうを見やると、榎美は満足気な顔をしていて。

「やっぱり、英理お姉ちゃんは見えてないんだね……だってお姉ちゃんゲームとかマンガとか、あんまり好きじゃないもんね。見た目はお蝶婦人みたいなのに」

本の上に乗っていてぐらついているお盆。

英理にはおそらく浮いて見えているだろう。

そのことに気付いて、ようやく言っていることに気がついたらしい。英理ははつとなり、それから怒った顔を試してみせた。

「もう、また？ あたしが見えないのをいいことにこんな悪戯して……聞いてよ、十夜河クン。」

榎美つたらね、ひどいことばかりしてくるのよ。確かこの前は、たくさん並べてといてドミノ倒しのスタート役をやらされたっけ」  
その様は、二つ上の英理には失礼なのかもしれないけど母親のようで。

こういう関係であったからこそ、こうして二人がうまくやっていくんだろつな、と言う気もして。

「とりあえず俺の言いたいことはひとつだ。……本を粗末に扱うな」  
今までの本が榎美にしか見えなかったのなら、気持ちには分からなくもないけれど。

そこはお約束、とばかりに晃も英理を真似て怒ってみせる。

「もつっ、英理お姉ちゃん余計なこと言わないでよ。晃くんは怒られちゃったじゃない」

「いいのよこの際。せつかくだからもつとしかってやってくださいなお父さん。この子ったらゲームばかりして」

「お母さんこそ、ゲームとかやらないからこの本が見えないんだよ？」

「ま、口答えする気？ って、誰がそんな事を言ったのよ？」

「おと……じゃない、晃くんがそうだった」

ちょっとだけ、この妙にはまり役の『演技ごっこ』が延々と続くのかと思いきや、あっさり我に返って、二人して晃を見てくる。

別に冗談とかで言ったつもりもないけれど、あくまで大げさな例えであって、晃の勝手な言い分だったのだが。



「まあつまり……なんだな。子供には見えるってところか」  
とりあえず何か言ったほうがいいのかかと、晃の口から出たのはそんな言葉で。

「ふ、ふんっ！ どうせあたしは耳年増の年増のお蝶婦人ですよー  
だっ」

何か色々と間違ってる気がしなくもないが。

プリプリ怒って見せて、部屋を後にする英理。

なるほど、これから話すことのために気を使って退席してくれたのかと、晃はそう思ったわけだけど。

「……晃くん、英理お姉ちゃんに年のことはタブーだから、あんまり言わないほうがいいよ。わたしもお母さんとか言っちゃったけど」  
「そ、そうか。気をつける」  
どうやらマジだったらしい。

自分の家だからなのか、少しくだけた様子の榎美の言葉に頷きながら、晃は苦笑を浮かべて。

そんなこんなでようやく本題となったわけだが。

榎美曰く、この光る本は、六加市一帯のみにある（中学で行った修学旅行……京都にはなかった、と言うことなのであまり確証はないけれど）らしい。

その理由もさることながら、それがいくつあるのか、いつからあるのか、何のためにあるのかは分からないそうぞ。

その本が榎美の心の世界の投影であるのなら、分からないのも仕方のない気はするけれど。

「一つだけ、訊いてもいいか？」

「うん？ なにかな」

「どうして柗美さんはこの本を……いや、『旅』をしようと思ったんだ？ まあ、言いたくなければそれはそれで良いんだが」  
それはきつと、これからこの『旅』に付き合っていく上で、いつか必ず、柗美の口から聞かなければならないことのはずで、いつでもそれでも、その理由を予め教えてもらっていてよかったと晃は思う。

でなければきつと、知らないことで柗美を傷つけてしまっただろうから。

「うん。楽しいからって言うのはもちろんあるけど……わたしが『旅』をするようになったのはね、お父さんとお母さんの影響なんだ。わたしのお父さんとお母さんは『旅』の先輩で、今も『旅』から帰ってきてないんだけど……旅先で会えたらなあってのはあるかな。今までどんな『旅』をしてきたよーとか。あ、そうそう。旅の仲間になってくれた晃くんのことも紹介したいな」  
そして、嬉しそうに語る柗美のその言葉は。

自らが創り出した虚偽だとは到底思えないほどに、真に迫っていて。  
「あ、あとね、晃くんはもしかしたら気付いちやっってたかもしれないけど、わたし、怒るのとか泣くのとかがうまくできないんだよね。どうしても感覚が理解できなくてへんな顔になっちゃうの。それじゃあ演劇部じゃやってけないから、この本の世界でその役になりきって……たくさん練習してうまくできるようにになりたいから、かな？」  
それは、現実がどうであれ、柗美にとっては紛れもない真実、なのだろう。

「晃くんは？ どうして『旅』に出るの？」  
返ってくるのは、ちよつと芝居がかったそんな言葉。

それを受け、晃は改めて『旅』に付き合うことの、その意味を考え

てみる。

あの本の世界が、自分とのズレを感じさせないものだったから？  
榎美が言うように、単純に楽しそうだから？

それとも、榎美に誘われたから？

榎美のことを知ってしまったから？

使命達成の足がかりになると、そう思ったから？

それは全て正しくて。

でも、今ここで言葉にするものとしては足りない気がして。

「そこに『旅』があるから……？」

ふいに出たのは、そんな言葉だった。

「疑問系じゃなければいい答えだったんだけどね。言いたいことはわかるけど」

「……」

そしてまた、会心の笑み。

続く『分かる』と言う言葉が何だか嬉しくて。

きっと、この時だったのだろう。

本当の意味でこの『旅』終わるまで、榎美に付き合うことを、決意したのは……。

そして……。

本格的に本の世界についてに話になって。

すぐに気がついたのは、本の中の世界……そこで起きる出来事と、

本に書かれている文章に関しての認識の違い、だった。

「台本？ この本がか？」

「うん。例えばこの本、『歌に願いを』って言うんだけど」

柗美が本棚から抜き出して見せてくれた本は、晃が持ってきた本と比べても随分と薄いものだった。

「わたし、この世界ではヒロインの役だったんだけど……見て、ヒロインが何を思ってどう行動したのかが、書かれてるでしょ？」

言われるままに、開かれた本にちよつと目を通して。

なるほど、言われてみればそう思えなくもないな、と晃は思ったけれど。

「台本か、俺は少し違う風にとつたな。最初に見たときは、日記だと認識していたよ。何故なら、自分が行動したことが自分の視点で記されていたし。台本にしては、他の人の心情などが書かれていないし……そもそも、自分に相対する人物が出てくる場面しか書かれていなかったしな」

晃は、自身が経験した『旅』を思い出しながら、そう言葉を返す。

「違うよ。だから台本だって。行動したことが書かれたんじゃないよ。行動したことは台本通りなんだよ。……うん、そう。例えばこの本は、ヒロインの一人だけの台本なの。ほら見て、本の終わり部分。全体のお話としては、たぶんこのあたりはまだ物語の導入部分だと思うんだけど、このお話は、ここでヒロインの出番が終わっちゃうから、ここで本が終わってるでしょ？」

まさか反論されるとは思っていなかったといった雰囲気、何だか躍起になって台本であることを主張する柗美。

「……ふむ。登場人物一人だけの台本か」  
それがあるかどうかは別としても、そう言われれば確かにそう見えなくもなかった。

怔美がそれを台本だと言うのなら、きつとそうなのだろう。  
ただニュアンスが違う。それだけのことなのだ。

しかし、それよりも。

晃には気になることがあった。

絶望の樹の下、歌のない現実の風に巻かれ、リコリスは霞のよう  
に消えていった……。

怔美の持つその本の、最後の一文。

怔美はそこで出番が終わりだと、そんな言い方をしたけれど。

「本、というか……『旅』の終わる条件って、なんなんだ？」

少しいやな予感がして、恐る恐る晃は問いかける。

しかし、怔美は晃ほど気にした様子はなく。

「ん？ 『旅』の終わる条件？ つまり、こっちに帰ってくる方法  
ってこと？」

「……そうとも言えるかな」

何でもないことのように言うから、晃は少し面食らって……それで  
も頷き、先を促す。

「普通にお話が終わればって言うのはもちろんだけど……やっぱり、  
さっき言ったみたいに出番がなくなれば終わりだよ。台本だからね」  
「いや、そうではなく。聞き方が悪かった。その出番がなくなるっ

ていうのはどういう時なんだ？」  
もどかしい気分を抑えられずに、もう一度晃はそう問いかける。  
対する柗美は小首を傾げて。

「うん。まあ、ほとんどは死んじゃったときだよ。悲劇にはつきものみたいなものだし。」

あ、この本の場合は、元々ヒロインは幻で、消えちゃったんだけどね」

当たり前のことであるかのように、あっさりとそう答える柗美。

晃には、その言葉が信じられなかった。

あの、現実と変わらない感覚のあった世界。

そこでの死を、まさしく舞台の上であるかのように、捉えている柗美のことが。

「じゃあ、ここに並んでる終わった本も？」

「うえっ？ え、えーと。たぶんそーかな。実はね、その瞬間ってあんまり覚えてないんだよ。ぶつってテレビが消える感じ？」

また、予想だにしていなかった、と言う表情。

その、柗美の言葉からは、死に関しての怖さのようなものは感じられない。

あくまでも実際のものとは違う、言うなればゲームみたいなもの、と言いたいのもしれないけれど。

「辛くないか、それ？」

「うん。辛いつていうか……今は悔しい気持ちのほうが大きいかな。何でこの物語をつくったかみさまは悲しい結末でしか話を終わらすことしかできなかったんだろう、って」

それは、恐怖するしない以前の、超然的な答えだった。

まるで、その神様と同じ位置にいるかのような、そんな感覚。

だが、それでようやく晃は理解した。

それが、とても現実として受け入れられるものではないからこそその台本なのだ。

台本と割り切らなければ、やっていけないくらいに、怒りや悲しみに慣れてしまったのだ。

「やめたいと思ったこと、ないのか？」

どうしてそこまでして、『旅』に出る必要があるのか。

この『旅』は、現実からの逃げ場所であって、現実の辛さを忘れるための場所であるはずなのに。

どうしてそこに辛さを重ねようとするのか。

「ないよ。だって、楽しい冒険には危険がつきものでしょ？ それでほんとに死んじゃうわけじゃないしね」

「……………そうか」

それは、明らかかな嘘だと分かるのに、ひどく現実めいた言葉で。

それを言われてしまったら、晃は頷くしかなかった。

やり直しのきかない現実と違う世界だからこそ、辛いなんて考える必要はないし、楽しいと思える。

……………きつと、その通りなのだろう。

榎美がそれを自分自身に言い聞かせるように言っていないければ。

晃もそういうものかと、素直に頷けたのかもしれないけれど。

「ん？ ちょっと待て。それじゃあ俺は、この本の世界で死んだのか……………」

それは、今の今まで失念していたこと。

あの時は、ページがなくなったから現実世界へと帰ってきたものと思っていたが、今の榎美の話をもとめると、つまりはそういうことになるわけで。

晃は、テーブルの上にあったその本を開き、最後のページ、最後の一文をもう一度確認してみる。

見た感じ、そういう風にはとれそうもなかったが。

「待って。あ、ほらここ！ ラキラの懐中時計、上になってるよ？」  
同じように反対側から身を乗り出していた柗美が、タイトルのあるページを覗き込みながらそう言う。

「いつの間に……？」

「こつちに帰ってきて、光ったりしなかった？ この本。きっとその時だよ。過去に数冊あったけど、近くに下巻があれば反応するはずだから」

「言われてみれば、確かに光ってはいたな……」

光った時に、どこが変わったところがあるかどうか、確認したはずなのだが、どうやら見落としていたらしい。

と、なる。

「いきなりレアものだね、晃くん。きっとすぐ近くに、続きの本が……」  
「……って、もしかして！ 家の土蔵にあるやつかな！」

柗美の言う通り土蔵にあるという本が、その続きなのかもしれない。

「その、土蔵にある本、タイトルは見たのか？」

「ううん。まだ見てないよ。見たらその世界に飛んでっちゃうし！」  
言いながらも、興奮した様子の柗美。

「……そ、それじゃあ、早速」

当然それは晃も同じで。

「待って！ わたしにも復習させて、お願い！」

「……あ、ああ」

つまり、続く下巻の準備として、上巻を読んでおきたい、というこ



となのдарう。

晃は、自分の日記を目の前で読まれているかのような複雑な気分  
に陥りつつも、そう頷く。

そして……すぐに内容に集中し始めたのか、部屋には無音が広が  
つて。

手持ち無沙汰な晃は、しばらく本に視線落とした、つくりもののよ  
うに長い柁美の睫を眺めていたけれど。

すぐにはつと我に返って、淹れてもらった紅茶をすすりながら、自  
分なりに本と『旅』の世界のことをまとめてみることにする。

こうして柁美に話を聞いて……色々分かったような、未だ何もかも  
分かっていないような奇妙な気分になったが。

その中にしてひとつ、晃は気にかかることがあった。

それは、時間の経過についてだ。

晃が、上巻の世界を旅した時間はそう長くなく……2、3日ほどだ  
つたはずだけど。

帰ってきてから、現実の世界ではほとんど時間が過ぎていないよう  
に思えた。

経っていたとしても数分だろう。

一見、『旅』の世界で過ごした時間は、現実の世界の経過は反映さ  
れない、ということの問題がなさそうなのだが。

もし仮に、柁美の両親がその旅から本当にまだ帰ってきていないの  
なら、逆に時間の経過が現実反映されている、ということになっ  
てしまうのだ。

とすると、晃たちは下手すれば何日も帰ってこれなくなる可能性だ  
つたあるわけで。

「よっし、読んだよ！ それじゃあいざ出発だーっ」  
そこまで考えて、聞こえてくる柗美の声。

晃が顔をあげると、すでに立ち上がっていた柗美に、手を引っ張られる。

相当やる気らしい。

そのまま立ち上がった晃は、手を繋がれたままで柗美の部屋を出る。妙な誤解をされたら困るなど思っただけだったが、その道中に英理の姿は見当たらず。

やがて辿りついたのは、大きな屋敷の裏手……随分と年季の入った、土蔵と呼ぶに相応しい大きな建物のある場所だった。

「待つてて、今開けるから」

そこでようやく柗美は手を離し、実はとつこの間に準備万端だったらしく、腰につけていたポシェットから古い真鍮の鍵を取り出した。

「ほんとに続きだといいな」

そして、わくわくを抑えられない様子でそう呟きつつ、手馴れた手つきで土蔵の鍵を開けた。

門のようになっているそれをスライドさせ、観音開きになっている木製の扉を外側に勢いよく開け放つ。

鼻をくすぐるのは、古い紙の匂い。

だが思ったよりも埃くさくなく、陰湿な雰囲気もなかった。屋根の高い部屋。そこはまるで書架のようになくさんの本が並べられ、あるいは積み上げられていた。

入り口付近には、古紙の束や、玉ねぎジャガイモと言ったような畑の野菜の入ったダンボール、そして柗美の言っていた業務用に近い大きさの冷蔵庫があつて。

その上に、薄闇の中煌々と光放つ本が浮かんでいるのが分かった。

「随分と本ばかりあるんだな」

それは、何気ない晃の呟き。

「うん、すごいよね。これ全部『旅』の本なんだよ。わたしなんかまだまだだね」

しかし、返ってきたのは思わず声失う、そんな言葉だった。

そこには数えるのも億劫なほどに、大量の本がある。

それが全て『旅』の本だとは、到底信じられるはずもなく。

「……………って、目の前に宮沢賢治童話短編集ってタイトルが見えるんだが」

他にも、見知ったタイトルと作者名がちらほら目に入る。

流石にそんなことはなかったかと、晃は半ば呆れてそう呟いたが。

「あ、うん。実際にある……………っていうか、有名な本の世界に行くことも結構あるんだよ？」

そんな事はあるらしい。

おそらく、榎美なりのジョーク、なんだろうけど。

「そ、そうか。それはまた凄いな……………」

なんとも夢のある話と言うか、何でもありな『旅』の世界らしい。

それならば是非行ってみたい本の世界がいくつもあるぞ、なんて考えかけた晃だったけれど。

それを考え始めるとキリがなくなりそうだったので、晃は話を戻す意味も込めて、先程思っていたことを口にした。

「ま、それはいいとしてだ。出発前に聞いておきたいことがあるんだが」

「うん、何かな？」

「現実の世界と本の世界の、時間経過の相互性についてだ。本の世

界にいる間はこちらでは時間は経過しないってわけじゃないんだろ  
う?」

振り返る柗美に、晃はそう問いかけながら……今更ながらに気付か  
されるのは、英理の言う事故で両親を失ったという現実ではなく、  
柗美の言う『旅』に出たまま帰ってきていない、といった柗美にと  
つての現実を受け入れている自分に対してだった。

そもそも、『旅』の世界から何日も帰って来れないとなるとちよつ  
と厄介だな、なんて考えはその柗美の言葉を前提にしているわけ。  
もしかしたら、それは辻褄の合わないことなのかもしれない。  
言い終わってから、訊いてよかったのかと、後悔し始める晃だった  
けど。

「うん、もちろん。わたしも気になって計ってみたことあるんだけ  
ど、向こうの一日がこっちでの1分くらいだったよ」

「……成る程」

本当にそうなのか、そう都合よく思い込んでいるだけなのか、晃に  
は判断がつかなかったけれど。

それなら確かに晃が旅した際の時間の経過としては辻褄が合ってい  
るような気がした。

仮に両親が事故のときから……年単位で帰ってきていないとすると。  
三桁を超える年数を、『旅』の世界で過ごしていることになる……  
なんて事を真剣に考えなければ、だが。

「大丈夫だいじょぶ。きつと夕方くらいには帰ってこれるよ」

晃がそんな事を考えていることなどおかまいなしに、柗美はそう楽  
観的に笑う。

「あまり深く考える必要もない、か」

時間の経過なんて気にしているようでは、冒険だ旅だなんて言ってもらえないだろうし、帰ってこれないかもしれないことを心配していると思われるのも、何だかちよっと情けなかった。

だから晃は、益体もないことを切り捨て、そう自分に言い聞かせて  
榎美とともに光る本前へと立って。

「いい、開くよ？ ううう、二人で旅するのって初めてだからなんかドキドキする〜」

言いながら、やっぱり嬉しそうな榎美。

「……そうだな」

すぐに、それに晃も頷き返した。

それは、本当にこういうことが好きなんだなと思い、晃も何だか嬉しくなったせいもあるだろう。

向こう世界に行っても、同じ気分のままでいられればいいなと願いつつ。

榎美の手によって開かれたページ目を、特に打ち合わせすることもなく、同時に覗き込んだ。

そこには、『ラキラの懐中時計』の文字。

一度見た、見覚えのあるタイトル。

そして……。

晃がそれを心中で反芻したその瞬間。

晃の意識は、吸い込まれるようにしてその本の中へと吸い込まれていったのだった……。



## 第16話

ガッーン……ガッツ……。

遠くから反響して響いてくる、何かを叩き削るような音。

それは……一方向ではなく、四方八方様々な方向から響いてきて間断がなかった。

近くで道路工事でもしているのだろうか？

晃はそう思い、煩そうに目を開ける。

「よ、目え覚めたかい？」

すると、どこか聞き覚えのある軽そうでそうでない声色とともに、晃の視界に入ってきたのは。

一言で言うなら赤ら顔の半魚人、だった。

「……っ、ぐっ？」

思わずジャックの時と同じようなリアクションをしてしまう晃だったが。

その追い討ちをかけるかのように、後頭部に痛みが走り、呻いて頭を押さえる晃。

「おいおい、こんないい男に向かってそのリアクションはないでしょ。あんまり動くと傷にさわるぞこのお調子者め」

お調子者はお前だろうと、条件反射で突っ込もうとして、晃は理解する。

手に水かきがついていたり、背びれが頭の後ろについていたりするけれど。

その声、その雰囲気、その相貌が……豊によく似ているのだと。ちょうど、ジャックがタローに似ているのと同じように。

「すまない。少し記憶が混乱しているようで……君は誰だ？」  
それに……よくよく辺りを見回してみると、そこは全く知らない場所だった。

地面も、天井もそれらを支えている壁も全て、雪のように白い岩肌  
に覆われている。

その壁は、自然そのままであるかのように凹凸が激しく。  
薄ぼんやりとしたカンテラの灯りが、陰鬱な影を映し出していた。

てつきり前の話の続きから始まるものだと思い込んでいた晃は、その見知らぬ光景に戸惑うしかなかった。

そして何より晃の不安を掻き立てたのは、一緒にやってきたはずの  
榎美の姿がないことで。

「誰も何も、名乗るのは初めてだよ。オレは、ユタ・ディーネだ。  
お調子ものあんたが自分をモノ扱いされたことにキレて、『地』  
のヤツラに逆らったせいであんたの介抱を命じられた……幸だか不  
幸だか判断に困ってる男さ」

ユタと名乗った半魚人の男は、晃の記憶が混乱していると言った言  
葉を鵜呑みにしたのか、わざわざ説明口調で自己紹介してくる。

「そう言うお調子者のあんたはなんて言うんだ？」

「晃だ……っ」

そしてさりげなく名を聞かれて。

条件反射で晃はそう答え、はっとなる。

今は晃ではなくラキラなのだ。

一瞬、失敗したと思った晃だったけれど。



逆に考えてみれば、ラキラは自分の力を使って別人に変わっているのだからそれでよかったのかもしれない。

「アキラ？ ふーん。どっかで聞いた名前だな？ んじゃ階級名は？」

ユタは、そんな晃の内心の葛藤などお構いなしにさらにそんな事を聞いてくる。

「階級名……十夜河？」

それは晃には聞き覚えのないフレーズだった。

それでも、名と言っくくらいだから名字のことだろうかと単純に思い、晃はそう答える。

答えてから、下手なことを何度も言うものじゃないと後悔していたけれど。

「トヤガワ？ 聞かない名だな。とすると第五階級以下の有象無象か。オレが知らなくて当然か。ま、これも何かの縁だ、同じ水の魔精霊同士よろしくやっていこうぜ」

意外となんとかなるもので。

ユタはひとりで納得し、気さくな笑顔で晃の方を叩いてくる。

どうやら初対面に近かったらしいが、晃はユタに気に入られたらしい。

その陽気な笑顔が豊のイメージとダブリ、そう言えば豊とも初対面からお互いに何となくウマがあっていたことを思い出す晃。

「でだ。目え覚めたら仕事に戻せて言われたんだがな、どうする？ まだ寝てることにして休んどくか？」

そんな風に晃が昔のことに浸っていると。

ユタは立ち上がってそんな事を聞いてきた。

言われて初めて気づく、自分が寝ていたらしい場所に敷いてある、ござというには目の粗すぎる薄い藁。

それは、すぐ側にいくつもあって。  
そこは確かに寝床ではあるのだろうが、まるで捕虜か奴隷かはたま  
た罪人か、そんな扱いを受けていることが如実に分かる、そんな部  
屋にも見えて。

晃がない間にラキラが何かやらかしたのだろうか？

そう考えて晃は思い出す。

いない間も何も、上巻の時にはすでにラキラは脱獄犯だったのだ。  
もしかしたらあの後、ジャックの言うことを聞かずに馬車の人達を  
助けた流れで捕まってしまったのだろうか、なんて考えていたけれ  
ど。

しかしその割には格子に入れられているわけでもない。

状況を把握しようと思いを凝らすと、晃の寝ていた場所の頭上……  
でっばった白い岩壁の下の所に、初めてこの世界に来たときにもラ  
キラが持っていた布袋が見えた。

そこにはきつとあの光る本が入っているはずで。

また、ラキラが何か書いていてくれるかもしれない。

「すまない。まだ頭痛がひどいようだ。もう少し休ませてもらうこ  
とにしよう」

だから晃は、そう言ってユタに笑いかける。

「……ワルだねえ。ま、たいがいにしておけよ。水の眷族は従順で  
大人しいってのが世界の常識らしいからな」

「ああ、ありがとう。忠告痛み入るよ」

すると、案の定ユタはそんな言葉を返し、手を上げて部屋を出てい  
く。

気のきくユタに、晃は感謝の言葉を述べて……そのまま布袋を引っ  
張り出す。

出てきたのは案の定本と、銀色の懐中時計だった。

「これは……？」

晃はそれが本よりも先に気になって、本よりも先にその懐中時計を手取る。

本や、いくばくかの食料が入っていたのは覚えているけれど。

少なくとも晃の記憶で思い返して見る限りでは、そんなものはなかったはずだった。

とはいえ、袋をひっくり返して全部確認したわけでもないから、晃が気がつかなかっただけかもしれないが……。

そこまで考えて晃は、ピンと来た。

この本のタイトル……ラキラの懐中時計。

ラキラの持つている懐中時計ときたら、間違いなくこれだろうと。

そしてこの懐中時計は、この話の、この世界において重要なアイテムなのかもしれない。

晃は、それを示すような何かがないかと、竜頭のつまみを押し込み、銀色の蓋を開ける。

出てきたのは、高そうだがこれといって特徴のないアナログな針時計だった。

しかし、よくよく調べて見ると、その懐中時計の盤面は回転するらしいことがわかった。

ちょうど3時と9時の部分だけが固定されており、6時側を指で押し込むと、そこを軸にしてくるりと裏面が現れる。

「……っ？ こ、これは……まさか、柗美さん？」

晃は、そこにあったものを見て一瞬目を疑った。

裏面には、巧妙に隠されて収納されていた、一枚の写真……のようなものがあったのだ。

どこかの庭園だろうか。

虹の煌めく噴水の前、裾の大きく広がる水色のドレスを身に纏った、太陽の下だけ赤色に染まる長い髪の少女がそこにいる。

何より同じ赤を秘めたその瞳と、宝石の鏤められたティアラの上から伸びたウサギの耳のような前髪が……気づけば晁にそう呟かせていて。

「水の国の王とは、柗美さんのことだったのか……」

続く言葉には、もう半ば確信めいた響きがこもっていた。

ラキラが愛し、ラキラが守るために手にかかるふりをし、旅をするきっかけとなった水の王マーサが彼女であることを。

「……どちらにしる、肌身離さず持つておくべきか」

ラキラがラキラでなくなってしまう以上、その懐中時計はラキラを示す唯一のものなのだろう。

晁はそう呟き、懐中時計を首にかけ、懐にしまった。

「さて、取り敢えず一つの憂いは解消されたわけだが」  
一緒にやってきたはずの柗美。

その柗美がこの世界では誰なのかが分かったのは収穫だった。

簡単に会える立場でもなさそうだが、それでもどこにいるのか誰なのかも分からないよりは大分マシだろう。

晁は安堵した様子でそう呟き、今度はラキラ……自分の今の状況を知る番だと言わんばかりに本を開いた。

柗美の言い分を借りれば、演者一人ぶんの台本であるその本。

前回と同じく、初めの数ページが埋まっている。

そしてその部分には、上巻の続きから今の状況に至るまでが、書か

れていた。  
晃は早速それを読んでみることにする。

馬車の人々を救うためラキラは、自身の、何ものにも変わりゆけし力を使った。

ラキラがその姿、体現させたのは水の神ウルガヴ。

水竜の姿をしたそれは、あたり一面を万能の癒しの水へと変貌させてゆく。

すると、みるみるうちに、ひどい火傷を負ったものたちの傷が回復していった。

だが、その強大な力は、脱獄し身を隠していたラキラたちにとっては手に余るものだった。

強大であるが故に、水の眷族の中でも使いこなせる物は限られていて。

このままでは正体に気づかれてしまいかもしれない。

そう思ったラキラは、ジャックの助けもあって、馬車のものが目を覚まし、ラキラたちを見咎める前にその場から逃げ出した。

しかし……そんなラキラたちに気づき、後を追うものがいたのだ。

それは、馬車の護衛をしていたらしい、『木』の一族のスミレ・ドリンという少女だった。

スミレは、ラキラの力とその正体、そして目的に興味を持ち、近づいてきたらしい。

どこまでも追ってくるので、まくことを諦めたラキラたちは、自身の目的、地の王を説得するために旅をしていることを話した。

それは、あの強大な地の国に齒向かうにも等しい行為故に、話すこ

とで彼女の興味を失わせる算段だったのだが。  
スミレは、あるうことかそんなラキラたちのことを手伝うと言ってきた。

ラキラは、その事に初めは反対していたが。

結局、ラキラたちはスミレをこの旅の仲間に加えることにした。  
断れば自分たちの居所が水の国に知れてしまうかもしれない、といったスミレの脅しもあったけれど、寡勢であるラキラたちにとって、その言葉はとても頼もしくもあったからだ。

そうして、旅の連れが一人増え……幾日かが過ぎ。

やがてたどり着いたのは、水の国と地の国の境にある街、『シノイ』。

そこは、戦わずして地の属国となった水の国の一族のものを中心とした、様々な種族のものたちが地の国の労働力として集められる……そんな街だった。

地の国は、水の王の献身なる犠牲に飽き足らず、水の民にまでその魔の手を伸ばしていたのだ。

それは強制だった。

労働力を提供しなければ属国違反として水の国は地の国による、無慈悲な蹂躪が待っていて。

それは、国を守る騎士として黙って見過ごせるものではなかったけれど。

だからこそ、ラキラはそれを逆に利用する。

本来の自分の姿ではなく一介のものに身をやつしたのは……そのためでもあった。

他の労働者の中に混じり、地の王のいる地の国……その漆黒の根城へと向かうつもりだったのだ。

それには、思いもよらぬ危険と困難が待ち受けているはずで。ラキラは、ジャックとスミレに自分と旅を続けるかどうか再度問いかけたが。

その問いかけは、意味を成さぬものだった。

お互いに、思うところはあったのだろうが、二人ともが最後までラキラの行く末を見届けることを決めていたからだ。

そんなわけでスミレは王の宮仕えとして。

ラキラは新しい地の根城の礎となる労働者として、地の国へと降り立った。

その際、ラキラの荷物に紛れ込んでいたジャックは、スミレとの連絡役をお願いした。

王の居場所……それが分かり次第、スミレからジャックへ、そしてラキラへと伝わるように。

それから、ラキラの労働者としての日々が始まって数日が経ったが、ジャックからの連絡はなかった。

その事に、焦っていた部分もあったのだろう。

王の居場所、王と一対一でいることのできる側近の所在が分かるまで大人しくしているつもりだったのだが。

対等の種族として扱おうともしない地のものたちの態度に、ラキラは我慢ができなくなってしまった。

労働はつらく厳しく、休みも食事もなくに与えられない。

それは冷徹な魔術師の使い魔や、残虐な魔物使いの魔物にも劣らない所業。

しかし、それだけならば、水の国の平穏と引き換えだと思えばまだ我慢もできたのだが。

ラキラを怒らせたのは、自身を含めた労働者たちを、地のものが勝

手につけた名……いや名というのもおこがましい、番号で呼んだことになった。

名は魔精霊の命そのもの。

それを侮辱する行為に、ラキラは耐えることができなかった。

気がつけば黒の翼生やせし地の国の騎士のひとり、掴み掛かっていた。

それは、冷静さを欠いた愚かな行為だったのだろう。

ラキラがそれに気づいたのは、騒ぎを聞きつけてやってきた、他の騎士の『力』を受けたときだった。

硬い鉱石を生み出し、対象を襲う『地』の魔法。

反撃する暇もなく、ラキラはそれを頭に受け、意識を失って……。

要約すれば、こんなところだろうか。

文章の書かれているところまで読み終えると、晃はひとつため息を吐いて痛む頭をさすり、立ち上がる。

「無茶をする。……気持ちには分からなくもないが」

呟き考えるのは、改めての今の状況。

この世界にその言葉や概念があるかどうかは分かってないけれど。

この状況は、ほとんど奴隷扱いされていると言っているはずで。

正直よく無事だったものだ、晃は思う。

もしかしたら、言うほどに地の魔精霊たちも悪い存在ではないのかもしれない、なんて思うのは、晃自身が自分の目で彼らを見たことがないせいもあるだろうけれど。



「……ヒビ、ちょうど一人か。そりゃ都合がいいな友よ」  
そんな事を考えていると、羽ばたきとともに小さくなりぬいてあるだけの狭い空気孔の穴から聞こえてくる、ジャックの声。  
その空気孔には、鉄格子が狭い間隔で嵌まっていたが。  
見た目よりジャックの体はずいぶん細いらしく、羽をたたんで器用に鉄格子をすり抜けて中に入ってくる。

「ああ、ジャック。無事だったか」

「ヒビッ、当たり前だろ、このボクを誰だと思ってる。それより、説得のためのいいネタを掴んできたぞ」  
本当にタイミングがいいなと晃は思いつつそんな声をかけると、羽ばたいた状態で器用に胸を逸らしてみせ、そう言葉を返してきた。

「いいネタ？」

「ああ、スミレからの情報なんだけどな、地の王とやらにはどうやら妹君がいるらしいんだ。

だが、何でも闇の一族に呪いをかけられているらしくてな、床から出られないんだそうだ」

「……闇の一族」

その言葉は、ラキラの日記……台本にも書かれていたことを思い出して、晃はそれを口に出して反芻してみる。

「ヒビ、そう、闇の一族の呪いだ。どうやらこの後から作られた白い根城は、そんな妹君を守るために作られてるって噂だ。そして、水の王を嫁がせようとしたその理由も、その呪いに関係していると見ていいだろう」

「万能の水の力、か」

晃は続くジャックのその言葉に、すぐにピンときた。

ラキラでさえ、けが人を救うほどの力があつたのだ。きつと水の王の力は、その呪いすら解くことができる強い力なのだと容易に想像できる。

「しかし、それなら嫁がせる理由はないはずだろう？ 力を貸してほしいと頼めば事足りるはずだ」

まずはそう考えるのが普通じゃないのかと、何気に浮かんできた疑問だっただけだ。

「ヒヒヒ。それができたら苦労しねえだろうよ。何せ地の一族はプライドの塊のようなもんらしいからな。婚姻の話は単純にキミがそうであるように、ひと目水の王の姿を見て自分のものにしたくなつたって理由もないことはないだろうけど、ほんとのところは体裁、なんだろうよ。ヤツラにとってみれば水の一族に力を借してください、なんて恥ずかしくてできねえんだろ、きつと」

「……そういうものか？」

返ってきたジャックの言葉は、納得できるようなできないような微妙なところだった。

思わず晃が首をひねっていると。

「ま、それはともかく。これでなんとか説得できそううつかなつてところだな。少なくとも王を直接狙うよりは、大分やりやすいはずだぜ」

話を戻し、体を一回転させながら、話をまとめるジャック。

「つまり、どういうことだ？」

晃はその言葉に、不穏当なものを感じた。

だから、伺うようにそう聞き返す。

「ヒヒ、分かっているだろ。その妹君が地の国の弱みであるんなら、そこをつつけばいいってことさ。……どうつつけばいいのは友よ、キミの自由だがな？」

すると、聞こえてくるはからかうようなジャックの笑い。  
あつという間に霧散する、不穏な空気。

「卑怯な問答だな、それは」

鏡写すように苦笑するしかない晃がそこにいて。

「ヒヒ、それも今更、だろ。……さあ、どうする？ 自分の私利私

欲のために地の王を説得しに来た脱獄犯さんよ」

止めとばかりに続くその言葉は、実に皮肉めいていて。

結構ひどいことを言われているような気もするのにな。

事実だからなのか、怒る気にもなれない晃。

「会えないだろうか、その人に。もしかしたら、俺にもその呪いと  
いうものが解けるかもしれないだろう？」

それは、あくまでもかもしれないことで、根拠はなかったけれど。

自身の、ラキラの力でスミレたちに傷が見る間に治っていくのを晃  
は確かに見ていたから……ひょっとしてと、そう思ったのだ。

「ヒヒ、まったく困ったヤツだよ。そう言うだろうと思ったボク  
もたいがいだけだな」

そしてジャックが……そんな晃の『かもしれない』に、言葉通り分  
かってたとばかりに頷いたその時。

「アキラ、どうだい調子は？」

聞こえてくるのは、そんなユタの声。

「おっと、それじゃあボクはずらかるとするかな。今の話、スミレ  
にも通しておくから。準備ができたならまたくるぞ」

そして、それを耳にしたジャックは。

そう一言残し、再び狭い空気孔の中へと消えていったのだ……。

## 第17話

そして。

それからすぐに、晃はユタとともに仕事へと戻った。

仕事とは、決められた場所を決められた順番に掘り進め、地の根城を大きくしていく、といったものらしい。

そのための道具は、つるはしやシャベルといった馴染みのものの他に、現実世界で言うなら発破かダイナマイトのようなものなのだろう。

赤く透き通ったルビーのような色をつけた、握り拳大のものがある。ユタに聞くところによると、それは『炎』の魔精霊の力が宿っているらしい。

まるで粘土か何かのように壁に張り付くそれは、魔力を注ぐことによって、数十秒後に爆発する仕組みになっている。

ただ、その珠は意思のようなものがあるらしく、気まぐれに爆発しないこともあり、扱いの悪さのために滅多には使われてはいなかったけれど。

晃がそんな掘削作業を思っていたのは、一体なんのためにこんな地下へもぐって掘削を続けているのだろう、ということだった。地上は危険で、地の魔精霊として地中に棲むのは当然だという理屈は、百歩ゆずって分からなくもなかったが。

その掘削の仕方は、城を作っているというより、無目的に通路を広げているだけのように晃には見えたのだ。

それはまさしく、巨大な蟻の巣のごとく。

なのに、どこをどう掘るのかは、結構細かく決められていて。

一体何をしたいのか。

最終的に思うのはそのことばかりだったけれど。

この世界においても非常識な存在である晃には、その意味が分かるはずもなく。

バイトもろくにしたことなかった晃が、人生でこんなにきつい仕事はもう二度と体験することはないだろうというくらい働かされ…泥のように眠りに落ちていったその日の夜。

キーンッ！

と、どこかで聞いたような耳鳴りが頭に響いて。

「こらっ、いい加減起きろーっ！」

周りで雑魚寝しているものたちが起きてしまっうんじやないかって大声で、ジャックがそう叫んだから、慌てて飛び起きる晃。

きよるきよると辺りを見回すと、そこには闇が広がっていて。

晃以外に起き出してくるものはいないようだった。

というより、いびきすら聞こえてこなかった。

「っ！？」

ふと顔をあげると、暗闇の中、大きなきよる目をららんと光らせ、て飛ばたくジャックの姿があつて、びくりとなる晃。

「何してんだよ。準備できたら迎えに来るって、そう言ったらう？」

なのにキミときたらすっかり寝こけてるし、しかもまったく起きる気配がないし。思わず力を使ってしまったじゃないか」

すると、そんな晃を見てたジャックは、不満そうな口調でぶつぶつとそうこぼし、嫌がらせでもするみたいに晃の頭の上に止まる。

「……ああ、時を止めてるのか。道理で周りの皆が起き出さないわけだ」

「馬鹿か。何か勘違いしてるだろ？　ボクにそんな大それた力が使えるとでも？」

「違うのか？」

「つまり、『時』の魔精霊だなんて言うから世界の名を冠するような能力すらも使えるのかと思ったが、さすがにそこまではいかないらしい。」

「違うさ。ただ、ボクとキミの周りの空気を止めているだけだよ。っていうか、その事だってキミは知ってるはずだったんだがなあ」

「そうか、面倒かけてすまないな、いろいろと」

めんどくさそうに頭をかくジャックに、知らないということの弊害を感じ頭を下げる晃。

ジャックはそれに、何故か処置なし、とばかりに呆れてみせて。

「……まあいい。ほら、さっさと行くぞ」

終いにはため息ついて、ジャックは再び羽ばたき、狭い空気孔を抜けていこうとする。

「お、おい。行くってそこからか？」

「そりゃそうだろ。まさか正面から乗り込むわけにもいかないし……って、急げよな。分かってるだろ？　ボクの時を止める力はそんなに長くは持たないんだからさ」

羽を散らして身体を縮こませ鉄格子をすり抜けた後、ジャックは羽先で急かすようにしてそう言ってくる。

「いや、その隙間は流石に俺では通れないと思うんだが……」

「ヒヒ、まだ言うか。本当に自分が何であるのか自覚がないみたいだな。仕方ないから今一度確認させてやるよ。フェアブリーズ……この世でもっとも進化の早い生き物。頭の中で想像できるものなら何にだって姿を変えられる。加えてその身体を構成する水は万能の薬ときてる。いくらキミがその事実を忘れ、名も知れぬ別人になるうともその根本は変わらない。……ついでに、世界中の悪人だろう

が善人だろうが関係なくその力を欲しようとしている輩が多くいることを自覚しておくんだな」

「それは……」

凄いというレベルじゃすまされないのではないかと、晃は思わずにいられなかった。

自分……ラキラがフェアブリズという種族だということは、本やジャックの言葉、そして魔物に襲われていた馬車を助けた時に分かっていたつもりだったけれど。

そう改めて明確な言葉で言い表されると、ラキラはとんでもないヤツだったんだなと、感心しきりの晃である。

とはいえ、今は晃がそのラキラなわけで。

「つまり……変化するものを頭の中でイメージすればいい、と言うことか？」

思えばそのフェアブリズの力というものを使うのは二回目だった。酷い火傷を負っていた馬車の人たち。

傷つき倒れていたスミレ。

その時はただジャックに言われるまま、みんなの怪我が治ることを願っていた。

それが……何故あんな水の竜の姿をとったのか。

少なくともあの時、水の竜をイメージしていたわけではなかったはずで。

その竜が一体どんな姿をしていたのか。

晃はそれを自分の目で見たわけじゃないから、そもそもイメージのしようがないわけだけだ。

（一度、どう言ったメカニズムで変化するのか、調べてみたいものだな）

晃はそんなことを考えつつ、晃の返事を待たずにさっさと先に行っ



てしまったジャックを追いかけろべく、頭の中に一つのイメージを浮かばせてみた。

すぐに浮かんできたのは、ジャックの姿だった。

目の前である狭い鉄格子をすり抜けていく様を見ていたから、おそらくイメージしやすかったのだろう。

そして……しばらくの間そうしていて。

再び目を開けると、既に視界が変わっているのがよく分かった。

先程まで座り込んでジャックを見上げていた位置より明らかに視線が低い。

その視線を自らの身体に向けると、見慣れてきた薄茶色の羽が見える。

「……うまくいったのか？」

晃は首を捻り、とりあえず羽ばたいてみる。

すると体が飛ぶことを覚えていたかのように簡単に宙舞うことのできた。

それと同時に感じるのは信じられないくらいの身体の軽さ。

だから鳥は空を飛べるのかと妙に納得して、晃はそのままジャックの真似をするようにして頭から鉄格子に突っ込む。

つかえて出られなくなるんじゃないかと晃が思ったのは一瞬で。

柔らかな身体が鉄格子の枠の形に変形し、さほど苦勞することもなく鉄格子を抜ける。

「……よし、行くか」

発するその声もジャックのもので。

その思いのままのような感覚に楽しい気分になりつつ。

晃はどこまで続くかも分からない狭い暗闇の中を進んでいって……。

「何だ、ボクに化けたのか。悪趣味なやつだな」  
「自分で言うなって。……他にイメージが浮かばなかったんだ」  
それから、開口一番そんなことを言ってくるジャックと合流し、細く幾重にも枝分かれした空気孔の道を進んでいく。

鳥目だからなのか、晃がそう都合のいいように変化したからなのか、光のない闇の中のはずなのに、狭い石壁のでこぼこが分かるくらいに視界はきいていて。  
それでも、ジャックがいなければ帰ることも難しいんじゃないのか、なんて思いつつ……しばらく進んでいくと。

「そろそろだぞ。こつからは気を引き締めてけ。王ダアケシにはダイサとクロイってやべえヤツらがついてる。そいつらに下手に見つかるといふことがあればさしもの時使いのボクでもどうしようもないからな」

「そうか。しかし名前だけでは気をつけるも何も……」

「ヒヒ、分かるさ。雰囲気ってやつでな」

「成る程」

そう言うジャックの言葉内には、隠しきれない緊張が潜んでいるのが分かって。

晃は頷くことしかできなかつたわけだが。

二人して神秘的な空気のままやがてたどり着いたのは、倉庫か何かに使われているらしい白壁の小さな部屋だった。

何のために使うのか晃にはよく分からないものから、掃除道具やら掘削の道具やら雑多にもものが積まれている。

しかし、古い埃をかぶっている印象はなかった。

おそらくここも、作られてからそれほど日が経っていないのだろう。

ジャックは、心なしか音をたてぬように羽ばたきながら、空気孔の対面にある硝子窓のついた木の扉へと近づく。

そしてその大きな頭で体当たり……いや、ノックをすると、すぐに扉が開き、そこにひとりの少女が入ってきた。香澄によく似た『木』の一族の少女、スミレ。

「……」

何となくそのことに確信を持てなかったのは。

改めて面と向かったのが晃にとっては初めてだったということもあるだろうけれど。

どこか、『水』の国で見た時の彼女と比べて、何か足りない気がしていたからだ。

もしかしたら、その栗色の髪に咲き誇る紫色の花が、前に見たときよりも瑞々しく見えるせいなのかもしれないが……。

「来ましたね。あ、そっちの目つきの方がラキラさんかな？」

ジャックと晃を交互に見据え、すぐにスミレはそう聞いてくる。

「……ジャックに変身したつもりだったのだが」

「ふふ、見た目はほとんど変わりませんけどね。しわが寄ってますよ、ここに」

首を傾げる晃にスミレは自分の眉間を摘んで笑ってみせる。

それこそ上巻ではるくに会話もしていなかったかと言うのに……受ける印象は親しいもののそれだった。

それは彼女が香澄に似ている、ということだけじゃなかったのだらう。

ジャックと同じかそれ以上に、ラキラと言う人物への信頼のようなものを晃は感じていた。

「ヒビツ、ボクってこんなに怖い顔してるのかよって思ってたけど、やっぱり違うか。うん、そうだよな。安心した。安心したついでに作戦の首尾の方はどうだい、スミレさんよ」

「ええ、後は仕上げをばつてところですかね」

失礼な安心をした後、悪そうな顔で伺いをたてるジャックに、芝居がかった口調で笑ってみせるスミレ。

「仕上げ？」

「はい。実は私、カーナ様……ええと、ここに来てから地の王の妹さんのお世話係をしているんです。ですが流石に一人ってわけじゃなくてですね、トビイさんって言ってますけど、そろそろ交代の間なんです。私が交代を告げたらすぐにここの前を通ると思うので……」

「そいつに化けて後に続け……つまりはそう言うことだな？」

「そう、なりますね。それが仕上げです」

スミレとジャックは頷き合い晃を見る。

その、何でもないはずのやりとりに、何故か違和感を覚えた晃だったけれど。

「……分かった。やってみよう」

それなりに見慣れてきていたジャックはともかく、今から会う人に変身することが果たしてうまくできるのかというプレッシャーもあって。

その時はそこまで頭が回らず、晃はただそう頷いていて。

「ヒビ、柄にもなく緊張してるのか？ ま、王の元へ乗り込むってワケじゃないんだから気楽にいけよ。ボクはその間に王のツラでも拝んどいてやるからさ」

そんな晃に励ましの言葉を残し、晃が何か言うより早く、再び空気が孔の中へと潜っていつてしまう。

「それじゃあ私も交代時間なので。待ってますよ、ラキラさん」

「あ、ああ……」

結局、流されるままに頷くしかない晃は。

軽く手を挙げ倉庫から出ていくスマレを吹き抜けになっている硝子窓越しに見送って。

左手に続く道へと進んでいったスマレは、今までの白い壁からすっかりしたつくりの黒い岩壁で作られているらしい通りまで歩き、不意に姿を消す。

いや、よくよく見ると上へと続く階段があることが分かる。

おそらく、あの先に地の王の妹君がいる部屋があるのだろう。

その先が、この地下城の中心部なのだろうか。

その黒い岩壁の、遠目からでも分かるゴツゴツとした無骨なつくり、晃はそれをどこかで見たことがある気がしたが……晃がその答えを出す前に、スマレと入れ違うようにして誰かが歩いてきた。

それは、銀色の法衣を纏い、背中に漆黒の大きな翼をつけ、特徴的なカールのかかった金髪を小さな白い羽根突きのサークレットでまとめている……そんな少女だった。

「……」

息を殺し、扉からちよつと離れる晃。

その前を少女は気付くことなく通り過ぎて。

(あれは、飛田先輩?)

まだ出会ったばかりだったけれど間違いなくそうだと思える容姿。晃は、そのついて出た内心の眩きに、確信があった。しかし、同時に浮かんでくるのは、何故登場人物が晃自身の見知った人たちばかりなのか、ということだった。今更ながら、榎美とこの本の世界について話していた時に聞いておかなかったことを後悔する晃。

この世界が正しくも榎美の作り出したものであるならば、知り合いばかりなのは考えても仕方がないというか、当たり前なのかもしれない。

あるいは、ちゃんと日本語が通じると同じ理由で、晃自身がこの世界の情報を処理しやすくするために、知り合いに見えるのかもしいれないけれど。

「そんな質問をするのは、それこそ野暮なんだろうな……」  
だから榎美と話している時にも、敢えてそれを聞かなかったのだらう。

晃はそう自分を納得させ、さっそくスミレがトビイと呼んでいた少女の姿を頭の中でイメージする。

見ていた時間はそれほど長くはなかったから、曖昧な部分はどうしても隆子のイメージになってしまったが……とりあえず変化は完了したらしい。

それまで羽ばたきによる浮遊感が消え、変わりに大地を踏みしめる感覚が現れる。

晃が目を開けると、先程目にしたばかりの銀色の法衣が目に入った。そして、背中に手をやればふかふかの翼の感覚。

「うまくいったのか？」

聞こえるのは、晃のイメージする隆子の声。

鏡でもあれば話は早いのだが、見渡す限りではそんな都合のいいものはない。

あまり確信のないまま晃は部屋を出た。

「まあ、スミレさんに確認すればいいか」

誰か他のものに会うようなことがあれば話は別だっただろうが、もう夜更けもいいところだからなのか、幸いにも人気はなく。

晃は、あまり深く考えずに歩き出す。

そして、歩きながら感じたのは。

その大仰な見た目とは裏腹に、いやに軽い翼のことだった。

要領はジャックのときと同じらしく、ちゃんと晃の思うままに羽ばたくことができて。

「……何だか罪悪感が募るな」

思わず苦笑とともに洩らす、そんな晃の独り言。

ジャックのときは失礼ながらそれほど思わなかったが……今更ながらトビイと言っ少女と同じ姿をとっていることに、恥ずかしさを覚えたのだろう。

今の姿は晃のイメージであるから、実際のトビイとは違うのかもしれないけれど。

いざこっしてトビイに変身してみて、何だか人のプライベートに勝手に踏み込んでしまっているかのような、そんな感覚に襲われたのだ。

しかしそれは考え悩んでも埒のあかないことではあるので、晃は内心謝罪の言葉を述べつつも、あまりそのことを考えないようにしながら、スミレの上がっていったと思われる石階段を上ってゆく。

初めは、自然の石を削った、そんなつくりの階段だったけれど。

ふと急なカーブを描き、螺旋階段へと変わったところで、階段一つとつてもないがしろにできない、といった雰囲気伝わってくる……滑らかな光沢を放つ大理石の階段になっていることに気付かされる。

さらに、それまでいつ消えるかも分からないカンテラの灯りだけだった今までの道のりとは明らかに異なる、虹色の光が階段を照らしていた。

その光の出所はいまいちはっきりしない。

もしかしたら、階段やその周りを囲む壁そのものが光っているのかもしれないが。

その度違う色を見せる螺旋階段を眺めながら上りに上ってしばらく。階段の終わりのその先に、まるで外にでもいるかのような光が差し込んでいるのが分かった。

一応警戒しながら、晃は階段の終わりへとそっと足を踏み入れる。

するとそこには……大きな庭園としか言いようのないスペースが広がっていた。

「こんな所に、凄いな」

とりどりの花々。

青々とした芝生。

知っているもの、知らないもの構わずに競うように咲き誇っている。その周りを、四季を表わすかのような4色の木々が囲んでいて。

上空には黒い鍾乳洞の天井。

極めつけは、青空こそないが大きな光の珠……太陽の代わりらしいものがあることだろう。

その自然と変わらぬような広いフロアの奥には、分厚くその光すら



遮断するような……レースの天蓋つきベッドらしきものが座していた。

当然、その天蓋のせいで中は見えないけれど。きっとそこに地の王の妹君がいるのだろう。

「……………スミレさんの姿がないな」

目の前に広がる光景に圧倒されたせいかわ、今更ながらに気付いたのはそのことで。

どこにいるのだろうか、辺りを見回す。

「……………っ!？」

と。

思わずこぼれる、驚愕の声。

そこに今の今までであったはずの石階段がなかった。

ほんのさつきまでそこを通って来たはずの道が。

かわりにあるのは赤々と茂る背の高い木々だった。

まるでそこに階段など初めからなかったかのように晃の視界を塞いでいる。

この本の世界が、現実には起きえないことが起こる世界であることは、晃も理解していた。

また、今まであったはずの道が突然消えるといったシチュエーションも、ありがちと言えはありがちだろう。

この状況でこの後に起こるだろうこと。

晃がその答えを導き出すよりも早く。

「あ、ラキラさん?、来ましたね」

背中にかかる、スミレの声。

(……………罨だった、か?)

晃は、スミレとともにここに来た経過をラキラの本でしか知らなか

った。

だからこそなのか、スミレがラキラたちに付いてきたその理由が、単純に助けられた恩義のためだけだとは思えなかった。

この世界を体験するもの……この本の読者として、ある一つの可能性を考えていた。

スミレが襲われていた馬車の護衛していたのは偶然ではなく、本当は『水』の国を出て地の王の下へと向かわんとするラキラに近付く算段だったのではないかと。

そうすると、必然的にスミレは『地』の国の者、ということになるわけ。

晃は仲間のふりして近付いてきたスミレに、まんまと騙されたことになる。

……とはいえ、それは全く根拠のない可能性でもあって。

せいぜい頭の中でそうだったらどうしよう、くらいのものだった。

たった今、スミレに付き纏っていた違和感の正体……その一つに気づくまでは。

それは違和感、と言うよりジャックやラキラが気にならなかったことが不思議なことでもある。

ここに来るまでは立場が同じだったはずのラキラとスミレ。

どこの馬の骨かも分からない一労働者を、何故地の王はその妹君の世話などと言った重要な役割につけたのか。

普通に考えれば、それはありえないことだろう。

その意味するところはつまり、スミレが地の国にとって身元の知れた、その仕事を任せうる人物であるか……あるいは、妹君の世話と言うことそのものが晃をここにおびき寄せるための方便だった、ということになるわけだが。

「全くもって似てなかったらどうしようかと思いましたが、大丈夫そうですね。うん、合格です。」

あなたがラキラさんと知らなければ、あなたがトビイさんじゃないなんて疑う人はいないと思いますよ」

続いたその言葉は、感心したような……それでいて意味深な言葉だった。

「そうか。自分では分からなかったから、安心したよ。……それで、肝心の妹君はその中か？」

帰り道を塞いだ時点でスマレが怪しいのは確かではあるのだが。

その時ふと思ったのは、逆に晃でも気付いたのだからラキラもジャックもきつとそんなスマレのことに気付いたんじゃないか、ということだった。

それでも敢えてこうしてここに来たのは、何か理由があったのかもしれない。

本にはそんな事書いてはいなかったけれど。

何故か晃はそう思えて、スマレの意図を確かめるべく、早速そう聞いてみる。

「はい。お待ちかねですよ？」

返って来たのは、何か思うところがあることを隠そうともしない、そんな笑顔とその言葉。

躊躇いを見せる晃に一層笑顔の度合いを強めて。

「それでは、ご案内します。あ、もうラキラさんに戻っていただけでけっこうですよ。……というか、冷静になって考えてみると、トビイさんになってもらった意味、なかったかもですね？」

そう言つとさっさと天蓋つきベッドの方へと歩いていってしまふ。

「……お待ちかね、か」

どうとでも取れる言葉ではあつたけれど。  
晃が逡巡したのは一瞬だった。

帰り道が塞がれてしまっている以上、それ以外に道はないというの  
もあつたけれど。

散々疑つておきながらも、今だそれを表に出さないところからも分  
かるように、その疑心が愚かな早とちりであると、信じたかつた部  
分もあつたからだ。

それは……スミレという少女に香澄の面影を見たことも、少なから  
ず起因していて。

晃は元の姿、つまり晃本人の姿に戻り、すぐにその後続いたのだ  
つた。

何か、予想だにしない何かが起こるかもしれない。  
そんな期待を、心内に秘めながら……。

## 第18話

「あなたがくるのを、おまちしていました。このような方法、このような姿での対面をおゆるしくください」

答えあるだろう天蓋つきベッドの中へと足を踏み入れて。晃は、ますます訳が分からなくなってしまっていた。

目の前に漂う闇の真っ只中に、一人の少女がいる。

夜着姿の少女は大きなベッドに座るようにして晃のを見ていた。その背中に、漂う闇の発生源となっているらしい黒い翼を生やして。

だが、何より晃を戸惑わせたのは、その青みがかった短めの髪が、その儂げな雰囲気、ジャックやスミレのようによく見知った……部活の仲間である大屋奏子そのもの、だったことだろう。

「君は……?」

「私は、この地の国の王、カーナ・ガイアットといいます。もっとも、いまとなつてはこのありさま。名ばかりの王ですが」

呆気に取られたまま口からついて出た言葉に、カーナと名乗った少女はそれでも律儀にそう答え、自嘲的な笑みを浮かべる。

「地の国の王、だと?」

ここへは、病にふせている地の王の妹君に会いに行くためにやってきたはずだった。

しかし目の前にいるカーナは地の王だと言う。

一体どうということなのか。

その真意を問うように、カーナのすぐ側で控えていたスミレに視線

を向ける晃。

「実は、これには深い事情があるんですよ」

「……事情？」

悪びれずにあっけらかんとそう言うものだから、嘘を吐かれていたことへの疑念より先に、晃はそう聞き返していた。

「そう、語るも涙、聞くも涙な事情がありました。命を救っていたいた晃さんを騙すような事をして本当に心苦しい思いだったんですけど、その一方で探す手間が省けてラッキーだったというか、ほら、お互い嘘をついていたわけですし……チャラってことにしません？」「……」

芝居がかったようなスマレの言葉。

いまいち真意が掴みにくいが、きっとそれが性分なのだろう。だからこそ、今発せられた言葉は嘘偽りのないものだろうと、そんな気がしていたけれど。

「お互い？ ああ、気付いてたのか？ 俺が水の国のラキラ・フェアブリッツだって」

今は晃自身なわけだからその言葉こそが真実ではないのだが、それはきつと言っても伝わらないだろう。

晃は、ラキラが地の国へ行くために姿を変えていたことを思い出し、そう答える。

「気付くもなにも、今だって変化の術を使ってみましたし、水の力で私を助けてくれたじゃないですか。そんな事ができるのは、世界広しと言えども……」

と、そこまで言いかけて、急にスマレは口をつぐんだ。

「カーナ様っ!?!」

かと思っただらひどく焦った様子で声をあげた。

視線の先には自分を抱くようにベッドに倒れ伏すカーナの姿がある。

「ぐ……うっ」

低く、くぐもった苦悶の声。

燃え盛る炎のような背中の翼。

それは、唐突だった。

先ほどまで普通に会話していたことが信じられないくらいの変容。

いや、もしかしたら何でもないフリをしていただけなのかもしれない。

闇の力による呪い。

そう言ったスマレの言葉は、本当だったのだと。

「ラキラさん……いえ、ラキラ・フェアブリツ様！　お願いしま

す、どうか力を、その力をお貸しください！」

そんな晁の考えそのままにスマレが叫ぶ。

そこには、先程までに余裕ぶりは微塵も窺えなかった。

「俺にできるかどうかは分からないが、そもそもそのために来たわけだしな」

晁はそんなスマレから視線を逸らし、言い訳をするみたいにそれに答える。

「あ、ありがとうございますっ！」

すぐに返ってくるのは、まるでもうすでにうまくいったかのような喜びに満ちたスマレの声だった。

まあ、この状況で断るなんて選択肢、晁にはなかったわけだが。

「……喜ぶのは早い。俺の力で治るかどうかはまだ分からないのだから」

晃には自分……というかラキラの水の力が一体どういう仕組みでどういった効果を及ぼすのか、しつかり理解しているわけじゃなかったから、治せる確約なんてできるはずもなく。

下手に期待させるわけにもいけないので、自然と自信のない眩きがついて出てしまう。

「大丈夫ですよ！ ラキラさんの力を体験した私には分かります。あの水の力は、闇の力なんて目じゃないですって！」

本当にそう思っているからこそなのか、やけに自信たっぷりなスマシ。

晃はそれに現金だな、なんて思わなくもなかったけれど。

誰かに期待され、尚且つそれに応えられるかもしれない力があるってことが、どんなに素晴らしいことが、思わず実感してしまう晃である。

それはきつと求めようとしても中々手に入らないものはずで。

晃はその期待に応えたいと強く思った。

「とにかく、やってみようか」

だから晃はそう答え、瞳を閉じる。

思い出すのは、ジャックの言葉だった。

心に強く願うこと。

願いを心の中で言葉にすることで具現化する、万能の『水』の力。スマシを助けたときは、そこで本が終わってしまっただけであまり実感が沸かなかつた晃だったけれど。

まさしく魔法めいたその強大な力が強く心に思うだけで発動するこ



とに、晃は軽い拍子抜けを覚えていた。

こういった類の超常の力は、もつと複雑な術式や発動のためのまじないの言の葉が必要だったりするものではなかるうか、と。

あるいは、この力を発動できるだけの、血の滲むような努力や鍛錬が必要なのではないかと。

それは、スマレを助けたこと、その結果を晃自身ラキラの本で知りえたことにすぎないからこそ、都合のよさすら感じてしまう不安によるものだったのだろう。

『闇の力で苦しんでいるカーナを助ける』。

そう強く願えたところまではよかったのだが。

しばらくたっても、何の変化も起きていないように思えて。

晃は立ち尽くした状態で再び目開ける。

そこには、目の前には変わらない様子のカーナの姿と。

晃をただ信じて、真剣な目で見守り続けるスマレの姿があつて。

(……………失敗か?)

思わず焦る晃。

そもそも何が成功で何が失敗なのか、それも分からぬままに。

重くのしかかる、一瞬の静寂。

余計なことを考えたのがまずかったのだろうか、今更ながらに後悔して。

兎にも角にも一度やると決めた以上ここで引き下がるわけにはいかないと、再びチャレンジしようと思がもう一度瞳を閉じようとした、その瞬間。

ガアアアアツ！！

突如天蓋に包まれたその場所に、身の毛のよだつ獣の咆哮が響き渡った。

「『闇』の力がっ!？」

切羽詰ったスミレの声にならって顔をあげる晃。

うづくまるカーナの背中にある黒い翼。

燃え盛る炎のようにゆらめいていたそれが、その勢いを増している。まるで生きているかのごとく、その中心には赤い瞳のようなものがキラついていて。

それは今一度、魂消るような咆哮をあげる。

すると、ボウツと爆ぜるように闇の翼の一部が割け、それは鋭い爪を持った腕と化した。

得体の知れない何かが生まれようとしている。

そんな光景に、呆然とする晃。

腕を生やしたそいつは、息の根を止めようとその腕をカーナの細い首へと絡みつかせて。

「カーナ様っ!」

スミレは慌てて駆け寄り、その手を外そうとその闇に触れる。

「きゃあっ!？」

とたん、本物の炎のように黒い靄のようなそれがスミレの手に広がった。

カーナと同じくして、苦悶の表情を浮かべるスミレ。

しかし、その手を離さない。

闇の力はそんなスミレを容赦なく包み込もうとする。

「…………っ!」

晃が硬直から解放されたのはその瞬間だった。  
自分は一体何をしている？  
そう自問自答するよりも先に、晃の足が動いていた。

それはきつと、ズレを感じないこの世界だからこそ余計に感じる自分へのふがいなさ故で。

晃は心の底からあふれ出すよく分からない衝動のまま闇に向かって突進してゆく。

黒い靄のようなそれは、手ごたえなどないものだと思われたが、何かと正面衝突したかのような激しい衝撃が、晃を襲う。

一瞬意識が飛びかけた晃だったが、それは功を奏したらしい。闇のその手がカーナの首から離れている。

しかし、それに晃が安堵できたのはわずかばかりの間だった。それからどうするのか、考えていなかったからだ。

「ラキラさんっ！」

名を呼ぶスマイルの声。

顔を上げれば、カーナの背にあつたはずの闇が、今にも晃に襲い掛かるうとしていた。

何考え行動する間もなく、晃はただただそれを見つめることしかできなくて。

物語が終わるときは、その世界で命を失ったとき。

そんな柢美の言葉がひどくリアルな実感として、晃を襲ったけれど。

その瞬間、目前に迫り来る死の気配を遥かに凌駕する、何かの圧倒的な気配が背後から生まれた。

いや、背後からだけではない。

それは地鳴りのような音を立てて、四方八方から迫ってくるのが分かる。

今にも襲いかからんとしていた闇は、正しく意志あるもののように、警戒の呻きを洩らした。

スミレは、何が起こったのかも分からずに、意識を失ったままの力一ナを抱きしめるようにしていて。

そんな中、晃は一人、まるで迫り来るものの正体が分かっているかのように落ち着いていた。

いや、事実、晃はそれがなんなのか気付いていたのだ。

その音は、晃の呼びかけに応え集ってきた……怒涛の水の音だと。

晃は、力の発動に失敗などしていなかった。

ただ、スミレを助けたときのように、近くに水がなかったただけなのだろう。

力の発動に失敗していなかった事に気付いたのは、その音を聞いてからだったけれど。

目の前にある闇は、そんな晃よりも早く、その力の発動に気付いていたのかもしれない。

だから、それに対抗するべく姿を変えたのだ。

そんな晃の考えは、間違っではいなかった。

迫り来る水は、地を這うように天蓋をぬって姿を現し、晃の下へと集まってくる。

そのまま一体化する、晃と水。

次第に身体の輪郭が曖昧になり、視界がぼやけ……変容が始まる。

その自身を作り変えられるような感覚は、スミレを助けたときの感覚と同じで……。

完全に晃の意識が水の奥底へと埋没するとともに、生まれるは水の竜。

「水の神、ウルガウ……」

目を覚ましたカーナがそう呟いた本当の意味を、晃は知らない。

水の一族でその力を使えるものが、ラキラ・フェアブリッツただひとりであることを。

そして、晃がもう一つだけ、知らぬ……あるいは気付けなかったことがあったことを。

それは大きな顎もって喰らわんとする水の竜に対して。

その闇が全く抵抗しなかった、と言っこと……。。

## 第19話

それから晃が目を覚ましたのは、いつか嗅いだことのある異なる世界の花の香りに誘われて、だった。

その不思議と落ち着く香りに気分よく晃が目を覚ますと、そこは草花で敷き詰められた天然のベッドの中で。

晃は目をこすりながら辺りを見回す。

実は密かに危惧していたこの本の世界からの剥離はせずにすんだらしい。

そこは天蓋の外、洞窟の中につくられた地上の楽園といってもよかった。

見渡した晃が、思わずひいてしまうほどに、元々あったはずの景色が変貌している。

「水の力を使った影響、か……」

おそらく、水の竜がその強大な力ゆえに暴走し、天蓋を飛び出したことよって起きた結果なのだろう。

それまで色とりどりの庭園だったその場所へとやってきた水たちがその勢力を広げ、大きな池をつくっていた。

元々そういう花だったのか、それとも湛える水にその力があるのか。それまでそこにあった草花は、水の流れに踊り舞う水中花となって変わらずに咲き誇っている。

それまで草の領地だった地面は水によって分断され、いくつもの島をつくり、作り物の太陽の光を浴び虹の橋をかけていて。

最初にここへ来たときの比ではない光景に、ただただ晃が圧倒されていると。

虹の橋を三つほど渡った島に、取り残された分厚い布幕に囲まれて中を伺えない、天蓋の姿が見えた。

「二人は無事か？」

晃は、呆けている場合ではないとひとりごち、天蓋に向かって駆け出す。

見事なまでに島と島を繋ぐ虹の橋。

「……」

一瞬躊躇った後、晃はその虹の橋に向かって足を踏み出す。

かつん。

しかし、すり抜けて水の中に足を突っ込むというある意味お約束は起こらなかった。

見た目の通り、透明な硝子の上に乗っている感覚。

「何だか複雑だ」

なんでもあり、というか。これがこの世界でも当たり前だとすれば、構えた自分が至極滑稽に思えて。

晃は、言葉通り複雑な笑みを羽浮かべながら、二人がいるはずの天蓋へと向かう。

「……二人とも無事か？」

「あ、はい。カーナ様も一応私も無事です。ちょっと待っていてくださいね」

晃がそう声をかけると、ちょっと焦ったようなスミレの声。

言われた通りそこで待っていると、しばらくしてスミレのどうぞ、と言う言葉が聞こえて。

「これは……酷いな」

天蓋の中へと入るや否や、晃は思わずそう呟いてしまった。まるで台風でも通過したかのようにベッド周りが水浸しになっている。

十中八九自分のせいだろうと頭を抱える晃。

外の庭園ですら地形が変わってしまっほどの有様なのだ。

水の竜が暴れた中心地とも言えるこの場所がそもそも無事ですむはずはなくて。

もっと思っ場所を考えるべきだったと晃が反省しきりしていると。

「あやまらないください、ラキラ様。おかげで私を縛り、苦しめていた闇は去りました。そのことを考えれば、このようなことは瑣末なことです。むしろ……『地』の眷族として最高の礼をもって返さなければならぬくらいです」

言葉通り、晴れやかな様子で深々と頭を下げるカーナ。

「うう……酷いですよう、カーナ様ってば。私は大打撃なんですけど」

しかし、瑣末で片付けられたのが我慢ならなかったのだろう。

ベッドの上において尚且つスマレが庇っていたからなのか、ほとんど水の被害にあっていないカーナに対して、全身濡れネズミのスマレが情けない声をあげる。

「ふふ。おかげで頭のお花がいきいきしてますよ。よかったですねいですか」

「よくないですよ」

スマレの言葉に悪びれた様子もなく、ほころんでみせるカーナ。対するスマレはおおいに不満のようだったけれど。

カーナが先程口にしたように、カーナが地の王で、スマレが彼女に仕えるものならば。

そのやり取りはラキラの本の内容と、ここに来るまでの『地』の国とそれを牛耳る王のイメージとは、大きくズレがある……そんな気



が晃はしていて。

「何にせよカーナさんに憑く闇を払うことができたのはよかった。しかし、カーナさんは地の王だと、そう言ったな？ 一体どういうことなんだ？ 王は男ではなかったのか？」

二人のそんなやり取りに水を指すことになるだろう事を心苦しく思いつつも、晃はそう口を挟む。

何故ならば、カーナが地の王だとするなら、水の王マーサとの婚姻の話すら成り立たなくなってしまう……つまり、そもそもここに来た意味すらなくなってしまうからだ。

すると、スマレとカーナは顔を見合わせて。

「そうでした。話のつづき、でしたね。まず、私たちの事情をきいてくださいますか？」

一つ頷き、カーナがそう言った。

事情、それはスマレの言いかけていた言葉の続きなのだろう。

晃はそれに異論があるはずもなく、ただ頷く。

スマレは、カーナの言葉を受けて。

気を取り直すようにして、語り出した。

それは……ラキラすらも知らなかったであろう、地の国と水の国、そして闇の国の真実だった。

「実はですね、この地の国は水の国と一方的な同盟を結ぶよりも早く、闇の国に乗っ取られてしまったんです」

始まり……それは、先ほどまでカーナの背にあった黒い翼だという影のように付き従い、離れないそれは、ある日突然地の国の人々の背に出現した。

『闇』の王の呪い。

それは憑かれた者たちを意のままに操る、そんな呪いだつた。その呪いは、最強と言われていた『地』の魔精霊をいとも容易く蹂躪し、その精神を乗っ取つたのだという。

「あれは、おそろしい力でした……」  
自身を抱くようにして、呟くカーナ。

その呪いの恐ろしさ……それは、乗っ取るうとする力に抵抗しようとすればするほど呪いかけられたものの身体を闇が蝕んでいくことだつた。

有能で意志の強い地の騎士たちが見せしめのようにその命を奪われ……死に恐怖したもものたちが、次々と闇の翼を受け入れていったという。

「この私も、スミレとラキラ様のお力がなければ、とうの昔に命を落としていたでしょう」

自嘲めいた呟きでカーナはスミレを見、晁を見て淡く微笑む。

「スミレは無事だつたのか？」

「ええ、たまたまお暇を頂いて故郷へ帰っていたものですから」

元々『地』の同盟国である『木』の国出身であつたスミレは、カーナの宮仕えの一人だつたらしい。

地の国を離れていたことで運良く闇の呪いから逃れたスミレは、地の国の変わりように驚きを隠せなかつたという。

「久しぶりに帰つたと思つたら、もう『地』の国は、私の知るそれとは全く別のものになっていたんです」

『水』の国を含めた、近隣諸国への侵略。

元々あつたこの黒岩でできた『地』の国の地下城を、まるで包み隠すように作られ始めた、新しい白き地下城の建設。  
そして……。

「カーナ様の玉座であるその場所に、カーナ様はいらっしゃいませんでした。……ダアケシ・オノマ。『闇』の一族の王であるその男が、玉座についていたんです」

『闇』の翼の力を使い、地の国を乗っ取った首謀者。

ダアケシは、カーナの地位を奪い、近隣諸国侵略の際に、『水』の女王の姿を目に留め、一方的な同盟と引き換えに『水』の王への婚姻を迫ったらしい。

苦々しい口調のスマレは、きっとその時のことを思い出しているのだろう。

身分など関係なく、友人としてカーナの身を案じたスマレは、そんなダアケシよりまずはカーナを探すことを優先したのだという。

「そして見つけたのが、この場所でした。ダアケシは、カーナ様に『闇』に翼をつけることで、ここに縛りつけたんです。……まるで自分の所有物であるかのように」

偽物の太陽。

それは、『闇』の力を強めるものなのだという。

カーナは、この天蓋の外に出ることができなくなってしまった。

文字通り、ダアケシの籠の鳥のなってしまったのだ。

怒ったスマレは『闇』の力を解くようにと果敢にも一人で立ち向かった。

しかしそれは無謀以外のなにものでもなかったのだろう。

「ダアケシには、二人の騎士がついていました。その二人は凄く強くて、流石の私も歯が立たなかつたんです。戦いに負けて気を失っている隙に、私も翼の呪いにかけられて……次に気付いたのは、ラキラさん、あなたに助けられた、その時でした」

そう言われて、晃が思い出したのは。言われてみれば水の国で会ったスマレが、確かにその背に翼をつけていたことで。

操られたスマレがどうして『水』の国にいたのか、それは分からないそうだが。

しかし、スマレはラキラの『水』の力を肌で感じることで、『地』の国を……カーナを救うための希望の光を見出したのだという。

「後はラキラさんの知る通りです。……騙すような真似をしてごめんなさい。でも、こうするしかカーナ様を救う方法がなかったから」そう言つて深々と頭を下げるスマレに。

「……そこまで話を聞いて許さんとは言えんだらう。頭を上げてくれ、スマレさん」

晃は苦笑でそんな言葉を返すしかない。

そして、素直に顔をあげるスマレを見て、晃は言葉を続けた。

「それに、これで俺たちの目的も達成しやすくなっただらうしな」目的の達成。

それは、すなわち『地』の王……ではなく、『闇』の王ダアケシ・オノマの説得、だ。

そこまで気持ちのいい悪ならば婚約を破棄させるために何憂いなく説得ができるだらうし、今ごろジャックが王の視察に行つているだらうから、王のお付きの騎士のどちらかに化けて、と言う作戦にも展望が持てるだらう。

「説得、ですか。私もダアケシにつくふたりの騎士をみましたが……ただものではありませんでした。ラキラ様といえど容易ではないかと」

なんて少しばかり晃が楽観的な心持ちでいると、カーナが真剣な面

持ちでそんな事を言ってくる。  
それが、本当に真に迫っているので、身の締まる思いで晃が頷くと、カーナはそれに、と言葉を続けた。

「ダアケシが『水』の王を欲する理由は、その万能な『水』の力をわがものにするためだと思われます。ラキラ様の御身に秘めしその力、けっして気取られぬよう、お気をつけください」

「……あ、ああ。肝に銘じておくよ」  
願うようなカーナの言葉。

晃はそれに応えるべく、そう返して。

「カーナさんの呪いも解けたようだし、俺は戻るとしよう」  
早速ジャックと合流して、婚約を破棄させるその作戦を、ひいてはカーナたち『地』の国を助ける方法を考えなければならなかった。  
晃は自分に言い聞かせるようにひとつ頷き、何ごともなかったように踵を返そうとして。

「お、お待ち下さいラキラ様っ!？」

「ちよっとちよっと!これだけ私たちを助けておいて何も返さないつもり?サイターですよ。ラキラさんサイターです。魔精霊の風上にもおけないですっ」

うやむやにして去ろうかと思った晃だったけれど流石にそうもいかなかったらしい。

しかも、スミレには結構酷い事を言われている気がする。

晃はしぶしぶ、立ち止まった。

「……………」

そして何も言わぬまま自らの髪を筆り、心中にあるイメージを浮か

ばせた。

それは、あの黒い翼だ。

とは言っても見た目だけではあるのだが。

すぐに、晃の予想と期待通りに、二組の黒い翼が出現する。

それは、ちよつと前から考えていたことだった。

自身がイメージできるものに姿を変えられるのなら、自分の一部も変えられるのではないかと。

「それは……？」

少し怯えた様子のカーナ。

無理もないだろう。

見た目だけとはいえ今まで自分を苦しめていたものが突然目の前に出現したのだから。

「……礼をしたいと言うのなら俺が望むのはひとつだ。もしここに王がやってきたとしても、何事もなかったかのように振舞ってくれればそれでいい。そう、何事もなかったようにだ」

相変わらずうまく立ち回れない自分に苛立ちを覚え晃はそう口にして、それをスマレに手渡す。

「うわ、これ偽物ですか。よくできてますねえ」

対するスマレは晃の言葉の意図に気がついてらしく、受け取ったそれをしげしげと眺めていて。

「助けたのは自分のためだ。君たちのためじゃない。だから礼はいらない」

「そんなの嘘です。カーナ様はともかく、ラキラ様に私を助ける理由なんてなかったはずですよ？」

あくまで助けたことは自分……ラキラの目的の為だということを知り、そのまま去るつもりでいた晃だったが。

スマレは偽物の黒い翼を装着しながら、そんな事を言ってくる。

もつともなことに思わず言葉を失いかけた晃だったけれど。

「ジャックがどうしても言うから、仕方なく助けただけだ。他意もないし恩を着せるつもりはない」

「ラキラさん」

きっぱりとそう言う晃に、まだ何か言いたそうなスマレ。

そこには何だか悲しみが含まれているような気もして。

「礼はいらない。しかし、二人に願うことがこの俺にあるのなら、聞いてもいい。……どちらにせよ、事が全て終わってからだけどな」  
ついて出たのは、そんな論点のずれているような言葉だった。

事務的な言葉面とは裏腹に、お礼を断ったのは自分が晃であってラキラじゃないってことや、どうにも気恥ずかしくて仕方がなかったとか、そんな理由があったのだけど。

「ラキラさん、その言葉忘れないてくださいよ」

「願いですか……たくさん考えておかなければなりませんね」

しかし、二人はそれで納得してくれたらしい。

先程とは打って変わっての、嬉しそうなスマレとカーナの眩きが、晃にはこそばゆかった。

「ま、そう言うわけだ……じゃあな」

自分のセリフと二人に対して照れくさいのを隠せそうになくなった晃は、何がそう言うわけなんだと自問自答しつつ、二人の背を向けて天蓋にかけられた布幕をくぐり外に出る。

「あ、ちょっと待ってください！」

と、お礼に件は片付いたはずなのに、追いかけてくるスマレ。

「どうかしたのか？」

顔を拭うようにして、つとめて冷静なふりをして振り返る晃。

「ここから出るのにちょっと仕掛けがあるんですよ……って、ほわ

あ。また随分と変わりましたねえ」

スミレは晃の隣に並んでそう言いかけ、目の前に広がる晃のせいで作り変えられてしまった世界を見て、感嘆の声をあげる。

「すまない。どうも力の加減ができないらしい」

「何言ってるんですか。綺麗なものですよ？ カーナ様にも是非お見せしなくちゃです。」

そもそも、この庭園って、せめてカーナ様の心が安らぐようにって、私が作ったものなんですよ？

どうやらラキラさんのほうがガーデニングのセンスがおありのようですけど」

二人が話してくれた闇の魔精霊に支配されているという状況と、この色とりどりできらびらやかな世界にギャップを感じていた晃だけだ。たけれど。

そう言われて妙に納得する晃である。

「カーナさんのことがそれだけ大事……ということか」

「そりゃそうですよ。大切な友達です」

「身分など関係ない、といった感じだな」

何せ相手は王なわけだから、そう言う壁みたいなものがあるのかと思っていたのだが、きっぱりとそう言うてのけるスミレに感心しきりの晃である。

だけど、そんな晃の考えとは裏腹に、スミレは頬を含まらせて怒る仕草をしてみせた。

「あ、さてはラキラさん、勘違いしてますね？ 見れば分かるじゃないですか。感じてくださいこのにじみ出る高貴さを。私は『木の国の姫、なんですよ？』」



そして、悪戯っぽい笑みを浮かべつつ。

「一国の姫と一国の王の願いですよ、覚悟していてくださいね、ラキラさん」

跳ねるように虹の橋を飛び越え、晃がここへやってきた……今は立ち並ぶ木々しかないところへとかけてゆく。

「……………」

からかうような、その口ぶり。

仕返しめいた冗談のようにも思えるし、真実なのだろう、という気もする。

もしかして大事になりそうな、取り返しのつかない事を口にしてしまったのかと晃は思ったが。

一度口にしたからにはその責任は取らねばならないのだろう。

問題はその責任を晃ではなくラキラが取らなくてはいけない、というところで。

晃は渋い顔を浮かべながら、スマイレの後に続いたのだった……。

## 第20話

「さつきも言いましたが、本当はここ、随分殺風景な場所なんですよ。真ん中にあるお花たちは本物なんですけど……ほら、この辺りは幻なんです」

スミレの言葉通り、傍目から見れば木々が並んでいるその場所にスミレが手を差し入れると。

空気の波紋のようなものが広がり、その手が突き抜け見えなくなる。どうやら、その先に晁のやってきた階段があるのだろう。

「妙に凝っているというか、こだわっているな」

感心半分、皮肉半分な晁の呟き。

それは、スミレのその力が、カーナの心を安らかにする、ただその一点のみで使われているせいもあるだろう。

ここに来たとき、晁か何かでこの世界に閉じ込められた、なんて勘違いをしていた自分が情けなくなってくる晁である。

「そう言っていただけると、こだわった甲斐がありますよ」

ふふん、と得意げに胸を張って見せるスミレ。

皮肉が通用しなかったのか、分かってて得意げだったのか、晁には掴めなかったけれど。

「……それじゃあ行くよ。またな」

「ええ、またです」

またを主張されて、思わず苦笑する晁。

向けられるは、何を願うのか不安になってくる、そんなスミレの笑み。

晃はさらに苦味の度合いを深めつつ、その場を後にして……。

それから、ジャックと別れた倉庫の場所まで戻ってきた晃だったが、「ジャックの姿がないな」

袋小路になっっている倉庫前。

そこにいるだろうと思っていたジャックの姿がなかった。

「倉庫の中か……？」

晃は心内に染み出してくる不安を押し殺すように呟き、倉庫の木扉を開ける。

ギイ、と微かに軋む音。

中を見回してみるがその姿はなく。

よくよく考えてみれば……何時に集まるとか、どこに集まるとか、今更ながらに約束の一つもしていなかったことを思い出す晃。

十夜河家が、特にそういう約束事、時間の絡むようなことについてはきっちりしていたので、晃自身普通ならばそういうことはきちんとして決めておく性格ではあるのだが。

ジャック、いやタローに関しては何き合いの長さにかまけて慣れ、甘えていた部分があったのかもしれないな、なんて思う晃である。

タローは、口は悪いし人にイヤガラセをするのが趣味のような男だが……できたヤツだった。

本人はそう思っていないが、ある意味時間や約束事に煩いとも言える晃に対し、それに当然のように接してくれていたのだ。

何か約束があつて、10分前に晃が待ち合わせの場所にやってきた

としても、必ずその前後にタローはやってくる。

待たすことも待たされることも、タローに関してはなかった。

晃は、そのタローの人となり、ジャックにも反映しているというか、同じであるということ半ば確信していた。

どこをどうと明確に言い表すことはできないのだが、カーナヤスミしたちと比べても、ジャックは晃のイメージするタローにより似ていた気がしたからだ。

と言うより、ジャックに関しては、タロー本人じゃないのかってくらしいの気持ちでいた。

そんなジャックがこの場にいない。

おそらく、ここへ来られない事態が起きたのだろう。

『地』の王……改め『闇』の王ダアケシを見に行くと書いていたジャック。

もしかしたら、王に見つかってしまったのかもしれない。

「……探しに行くか」

晃は自分に言い聞かせるように呟き、空気孔を見上げる。

ジャックがそこを通過して王の元へと向かったのは分かっているが。

そこからどんなルートを通ったのかは皆目見当もつかなかった。

それでも、行くだけ行くしかないだろう。

晃はそう決めて、ジャックの姿をとるためにその姿をイメージしようとした、その時。

背後にある扉の向こう。

ずっと続く通路のほうから、微かに羽ばたきの音が聞こえてきた。

ジャックかもしれない。

晃はそう思い、それでも慎重に硝子窓を覗き込む。

だが、それがジャックではないことはすぐに分かった。その羽ばたきの音は複数で……尚且つ歩みを進める足音まで聞こえてきたからだ。

晃はやって来たものたちをそつと確認する。

一人は、先程見たトビイと呼ばれていたスマイレの同僚だった。

もう一人は、深紅の甲冑を着た小柄な騎士。

隣を歩くトビイと同じく、背中にはあの闇の翼をはためかせている。

「あれは……」

しかし、晃はその騎士の面差しを確認し、思わず声をあげてしまった。

晃の知っている彼より肌が白く、耳がツンと尖っていることを除けば、その小柄な騎士は部活仲間の西尾張部大介そのものだったからだ。

ふと思い浮かぶのは、王につく強い力を持った二人の騎士のこと。

ダイサとクロイ。

きつと、あの大介に似た騎士こそがダイサなのだろう。

それは、今まで会った人物の名前を考えれば容易に想像できることで。

(くっ……やりにくいな)

全くそのことを予想していなかったわけでもないのだが、この物語を終わらせるには、彼らとの対峙は避けられないのだろう。

しかも、晃にはそんなやりにくいって気持ち常在に付きまとうのに、向こうにはそんな感情はない可能性が高いのだ。

思わず唸る晃だったが。

「……っ!？」

はっと我に返り、晃は屈んだ。  
今、間違いなく。

そのダイサと目があつてしまったからだ。  
気さくさと無邪気さは変わらないのに、背筋に冷たいものが落ちてくる……そんな笑顔と。

ジャックが見れば分かると言っていた意味を、二重で思い知らされた気のする晃である。

幸か不幸か、水の力によるイメージの具現化はすでに完成していて、ジャックの姿になっていた晃は、彼らが間違いなくここへ来るだろうことを察し。

急いで空気孔の中へと入り込んで……。

「もう一人の曲者には逃げられちゃったみたいだね」

ダイサ・ニシエザは、倉庫の空気孔、その闇の先を見据え、明るい調子でそう呟く。

「すみませんダイサ様。わたくしが見つけたときに捕らえておけばよかったです……」

「それは……けんめいだね」

呟いたセリフは、誰に言ったものかははっきりとしなかったけれど、隣にいたトビイを震え上がらせるのには充分で。

「まあ、いつか。どうせ彼は逃げはしないだろうし。……オレたちの手に大事な預かり物があるうちはね」

倉庫に響く笑い声。

それは、陰鬱なその場にそぐわないほどに、明るく響いたのだった……。

それから、道も分からぬ空気孔をぬって、晃はジャックの姿を探したが。

結局、見つけることができずに、自身の寢床に戻る羽目になった。集められた労働者たちの朝は早い。

仕事の始まりを意味するカンテラの灯りが点き始めれば晃がいないことに気付くものが多くなるだろうからだ。

そう思い、道に迷いながら何とか寢床に戻った晃だったが。

晃は自身に宛がわれた寢床の脇で、光を放つ本の存在に気付いた。

それは、広いその部屋を照らすほどの光だったが、晃以外に気付くものはない。

それが晃にしか見えない、と言うのはどうやらこの世界でも通用するらしい。

しかし、その本が光ったのは少なくとも本の世界で初めてのことだった。

晃はその光に惹かれるようにして袋から本を取り出し、自分の寢床に座り込むと、変わらず明滅を続ける本を開いてみた。

「これは……」

そして、晃は新たに書かれている部分に目を通し、驚きともつかない眩きを洩らす。

カーナヤスミレに会い、カーナが本物の『地』の王であり、『地』の国が『闇』の国によって支配されようとしている……と言った真

実を知る、という所まではいい。

問題はその先だった。

今までそんな事一度たりともなかったはずなのに。

柢美が台本だと、そう言っていた通りに……そこには未来のことが書かれていたからだ。

水の王、闇の王の謀略により、地の玉座にて泡と帰す。

それは、まるで予言めいた……ひどく曖昧なものだった。

曖昧で、それでいて確かな不安を与えてくれる一文。

晃は、そのはかったかのようなタイミングに、うそ寒いものを覚えただけだ。

その一文が何を意味しているのか、不安に煽られつつも考えてみる。

『水』の王と言えば、柢美……いや、ラキラの懐中時計の中にあつた写真の人物……マーサのことだろう。

『闇』の王ダアケシ・オノマが、闇の翼の呪いまでも洗い落とす万能の水の力を我が物にしようとしているのは、カーナたちからも聞いていたが……

もし、これからこの一文に書かれたことが起こるとするならば。

『水』の王の……柢美の命が危ないだろうことが、容易に想像できた。

晃にとってそれは、享受してはならないことだった。

このズレを感じない、本気になれる世界だからこそ、なんとかしてでも阻止しなければならないと、強く思っていた。



幸いなのは、今晁のいる地の根城に、『水』の王がいないこと、だろつ。

婚姻の儀のために『水』の王がこの地へやってくるよりも早く晁が『闇』の王を説得……その悪行を止めることができれば、この一文のような事は起こらない……

いや、一見して台本のような、最初から運命付けられているように見えるこの結果を、変えることができるのかもしれない。

ラキラの本……初めて記された未来のこと。

それはもしかしたら、そのために記されたものなのかもしれない。未来に起こるかもしれないことに準備し、構えるためのものなのだと。

晁は、そう自分を納得させることで。

不安消えることのない、眠れない夜を過ごしたのだった……。

## 第21話

そのまま本の世界にて一夜を過ごし、次の日。

晃は自分の考えが大いに甘かったことを自覚させられることとなる。

「よし、ラキラ、今日も張り切っていていこうか。まあ、あんまり張り切りすぎて昨日みたいなことになるのはゴメンだけだな」

「……………ああ」

明るく気さくに声をかけてくるユタ。

晃は、ジャックのことや本のが気になっていて、上の空の返事しかできないでいたのだが。

「落ち込む気持ちも分かるけどよ。そんなシケた面してたら水の女王様は不安がるもだぞ。明日はせめて笑顔で迎えてやるうや」

「……………今、何と言った？」

聞き捨てならないことをユタが言った気がして、はっとなりユタに詰め寄る晃。

「ん？ だから明日は水の女王様を笑顔で迎えてやるうぜって。…オレさ、水の女王様に会うの初めてなんだよな。何でも音に聞く美少女だって話じゃねーか。水の眷族として一度は会ってみたいなつて、そう思ってたんだよ」

変わらないテンションで話し続けるユタを脇目に、晃は半ば呆然と発せられた言葉について考えていて。

（明日……………だつて？）

早すぎる。

まず晃が思ったのはそのことだった。

その意味するところはつまり、ラキラの本に記された最後の一文、

その結果がこの物語に訪れるまで一日足らずしかないということになるわけで。

迷っているヒマはなかった。

一刻も早く、昨日見た闇の王ダアケシの騎士にして腹心、ダイサ・ニシエザに近付き、一人になった隙を狙って彼を倒し、彼の姿を借りて王に近づいて。

果てにはダアケシを……説得しなければならぬ。

それは、ジャックが当初口にしていた作戦で、晃にとってみれば無謀や無茶と言ふ言葉すら生ぬるいだろうことは分かっていたけれど。

「……やってやるよ」

そう思っただけで諦めてしまうことは、何もできない自分を自分で認めてしまふような気がして。

自然とついて出る、自分を叱咤するような呟き。

「ん？ 何だっけ？」

「いや、今日も張り切って仕事をするかと言ってみただけだ」

すぐ近くにいたユタには、今の呟きが聞こえていないはずはなくて。

それでも変わらぬ様子で気付かぬふりをしてくれるユタの気遣いを感じつつ。

言い訳じみたことを口にしてしまう自身に苦笑しながら、ユタとともに今日の仕事へと向かう晃だったが……。

しかし、急がねばならないことを改めて自覚した晃よりも早く。

物語は予想外の方向へと動いていた。

それは、夜にならなければ行動できないだろうと焦りを覚えつつ、いつものように、終わりそうにない掘削活動が続けていた、その時

だ。

「714号だったっけ？ 来なよ！ 君には別の仕事をあげよう！」  
ユタとともに少しづつ慣れてきた作業に打ち込んでいると。  
そんな甲高く、聞き覚えるある声がかかる。

「アキラ、呼ばれてるぞ」

それが、自分を呼んだのだと気付かず、振り向きもせずに作業を続けていた晃は、ひそめるようにユタにそう言われ、嫌な予感を覚えつつも声のしたほうを振り返る。

そこには、昨日会った、黒い翼を生やした大介によく似た男がいた。

「誰だ？」

なるほど、ラキラが怒った理由も分かる気がするなど、内心想う晃である。

話に聞いたときはそれほどでもなかったが、自分の名前ではない、しかも数字で呼ばれるのは、あまり気分がよくなかった。

だから、晃は慥然とした面持ちでそう呟く。

「誰だ、だって？ 相も変わらず無礼だなあ。このオレ、ダイサ・ニシエザに対する昨日の無礼、忘れたなんて言わせないよ？」

無礼は承知で呟いたその言葉だったが……返ってきたのは、元々沸点が低いのか、言葉面とは裏腹に、怒っている感じのダイサの声。

「ほら、昨日お前がオイタをした騎士様だよ。勝手につけられた名前に腹を立ててさ」

何を言っているのか一瞬よく分からなかった晃だったけれど。

ユタのそんな耳打ちでようやく状況を把握する晃。

「それで……何か用か？」

ここで再度騒ぎを起こすのは得策じゃないだろう。そう思つての晃の言葉だったのだが。

「何か用か、だって？ どこまでの生意気なやつだなっ！」

またしても怒りだすダイサと名乗った男。

見た目は大介に似ているのに、性格はまったく違うらしい。

その理由が分からないのは晃ばかりであったが。

さらにダイサは、いかにも人の悪そうな笑みを浮かべ言葉を続ける。

「別の仕事を与える、つて言つただろ？ 王直々のご命令だよ。ただ大人しくついでくればいいんだ」

「何だと？ まさか、昨日の騒ぎのせいか？」

「……」

その言葉に、流石に驚きを隠せない様子のユタ。心配げに晃を見やる。

晃は、そんなユタと顔を見合わせつつその意味について考えてみた。

昨日はお咎めなしなところに疑問を抱いていたが、そうではなかったらしい。

その仕事というものは、決断していいものではないんだろう。

反抗したもののへの見せしめ。

そう考えるのが妥当かもしれない。

「……分かった」

「アキラ!？」

「何、そろそろ穴掘りにも飽きてきたところだしな」

声をあげるユタに、大丈夫だとばかりに笑って見せ、晃はダイサの後についていく。

「待て！ オレも！」

それに、慌ててついてこようとするユタだったが。

「この仕事は714号だけに与えられたものだよ。ついてくるって言うならば反逆とみなすよ、101号?」

ダイサは嫌な笑顔の度合いを強め、そう言った。

「くっ……」

思わず立ち止まるユタ。

こんな脅しに屈するようなタイプには見えなかったが。

彼には彼で何かあるのだろう。

「すまない、晃」

「……気にしなくていい。自分の時いた種だ」

それにもしかしたら、夜を待たずとも王に接触できるかもしれない。うなだれ立ち尽くすユタに、そう呟いて見せ……晃は一人、改めてダイサの後についてゆく。

そして案の定。

連れてこられたのはあの壁の材質の違う、もともとあった地の根城の中心に程近い、そんな場所だった。

見えるのは、長く螺旋を描く、黒色の階段。

カーナたちのいた場所とは、違うようだったが。

「さあ、ここを上っていくんだ」

「……行って何をするんだ?」

反射的に晃がそう言うと、ダイサは一層不快感を募らせる、そんな笑みを強めて。

「行けば分かるよ」

そう言うだけ言って、そこから動くとはしなかった。

そのことで気付く、彼すらも闇の翼で操られている、その可能性。

何が本当で何が嘘なのか。  
ややこしいことこの上なかったけれど。

正直単独行動ができるのは晃にとってありがたいことでもあって。

「分かった」

晃はそう答え、一人階段を上って行って……。

それからしばらくして……辿り着いた階段のその終わり。

一歩踏み出した先に続くのは、真紅の絨毯だった。

顔を上げれば、かつてはカーナのものだったのだろう背を向けた玉座があつて。

その後ろには、大きな大きな黒い樹がある。

(いや、岩……あるいは鉱石の柱か?)

樹に見えたのは、伸び行く根や枝のように天井と地面をそれがつかえるようにして支えていたからだろう。

大黒柱。

その時漠然と浮かんできたイメージは、そんな感じだったけれど。

その柱が樹に見えたのは、他にも理由があつた。

それは……まるでたわわに実る果実のような、発破に使うあの赤い珠と。

「バツカやる！ ノコノコ来るんじゃねーよ！」

その実に混じるようにして、鳥かごのようなものに入れられ、ぶら下がっているジャックの姿があつたからだ。

そして……。

「本当に来るとはなあ」

聞こえてきたのは、どこか空気の抜けるような、やはり晃にとって聞き覚えのある声。

思わず視線を下げれば、いつの間にもやら正面を向いた玉座がそこにあって。

その玉座には、剛史によく似た男が、大きな闇色の翼をはためかせ、座っていた。

闇の王、ダアケシ・オノマ。

やはり彼がそうなのだろうか。

「王の御前だ。……頭が高い」

と、そんな晃の内心の思いを肯定するかのよう。

玉座に座る、剛史によく似た人物の側に控えている者が、そう言うてきた。

それは、クロイと言う名の、ダアケシにつくもう一人の騎士、なのだろう。

その騎士は、背中に誰よりも大きな黒の翼をはためかせている少女で。

その少女は、葵によく似ていた。

それは、半ばそう予想していたことではあって。

「……………」

「……………」

それでもその事実には晃が呆然としていると。

変わらぬ、射殺すようなクロイの視線が、晃を見据えてくる。

それが、ジャックの時以上に、彼女が葵そのものではないのかと、



そんな錯覚すら与えて。

「……ふ。仕事だと呼ばれて来てみれば、『地』の王とその屈強なる騎士様が手厚く出迎えてくれるとはな」

そんないつもの感覚に、皮肉にも落ち着きを取り戻した晃は、気付けば軽口にも似た、そんな言葉を紡いでいた。

「ははは。もうとぼけたって無駄よ。君が本物の『地』の王に会い、我らが『地』の国を乗っ取るうとしている……それを君が知っていることくらいなあ」

朗らかな口調のダアケシ。

それは、剛史とのなんでもないやり取りと変わらないように見えて、その実、焦りを増大させる重い意味がこもっていて。

「のんきに話を聞いてるんじゃないっ。ここはやくおおっ!?!」  
羽をばたつかせてジャックが何か言おうとした瞬間。

黒い稲妻がジャックを閉じ込めていた檻に走る。

ジャックは、そのままバタリと倒れ伏し、荒い息をつく。

「やめろっ、ジャックに手を出すな」

気の利いた言葉も言えず、ダアケシを睨みつけることしかできない晃だったが。

それに対するダアケシの反応はちよつと妙だった。

何だか闇の雷を受けて倒れたジャックに、ダアケシも驚いているように見えたのだ。

「ふ、ふははっ。流石に『時』の一族のものは捨て置けぬか『水』の王よ！ このものの命惜しくば、

我の言に従うがよいぞー!」

そして続く言葉は、どこか違和感を覚える、繕うようなそんなセリ

フだった。

だが、その事よりも。

「『水』の王……だと？ それは人違いだ」

そのあまりにも突拍子もない言葉に、思わず反論してしまう晃。

「ぬう。この状況でまだシラを切るつもりか。貴様が我らの目論見を知り、別人に身をやつしこの地に侵入してきたこと、気付かぬとも思っただかあ？ この翼ある所、我の目の届かぬところなどないのだ。貴様がこの時の物に変わる様、しかと目に焼き付けたわ！ 変化の法は『水』の王フェアブリッズ唯一無二のもの。最早言い逃れはできまいっ」

ダアケシの発するその言葉は、今までこの世界で晃が知りえたこととは全く違うものだった。

だが、『闇』の王であるダアケシがわざわざこうして姿を見せ、晃に向かってこんなありえないだろう嘘をつく意味があるのかどうかも甚だ疑問で。

晃は、ジャックにその真意を問おうと、そつとジャックを見据えた。

「ヒヒッ、そんなことがどーでもいいんだよ。この状況を見て分かるねーのかつ、いいからこっから早く逃げろ！ じゃないと爆発でっ！？」

バチィッ！ と、今度は音立て、白煙あげてジャックは倒れ伏す。

そして、そのままぴくりとも動かないジャック。

「やめると、そう言ったはずだぞ……」

自然と一歩踏み出し、同じ言葉を口にする晃。

半ば自覚のない晃の剣幕に怯んだ顔を見せるダアケシ。

だが、その言葉を真正面から受けるように、晃の前に立ったのはク

ロイだった。

それは、王を守る騎士の役目としては当然の行為だったのだから、  
れど。

「……………」

「……………」

お互い無言での睨み合い。

葵の黒い瞳の中に、微かに見え隠れする、様々な感情の波。

それは、かつてどこかで見たことがあるもののように、晃には思え  
て。

晃がその答えを見つけ出す前に、堰切ったようにダアケシが叫んだ。

「貴様はあ！ このオレ様に逆らえる状況じゃないってことを分か  
つていないみたいだなあ！」

そして、振り上げるように両手をかざす。

手のひらに生まれるは、闇色の波動。

はっとなって駆け出そうとする晃よりも早く、その闇色の波動はダ  
アケシの手を離れ、たわわに実る赤い珠へと吸い込まれてゆく。

するとその珠は、まるでイルミネーションのように赤い明滅を始め  
た。

瞬間、脳内に浮かぶ、赤い珠の爆発する光景。

それに巻き込まれるジャツクの姿。

「……………くっ！」

晃はいてもたってもいられなくなって。

目の前にいるダアケシやクロイの存在すら忘我し、大樹のような黒  
光りする鉱石でできた柱へと駆け寄る。

クロイは、驚いたようにそんな晃を見つめていたが。

「はははっ、これでオレ様の邪魔をするものはいない！」  
同じように呆気に取りられていたダアケシは、闇の翼をはためかせ、そのまま玉座の間から駆け出していった。

「……………」  
その後が続こうとしたクロイは階段の際に来て、一度だけ晃のほうを振り返った。

無防備に背を向けた晃は、その柱によじ登ろうとしている所だった。そんなクロイのことなど、気付きもせずに。

「……………」  
無意識にままついて出る、深いため息。

晃はそこでようやく背後に視線を巡らせたけど。

そこにはもう、誰もいなかった。

その、何かを諦めたかのような、淋しいと思えるため息が気になっただけだ。

それよりもまず、ジャックを助けなければならない。

晃はそう気を取り直し、なんとか大樹で言うところの枝葉の部分に到達すると。

刺さるようにしてくっついていて、ジャックの入った鳥籠を、片手で抱え込む。

後は爆発する前に下りるだけ、だったが。

「……………なっ!？」

気付けば晃は、恐怖を含んだ驚愕の声を発していた。  
数え切れないほどの赤い珠。

目の眩む光を発しているそのひとつひとつに、稚拙な目がついていて。

一斉に晃のほうを見ているのが分かったからだ。

もう、間に合わない。

悟ったのはそのことで。

水の王、闇の王の謀略により水の泡と化す。

刹那浮かんできたのは、ラキラの本に書かれた、そんな一節。  
そこからの数秒間を、晃はそれこそジャックが時を止めたのかと思  
うほどにゆっくりと感じていて。

「…………ふっ」

聞こえるのは、場違いとも思える晃の笑い洩らす声。

そんな晃は、片手で抱えていたジャックを、鳥籠ごと階下へと続く  
階段のほうに投げ捨てて。

その瞬間、赤い灼光が晃の目を焼いた。

続いてそれに追いつがるかのように。

音と言うものがこれほどまでに暴力的で強くなれるのかと、思い知  
らされるほどの爆音が晃の耳をつんざいて。

最後に届いたのは全身を包む熱気と痛み。

失われる平衡感覚と重力。

視界がものすごい速さで、ぐるぐると回り、弾ける。

そして……暗転。

晃がその暗闇に包まれる間際に見たのは、飛び散る水、だった……。

## 第22話

世界そのものをゆるがすような、そんな爆発。

マーサ・トクマは、幌馬車の中で身を震わせる。

直感的に嫌な予感がしたからだ。

「ヒルデ、今のは一体……？」

「私にもはつきりとは分かりかねます。どうやら『地』の国城内での爆発かと。姫はここでしばしお待ちください。私めが様子を見て参ります」

ヒルデ・レツジレインは、低くそう呟き、馬を下りて一人向かおうとする。

「待つてください！ わたしも行きますっ！」

「いけません、姫。あなたの身にもしものことがあれば『水』の国はおしまいなのですから。……すぐに戻ります。しばらくのご辛抱を」

マーサのことを決して王、と呼ばないヒルデは、建前上の礼儀として振り返ったが。

芝居がかったそんな言葉を残すと、すぐにマーサの元から立ち去って行ってしまふ。

「本当にそうなら、どうしてわたしは一人、なんだろうね」

自嘲めいた、マーサの呟き。

それは誰もが思うこと、だったろう。

国の王と呼ばれるものが、何故一人しか従者を連れていないのか。

王を、その命を賭してでも守らねばならぬ騎士であるはずのヒルデ

が、何故マーサの側を離れ、一目散に城へと向かったのかと。

だが、そんな事は口に出さずともマーサ自身が一番よく分かっている。

マーサ・トクマは、『水』の王の影武者であり、ヒルデもそれを知っているからだ。

それは『水』の国のごく一部の者が知る、秘匿されていた真実で。

『水』の民おろか、当の王本人ですらその事を知らなかった。

『水』の王……ラキラ・フェアブリッツは、影武者であるマーサ・トクマを守る騎士の一人。

そう認識されていた。

そのことは、王が生まれるよりも前から定められていることで。

戦う事をよしとしない『水』の一族の、最低限の守るための手段でもある。

王の影武者を王として崇めるその案は、『水』の国と永世に同盟を結ぶ『時』の国の発案だとも言われていた。

そして、『時』の国は、『水』の国の王が持つ万能の水の力の恩恵を受けるかわりに、『時』の王族のものを、本物の王に護衛をつけていた。

ヒルデは……その二人、ラキラとジャックの元へと向かったのだろう。

マーサ自身がそう感じたように、二人の危機を察知して。

あなたの身にもしものことがあれば『水』の国はおしまいなのです。



本当のところその言葉は、マーサに向けられたものではないのだ。だからこそ。

「辛抱なんてしてられるわけないでしょ」

マーサは、怒りにも似た強い意思を隠そうともせず、そう呟いていて……。

『地』の国が『水』の国に攻め入ってきて。

『水』の一族の気質と、『時』の一族の一言もあつて戦うことなく降伏したあの日。

『地』の国の王は、『水』の国の王……マーサを嫁がせることと引き換えに、『水』の国の平和を約束すると言ってきた。

マーサが本物の『水』の国の王ならば、また違った選択肢もあつたのだろうけれど。

結局、『水』の国はそれを受け入れた。

相手のことは全く知らなかったが、マーサが本物の『水』の王ではない以上、国として拒否する理由もなかったからだ。

しかしそこで、一つの事件が起こった。

偽りの王を真実だと頑なに、純粹なまでに信じていた一人の騎士が突然裏切り、マーサをその手に掛けようとしてきたのだ。

幸いにも、近くにヒルデがいてくれたおかげでマーサがその刃を受けけることはなかったが。

その裏切った相手が問題だった。

ラキラ・フェアブリツズ。

マーサについていた騎士の一人であると、本人すらそう思い込んでいた、本物の王だったのだ。

ラキラが王であることを表沙汰にできない以上、禁固刑は苦肉の策だったのだが。

ラキラはその場からも脱獄してしまった。

王を守る使命を持つ、ジャック・リヴァを連れ、『地』の国へと。

真実を知る数少ないものたちは、突然の謀反と出奔に、大いに焦った。

すぐに連れ戻そうと国の騎士たちを向かわせたが、当の王はその唯一無二の力である変化の力で別人と化し、行方が分からない。

そんな『水』の国に残された手段は、マーサの出立を早め、王の目的地である『地』の国へ向かうこと以外に手段はなく。

今こうしてマーサはこの場所にいるのだが……。

そんなマーサだけは、ラキラの一連の行動の意味をちゃんと理解していた。

二人は、王や騎士という身分など関係なしに、お互いの事を見ていたからだ。

マーサには、ラキラが刃を向けるフリをした意味も分かっている。

ラキラは、マーサを。

マーサはラキラを。

お互いに想いあっていて。

誰とも知れぬものに嫁がなければならぬことに、我慢ならなかったのだと。

そんなラキラの選んだ道は、国の枷にならぬよう、国を捨てることだった。

『水』の国の者である以上、それが弊害となって幸せにはなれないことを、分かっていたからだ。

ラキラがマーサを『地』の王から奪い返す。

そのことは、マーサも望んでいたことに間違いはなくて。

「待ってて、今行くから……」  
立場が逆になってしまったけれど。  
奪い返すのは今、なのだろう。  
マーサは、銀の懐中時計を祈り捧げるように握り締め、一人歩き出したのだった……。

ぼつり、ぼつりと音がする。

それは水滴の音だった。

何度目かのそれを瞼で受けたとき、ようやく晃は目を覚ます。

「……どこだここは？」

少なくとも現実の世界ではないだろう。

ゆっくりと辺りを見回すが、先は暗い闇ばかりが広がっていて。

どれくらい広いのかも分からない。

ただ起き上がった晃の膝の高さくらいまで水が張ってあるの感覚で分るくらい、だろうか。

「しかし……思った通り、うまくいったみたいだな」

ついさっきかどうかは、晃には分らなかつたけれど。

あれほどの爆発を受けたのにもかかわらず、晃には怪我どころか火傷の形跡もなかつた。

理由は単純明快。

晃は爆発の瞬間に、水の泡と化したのだ。

あの、ラキラの本に書かれた最後の一文、そのままに。

その事に晃が気付いたのは、ダアケシに『水』の王だと言われてすぐの事だった。

自分が『水』の王であるならば、その一文に書かれたその言葉を、言葉通りに受け取ればいいんじゃないのか、と。

初めてその一文を見た時は、『水』の王が『闇』の王の手にかかって……なんて思っていたけれど。

よくよく考えてみれば、『水の泡』ってちょっと意味が違うじゃないかと。

ただ、一発勝負のぶっつけ本番だったので、本当に水の泡になれるのか、晃にはちよつと心配だったのだが。

こうして未だ本の世界らしき場所にいる所を見ると、うまくいったのだろう。

「ふむ。水になったことで地面に染み込んでここに辿り着いた……か？」

それが正しいとすると、ここは玉座の下にあったスペースということになるわけだが、その時の晃は気付いていなかった。

水の泡と化した晃が、結構な時間を駆けて大地に染み入り、ここへやってきたことを。

この場所が、新しく作られた地の根城を支え覆うほどに広い、遙か地下深くの水脈であることを。

そんな晃がじつと闇を見据え続けてしばらく。

ようやく目が慣れてきたからなのか、わずかに辺りの景色が見えてくるようになった。

かなり高い天井。

どこまでも水の張っている地面。

そこから突き出し、あるいは垂れ下がるようにして……鍾乳洞らしき白灰色の壁が見えてくる。

「取り敢えず壁を目指して進んでみるか」

時間はかかるが……壁に手をつけて歩けば、いつかはこの先の見えない空間にも終わりが見えてくるだろう。

晃はそう思いつつ、しばらく進んで。

「……何だ、この音は？」

心なしか広くなって気のする薄暗がりのその先。

何かの息遣いのような、モーターの振動音のような、そんな音が聞こえてくる。

そしてそれに続く、何かが身じろぎして水の跳ねる音。

その気配は小さいものじゃなかった。

少なくとも晃と同じくらいはあるだろうか。

「誰か、いるのか？」

晃はそれが、意思あるものだとは半ば確信し、その声をかける。  
すると。

「ん〜？ ふああ……何？ お客さん？ 珍しいこともあるものね」

くぼみのように広がり、袋小路になっている壁。

そこに寄りかかる……いや、眠っていた影が、シンバルが響くような金属音の混じった声を発した。

金属音を除けば晃にとってひどく聞き覚えのある、少女の声で。

「一体どこの誰かな？ 顔を見せてちょうだい」

そして、影がそう呟いたとたん、辺りの壁がぼんやりと光を放ち始めた。

その事により、ようやく開いて認識できるようになって。

「あら？ 『水』の若い王さま、わざわざこんなところにごくろつごくるうだね」

そこには、天の使い……あるいは神様が着そうな羽衣と、細い針金のようなポリリウムのある銀髪をのぞけば、英理によく似た少女がいた。

「あなたは？」

「あれ？ 知ってて来てくれたんじゃないんだ。……ええと、私はエイリよ。一応はヴルツクの位の属する『金』の魔精霊で、この地帯の鉱石とか金属を管理……じゃなく司っているわ」  
ヴルツクと言う名が、この世界を創りし12の神の字の一つであることなど晃は知る由もなかったけれど。

「俺はア……いや、ラキラ・フェアブリズです。どうやら『水』の王、らしいですけど」

「フフ、何だか自分のことも分からないみたいな言い方ね、面白い人」

そのまま晃が名乗り返すと、エイリは可笑しそうに笑った。同時に擦ったような金属音が弾ける。

面白い、なんて言われたのは初めてかもしれない。

晃はそんな少しずれたことを思い、何と言ったらいいのか戸惑っている。

構わずエイリは言葉を続ける。

「まあ、それはさておき、また随分派手にやったわねえ……そりゃ金属は鉱石を削って加工しているんな役立つものに生まれ変わってナンボだけどさあ、あの火のやつはまずかったわね。この大地を支える礎を傷つけちゃったみたい。……このままだと、城ごとみんなぺしゃんこになっちゃっやうかも」

まるで悪戯を叱るかのような、それほど重くない口調。

しかし聞いている晃にとってはその程度では済ませられるわけがなかった。

それはつまり……連れてこられた『水』の一族やもともといた『地』の一族、はたまたこの地を乗っ取るうとしている『闇』の一族たちも含まれるのだろう。

「あ、始まったみたい。大地が震えてるわ。あの柱だけは傷つけちゃいけないって、ちゃんと忠告したつもりだったんだけどな」  
独り言のようなエイリの呟き。

続くのは、闇の中さざなみ立つのが分かるほどの世界の奮えだった。『地』の一族は、その事を分かっていたからこそ、あの場に玉座を据えたのだろうけれど。

『闇』の一族はそれを知っていたのだろうか？

もしそれを知っていたのなら、『闇』の一族の目的がは地の国の乗っ取り、などと単純なものではなく。

『水』の一族もるとも『地』の一族も滅ぼす、そんな算段だったのかも知れない。

あのダアケシがそこまでするかどうか、晃には量りかねたけれど。それよりもまず、皆を城から避難させる、その方法を考えなければならなかった。

そのための問題も多い。

まず上にいる者たちが、この自身がこの『地』の国が崩壊しかねない危機であることを、理解しているかと言ったことだった。

何せ、面と向かって聞いていた晃でさえ、俄かには信じがたいことなのだ。

それは、規模によっては多くの死者を出す地震が、普通はそれで死ぬような目に遭うはずがない、といういつも通りを望む結果からく

るものであることと、同じことだろう。

晃が言葉通りのことを伝えたとして、一体何人がそれを信じるだろうか？

『地』の一族が正気であったのなら、エイリの言う、今起ころうとしていることにも気付くかもしれない。

あるいは、敵味方関係なく、その者の発した言葉ならと皆が信じる……信じさせる絶対的な力を持つものがいれば、状況も変わってくるだろう。

晃はそこまで考えて、ある一つの答えに行き着いた。

それは、本当はいるかどうか分からないラキラとして、自身を客観的に見ていたからこそ、気づけたことなのかもしれないけれど。

「エイリさんに、一つ訊きたいことがある」

「ん？ 何かな？」

やがて口を開いた晃に、最初に英理と会った時と同じような、興味津々な笑みを浮かべるエイリ。

「城ごとぺしゃんこになる……それにはどれくらいの時間がかかる？」

ごく真面目に、エイリのセリフをそのまま反芻する晃。

一瞬、きよとんとしていたエイリは、

「『地』の神の癩癩が後三回起きたら……かな？」

ちよつと考えるような仕草を見せ、そう言っ

まさしくその言葉を聞いていたかのごとく。

大地の底から突き上げられるかのような感覚が晃を襲った。

それから、水面に大波がたち、まともに立っていることすら難しい



ような、激しい揺れが晃を襲う。

「今のが一回目、だね」

「くっ……」

一回目と二回目の感覚がどれほどのものかは分からないが、晃の思っていた以上に時間はなさそうだった。

間に合うのか？

そう追い詰められ、晃の焦りが頂点に達しようとした時、

「まあそれは、あたしがこのまま何もせずに見ていれば、の話だけどね？」

奏でるハーモニカのような息を吐いて、何だかからかうように晃を見上げてくるエイリ。

「……ってというかさ、こういう場合、いかにも何とかしてくれそうな雰囲気を持つてるあたしにこの危機をお救いください、何でもしますから！ って泣いて請うシーンじゃないの？ それなのにあたしを無視して一人で何か考えてるし……」

最後のほうは最早愚痴に近かったが、随分場違いな……まるでこの世界を本の世界として客観的に見ているような、そんなセリフを吐くエイリ。

晃ははつとなつて、まじまじとエイリを見据える。

そのからかっているかのような瞳の波からは、真意は汲み取れなかったけれど。

「何か方法があるなら頼みます」

「何でも……あたしの願いを叶えてくれるのなら」

「……分かりました」

この状況で首を横に振れるわけがなく。  
あえてのこの人の悪い笑みに、渋い顔を見せつつも頷くしかない晃  
がそこにおいて……。

「商談成立了。それじゃ、いったん上にあがりましょ」  
晃は、朗らかなその言葉に頷いて。

まるで水面を歩いていることを感じさせない滑らかな動きで、さっ  
さと闇の中を歩いていってしまうエイリの後に続いたのだった……。

## 第23話

闇の中、膝ほどもある水の足場を掻き分け、晃達が辿り着いたのは比較的天井の低い、先ほどエイリのいた場所とは異なる、行き止まりの場所だった。

「いつぶりだろ、外に出るのって」

そこにあっしたのは、空気孔だろうか。

かすかに感じる風の流れ。

「ここからならラキラさんも上れるでしょ、それじゃ、出発っつ」

エイリは晃の返事などお構いなしにそう言っと、鍾乳洞に見えた何かの鉱石でできた灰色の壁に手をつく。

「……っ！」

すると、エイリは水面に潜り込むかのようにかき消えた。

おそらく、晃が色々なものに変化できるように、それがエイリの力なのだろうけど。

何も言わずにその力を使うあたり、なかなかエイリも人が悪いよっで。

「俺も行くか」

晃も流れる水をイメージして、その人ならば到底通ることのできなような狭い空気孔を上ってゆく。

もうすっかり当たり前のようにラキラの力を使っていることに、ちよっと苦笑しつつ。

それから辿り着いたのは、爆発の中心地。

まるで黒い稲妻に打たれ、時を止めたかのごとく、大きな亀裂をそ

の身に走らせた柱のある場所。

周りを取り囲む黒色の岩壁は爛れ溶け落ちかけ玉座は大破し、ジャックを逃がした階段も、そのほとんどが塞がっていて先が見えない。そして極めつけは、間断に続いている不気味な地響き。

「うーん。思ったよりちょっとひどいかな……。やるしかないけど」  
目前の柱の様子を見て僅かに逡巡して見せたエイリだったが、すぐに自身に言い聞かせるようにそう呟き、ゆっくりと柱に近付いてその手を触れさせる。

その瞬間、沈静化する地響き。  
自らで亀裂の部分を修復する。

その事を悟った晃は、ただその様を見つめていたが……。  
エイリは半身ほど身体をめり込ませた所で、晃のほうを振り向いた。

「言うておくけど、安心するのはまだ早いわよ。これは応急処置なんだからね」

その言葉は、大げさではないのだろう。

平然そうにはいるが、その額には玉の汗が浮かんでいたからだ。

「まさか、自分の身を犠牲に……？」

晃が嫌な予感がして、思わずそう問いかける。

すると、エイリは言葉通りまさか、とでも言いたげに笑って。

「バカね。それじゃああなたになんでも言うこと聞いてもらう件、意味なくなっちゃうじゃない。

そこまで無茶はしないわよ。ヤバイと思ったらこの辺りの鉱石に逃げ込むわよ、当然でしょ。

だからあなたはそれまでにこの城の中にいるものたちを避難させなくちゃいけないわけ。

……できるかしら、あなたにそれが？」

決意を問うように、エイリは晃を見つめてくる。

「愚問だな、俺を誰だと思っている」

無茶をしないなんていう言葉ほど、あてになるものはないなど、内  
心思う晃。

ちよつと芝居がかつた様子で口にしたその言葉は、根拠の全くない  
でまかせ……ではなかった。

『地』の国とそこにいるものたち全てを救う方法。

その最後の欠けていたピースを、今まさにエイリが埋めてくれたの  
だから。

「その言葉に偽りのないこと、期待しているからね……？」

エイリは、晃の言葉には破顔して頷き、そう言い残すと、身体の全  
てを柱の中へ入り込ませる。

しばらく波紋が浮かんでいた柱はやがて亀裂を塞ぎ、辺りに静寂が  
満ちて。

「……今度は俺の番だな」

晃は誰にもなく呟いた後、そのまま瞳を閉じ、あるイメージを心  
内に浮かべた。

それは、三度目の、『水』の神への変化。

内に万能の『水』の力を秘めた水竜の発現。

(来いっ！)

まずはこの地を覆いたゆたう、水を呼び集める。

すると、『水』の王の呼びかけに応えんと、『地』の国に棲まう水  
たちは一斉に足並みを揃え、晃の元へ集まってくる。

たちまち、身体が細かく分解され、再構成されていく感覚が晃を襲  
う。

白濁していく、意識。

(みんなを……助けるんだっ！)

そして、そんな決意のこもった言葉とともに。

晃の意識は、深く遠い水の底に、沈んでいったのだった……。

「いつまでも寝てんじゃねえーっ、このタコスケがあーっ！」

一体どれくらい意識を失っていたのか。

そんな吠えかかるような……ジャックの声に呼び起こされるようにして、晃は目を覚ました。

身体を包むのは、夏草の感触。

ほんのりと暖かな日差し。

「……ジャック、無事だったんだな」

「無事だったんだな、じゃないっての！死ぬかと思ったぞ、全く

無茶しやがって！

……おいみんな〜！ラキラのやつ目を覚ましたぞ〜っ！」

ぶちぶち文句を言っていたジャックにはどこも怪我はないようだ。

そう叫びつつ辺りを飛び回る。

それにつられるように晃は起き上がり、ざっと辺りを見回してみた。

そこは、『地』の国の外……空の見える地上らしい。

晃の見たことある人ない人も含め、たくさんの人たちがいた。誰も彼も一様にして水浸しの状態で、何が起こったのかも分からない様子で呆けているのが分かる。

なかでも注目すべきは、『地』の国の人々だろう。

かつてその背にあつたはずの『闇』の翼が消えていた。

どうやら、晃の目論見はうまくいったらしい。

晃の目論見……それは、自分の力を使い、地の根城全てを水で覆うことだった。

癒すことはあつても、傷つけたり呼吸を奪うことのないその水を。

竜の姿をした水は、蟻の巣のように大地に蔓延る城内中を駆け巡った。

爆発による怪我、崩落による怪我、背中に生えた『闇』の呪い。

これらを全て巻き込み癒し、洪水となって地上へと飛び出す。

それは、杞憂だった水が城全体に行き渡るまでの時間はエイリが作ってくれたことと。

幸いか定められたものなのかは分からないが、それを可能にするだけの膨大な水もちゃんとおったからこそその結果ではあるが……。

「やあやあご苦労。ラキラならやってくれらと思つてたよ！」  
不意に聞こえてくる、そんなユタの声。

晃が顔をあげると、そこにはユタと、何故かスマレがいた。

それは、現実世界では見慣れた光景だったけれど。

「ユタ、あまり騒がないで下さい。今日『地』の国を救ったのはあくまで『水』の王なんですからね」

それはつまり、本物の『水』の王がラキラであると明かさないうままにしておく、ということなのだろう。

本当のことを目で見て知っているスミレはともかく、ユタがそれを知っているのはどういいうわけなのか。

「二人は知り合いだったのか？」

それを知る意味も含めて、晃はそんな事を聞いてみた。

「おお、もちろんよ。このユタ様の可愛い可愛い妹さ。事情はスミレから聞いた。……言っておくけど、妹はやらんぞ」

どうやらユタは、妹のスミレのことが心配でこの地にやってきていたらしく、相方の事情を知ったジャックが、二人の連絡役をしていたらしい。

晃がスムーズにジャックと連絡が取れたのも、ユタのおかげだったというのは驚きだったけれど。

「ただの知人……いや他人ですから、あまり気にしないでいただくと、私としても助かります」

スミレは、そんなユタの言葉をだいたい無視して、晃の問いに答える。

その全く相手にされていない風と、いじけて地面にのの字を書いている様が、やっぱり豊と香澄に似ている気がして。

晃は苦笑を浮かべて、合わせるように言葉を続ける。

「カーナさんは無事か？」

「はい、おかげ様でばっちりご健在です。今、『闇』の人たちの事情を聞いているところなんで、ちょっと手が離せないみたいなんです」

「事情？」

「ええ、どうやらですね、『闇』の一族のみなさんも、あの『闇』の翼に精神を乗っ取られてたみたいなんです」



スマレが言うには、ダアケシ・オノマを初めとする『闇』の一族のものたちは、自分たちが何故ここにいるのかも分からない状態なのだという。

それほどまでに強い呪いがかかっていた。つまりはそういうことなのだろうが……。

今回の『地』の国の乗っ取りから始まった、一連の出来事。それも彼らの仕業ではなかったとすると。真の黒幕が別にいるのかもしれない。

「『闇』の人たちはどこにいる？ 会って話をしたいんですが……」

「あ、奥の日の当たらない森のほうにいますよ、案内します」  
不意に浮かんだのは、何かを渴望し、訴えるかのようなクロイの瞳だった。

彼女なら、何か知っているかもしれない。  
そう思つて、スマレの後に続こうとして。

「ラキラ様っ！ ご無事でしたかーっ！」

突然、暑苦しくも芝居がかつた、そんな聞きおぼえのある声がする。スマレを制して、ラキラがそちらに視線を向けると、そこには白銀の甲冑をガチャガチャ揺らしながら突進してくる、豪華な尾ひれつきの秀一……いや、秀一によく似た人物がいた。  
秀一似の騎士は晃の目前でぴたりと停止し、跪く。

「……」

しかし当の晃はそんな彼に困惑するばかりだった。

確かに秀一に似てはいるが、晃にとっては初対面に等しかったからだ。

そんな晃のことを察したのかどうかは分からないけれど。

旋回しつつ戻ってきたジャックが、そのまま足で跪く騎士のこめかみを、蹴りつけた。

「な、何をする、『時』よ！」

「うるせーっ、目立つ真似すんなっつたる！　って、それよりマーサの姿がないってのはどういうことだよ！」

詰め寄ろうとする騎士に、ジャック自身も興奮しているのか、大声でそう怒鳴り返す。

「馬鹿なっ、いないだと？　そんなはずはないっ、この先は危険だから待っているよう、言っただけ！」

「ボケ！　それでおとなしく待ってんなら騎士なんていらねーんだよっ！」

たちまち、言い合いを始める二人。

マーサ。

晃には、その名前に当然聞き覚えがあった。

それは、ラキラの本で見た、『水』の王だったものの名前だ。

そしておそらく枢美でもある。

そこまで考えて、晃はラキラが元々持っていたものを何一つ持っていないことに気付いた。

旅の必需品である道具袋と。

その中にあつたこの世界に来るきっかけとなった本。

そして……首にかけていたはずの懐中時計をも。

「マーサって『水』の女王様の名前じゃなかったっけ？」

「正確には影武者だと思えますけど」

と、取っ組み合いになりかねない二人を傍目で見ていたスミレとユタの、何気ない風の会話が聞こえてきて。

まるで、雷に打たれたかのように晃の全身を駆け巡る、嫌な予感。

「くっ！」

晃は溢れる焦りを隠そうともせず、秀一に似た騎士に詰め寄る。彼女が待っていると、一人残されて待っているわけがない。

ラキラとマーサがお互いを想い合う仲ならば、マーサは……いや、枉美はきつとラキラを探そうとするだろう。

自らが『水』の国の王ではないことを知っている彼女ならばきつと己が危険など顧みず。

晃がほとんど確信してそう思っていて。

「まさ……マーサはどこで待っていた！」

晃の物凄い剣幕にのまれかけた騎士……ヒルデだったが。

ヒルデはラキラがマーサをその手に掛けようとし、それを止めたときから二人の関係にうすうす気付いていたからこそ、今更ながら襲ってくる、マーサを一人にしたことへの激しい後悔。

「はっ！ こちらです！」

しかし、ヒルデは今なすべきことを最優先するために、そう言って晃を先導する。

その後に、ジャックたちも続いて。

辿り着いた先にあったのは、馬だけが残された無人の馬車だけだった。

「ぐうつ、私は、とんだ失態をつ……」  
悔しげに自身を責めるヒルデ。  
それを見た晃は、きつと顔を上げて。

「頼む。皆は城の周りを探してくれ！」  
ついてきていたジャック、スマレ、ユタ、そしてヒルデを見据え、  
頭を下げる。

それに黙って頷き、駆け出す4人。

何言うことなく、力を貸してくれることが、何だかとても嬉しかったけれど。

すぐに晃も彼らとは別の方向へと駆け出す。

それが、ラキラを求めてマーサがたどった道と同じだったことは、  
晃自身知る由もなかったが……。

晃が辿り着いたその先は行き止まりだった。

しかし、そこはかつて地の国へと入るための正規のルートとは違う、  
自然の入り口があったのだらう。

今は瓦礫に塞がり、見る影もないが……晃は、この先にマーサが、  
柗美がいるかもしれないと、目に入った瞬間に、そう思った。

彼女がいるのは外ではなく、この奥なのだ。

だがこの先は、晃以外には危険だということも確かだった。  
だから晃はさつき、外を探して欲しいと、そう言ったのかもしれない。  
い。

もしかしたら、ジャックあたりはその事にすら気付いていたかもしれないけれど。

「待っている、今助ける」

それが杞憂だったらどんなにいいかと。

そう思いながら、晃は4度目の『水』の神への変貌を遂げた。  
どんな狭い隙間でも通れる水となって。

最早土の中に等しい地の根城を進んでいく。

大地に染み入るように、みるみるうちに城中に広がっていく水。  
それにより目という媒体を失ってしまった晃だったが。

その代わりに水は触れることができる。

くまなく探せば、いずれは見つかるだろう。

晃は、とにかくひたすらに。

マーサを……榎美を探すことを念じて。

まるで水そのものに溶けてしまったみたいに。

晃はその意識を、深遠の底へと沈ませていったのだった……。

## 第24話

ラキラとマーサが互いに揃いで持つ懐中時計。

それには、ある一つの効果があった。

その内に、お互いの写真を入れておくことで、どんなにはなれていてもその場所が分かる……そんな効果が。

マーサはその時計の力を使い、不気味な静けさの包む『地』の国を進んでいったのだが。

いつしか、天地がひっくり返るかのような揺れが、マーサを襲った。何度も危険な目に遭いながらも、やがて辿り着いたのは……黒い鉱石でできた大樹のある場所です。

「あ……」

しかし、そんなマーサを待っていたのは、愛しい人の控えめな笑顔ではなく。

焼け焦げた、鎖のちぎれた懐中時計の残骸、ただそれだけだった。

間に合わなかった。

そう思ったマーサは……懐中時計の残骸を掻き抱いて、そのままそこへしゃがみこんでしまった。

じわじわと遅い来る絶望感。

それは涙となってマーサの頬を伝っていく……。

「……………」

無常な結末に打ちひしがれ、どれほどの時間が経ったのだろう。気付けば襲い来る地震は、立てぬほどにその揺れの強さを増し、崩壊を始めた天井が雨のように降ってくる。もう、助からない。

マーサは漠然とそう思った。同時に、それならそれで別に構わない、とも。

「ラキラ様のいない世界なんて……」

一体どんな意味があるう。

マーサが……そう思った時。

思い込みの激しいところは似てるのね。

どこからか、そんな声が聞こえた気がして。

はっと顔をあげるマーサに迫る、巨大な岩壁の塊。

マーサは、ただそれを見つめていたが……。

その岩壁が、マーサを押し潰すことはなかった。

突如流れ込んできた水……この場に入りきれないほどの大きさの竜が、間一髪でマーサをさらったからだ。

竜はマーサを守り、包み込むようにその体内へと、マーサを取り入れる。

一瞬、何が起こったのか分からなくなったマーサだったけれど。

すぐに気付いた。

そのいたわるように優しく包む水が、愛しき人、そのものであることを。

「ラキラ様……」

その名を呼び、溢れるはさつきまでとは別種の涙。

それは竜に混ざり合い、昇り上がってゆく軌跡に虹を撒く。

目指すは光溢れる地上。

マーサは、天にも昇る気持ちとその身に受けつつ。

目映い未来の待つ光のその先を信じて。

自らのすべてを委ねるように、その瞳を閉じたのだった……。

そして……。

柩美は、いつものように現実の世界へと戻ってくる。

そこは、薄暗い、見慣れた土蔵。

本の世界へ出発した時と同じように、隣に晃がいる。

しかし、まだ帰ってきてはいないらしい。

柩美はそんな晃を見つめながら……今回の旅のことを思い返してみ  
た。

今でも、柔らかく、優しく包み込む水の感触が残っていて。

「……………」

それは、柩美が初めて感じた世界の残滓だった。

例えば、今までずっと見てるだけにすぎなかったブラウン管の向こ  
うの恋人が、世界を飛び出して抱きしめてくれるかのような……

…そんな感覚。



だが、そんな事を考えてしまったことを否定するかのように、  
榎美は首を振る。

それは所詮、作り物の世界のお話なのだ。

本の世界で語られる物語に、意味などない。

あるのは、作り物の世界を、当たり前前の現実として受け入れるよう  
になる……

その結果だけだ。

なのに。

目の前にいる晃は。

その意味のないはずの世界を。

本気で生きていた。

全力で感情をぶつけてきた。

旅として冒険として、心の底から楽しんでいて。

榎美はそれに、ただ戸惑い……それ以上に涙出るほどの喜びを感じ  
ていた。

この本の世界と自分自身に、初めて向けられる想いを感じて。

本当は一緒に楽しんで、こんな自分を受け入れて欲しい。

そんな気持ち自分が自分にあつたことに気付かされて。

そんなのは嘘だって。

騙されたらいけないって分かっているのに、榎美は溢れる感情を止  
められそうになかった。

「……終わった、のか？」

しかし、それでも。

帰ってきたらしい晃の、熱に浮かされたかのようなぼうつとした声が聞こえてきて。

柗美は、その内心の感情をひた隠し、押し殺してそれに答えた。

「うん、めでたしめでたしのハッピーエンドで無事に終了だよ。うまくいったね」

それは、いつものお決まりのセリフ、だったけれど。

「そうだろうか？ どうもじっくりこないだが……」

返ってきたのは、何だかあまり納得のいっていないようなそんな言葉だった。

それは、柗美の知る、今までの誰とも違う反応だった。

再び振り返す、淡い期待感。

まるで本当に、ただ物語にのめり込み、楽しんでいるだけのように柗美には見えて。

「お話の終わりって結構あんな感じだよ。わたしも結構思うもん。せっかくハッピーで終わってるのに、何でこんな終わり方中途半端なのかなーって。……だいたい7割くらいのお話が、そんな感じかな」

ついて出たのは、いつもなら口にすることはなかっただろう、本の世界に触れ、いつも実際に思っている柗美の本音だった。

「……そういうもの、か。納得するのにはちょっと時間がかかりそうだが、まあいいか」

対する晃は、自分に言い聞かせるみたいにそう呟いた後、不意に腕時計に時間を確認する。

「10分程度経っただけ、か」

そして、深い懊悩の混じったため息を吐き、じっと柗美を見た。

何かを言おうとして、止める。

その繰り返し。

ただ向けられるその蒼の潜んだ瞳だけは、見た目のピリピリした雰  
囲気とは違ってどこまでも澄んでいて。

何もかも見透かされてしまいそうで。

柗美は恐怖を覚える。

敵意に対しての恐れは少なからず過去にもあったが。

それは、そんな恐怖とは別種の何かだった。

いつになく葵がうるたえ、動揺していた気持ちを、身に沁みて分か  
らされた柗美だったけれど。

「まだまだ全然時間あるね。また新しい本、探しに行く？」

そのときはまだ、晃に対する怖いもの見たさにも似た期待感の方が  
大きかったから。

柗美は笑顔でそう聞いた。

そんな柗美を、何言うことなく見つめていた晃だったけれど。

「……少し疲れたみたいだ。何せ本の世界を旅するなんて初めてな  
ものでね。新しい本はこちらでも探しておくから、今日は帰るとす  
るよ」

「……っ」

帰ってきたのは、かつて何度も聞かされた……そんな柗美の期待を  
見事に打ち破る、そんな言葉だった。

そのあまりのショックに、柗美が呆然としていると。

晃が頭を振り、またの挨拶を残し、去っていく。

その、ひどくあっさりとした様子に、ろくに挨拶もできずに立ち尽  
くす柗美。

破られた期待が、みるみるうちにしぼんでいくのが分かって。

晃なら、もしかしたら葵のことも榎美のことも本当の意味で救ってくれるかもしれない。

そんな幻想は、言葉通りやはり、幻想だったのだろう。

「またなんてないんでしょ？ 晃くんの嘘つき」

それは、榎美が一度口にした言葉だった。

あの世界に共に行くことを約束した直後の、晃の裏切り。

それは、榎美には晃が嘘をつくなんて思えないくらいに、世界を旅すること楽しみにしてくれているといった感情が伝わってきた矢先のこと、だったから。

榎美は、その約束が破られるなど、全くこれっぽっちも思っていないなかった。

嘘を本当と思わせるほどの、嘘でも構わないと思わせるほどの、神をも欺く演技。

そんな才能を持つ人物であると、秀一に自慢げに話を聞かされるまでは。

榎美がそのとき感じたのは、その力への恐怖と、使わないことを決めていたはずの怒りと悲しみの感情で。

榎美は知っている。

『また』と言うその言葉が、この世で最も信じられない言葉であることを。

いや、それは知っているというよりも、そう植えつけられたと言ってもいいのかもしれない。

別に晃を責める筋合いも資格もないことくらい、榎美にだって分かってはいたけれど。

それは、榎美が自分で思っていた以上に、晃に対し期待をしていた、その証でもあって。

そんな榎美は、知らなかった。

広がるほとんどが赤を締める紫色の空と。

ざわざわざわめく、庭の芝生を裂くように続く、榎美の家に続く道。

そして……そこにある飛び石を、肩を落として歩く榎美自身が。

変わらないはずの現実が変わってしまった……その結果の産物であることに。

それから榎美は。

自分と英理の暮らす小さな家には戻らず、そのすぐ隣、『黒彦』と書かれた表札の先にある、古く大きな屋敷へと入ってゆく。

だが……。

榎美はいくらもかからぬうちに、転がるようにして屋敷を飛び出してきた。

「葵ちゃんツ……どうしてっ!？」

そして……分からなかったはずの怒りと悲しみを、惜しげもなく晒け出し。

搾り出すようにその名を呼ぶと、榎美は駆け出していった。

あの古びた土蔵の中。

その先にある世界へと、もう一度……。



## 第25話

柗美にまたの挨拶を済ませ、土蔵から出た晃だったが。

「何だ、これは？」

青空であるはずの空が、ほとんど赤の割合が占めている紫色に見えた時。

始めは疲れすぎて自分の目がおかしくなっているのだと晃は思った。しかし、こすつてもその赤は消えない。

一体何が起こつたんだと空を凝視していると……ふと思い出す光景。それは、どこかで見た終末の赤い空で。

「世界は終末へと確実に向かっている……ということか？」  
それはおそらく、あの旅の世界が開かれることによつて。  
重苦しく、自分に問いかけるように頷いて……晃は歩き出す。

世界の変容。

それは、唐突なことではなく。

確かにあつたのだろう。

晃はその手のひらに呪いも印もなしで水蒸気を生みだし、その場に虹を発生させながら、一人東雲高校へと向かう。

目指す目的地は、学校の図書館だった。

疲れたから帰ると言つたその言葉は、当然真実ではない。

あの本の世界が、柗美の創り出したもので、両親の死を否定する世界だという英理の言葉の真意を確かめたかつたからである。

そもそも思い出ししてみれば英理は一度も口にはいなかった。  
現実の世界を浸食する本の世界を創り出したものを。  
事故で両親を失った英理の従妹の少女のことを。

柗美である、とは一言も。

中学校の頃の記憶、晃自身に与えられた使命。

それらを慮れば、あの本の世界……《フェアリー・テイル》を創り出したのが誰なのか、おのずと答えが出てくるわけで。

「やはり……そうか」

図書館に辿り着き、英理の遭った事故の記事を見て……晃は唸った。

地方欄のさほど大きくない記事。

トンネル内の事故。

7人乗りのワンボックスカーに乗っていた6人……二組の家族は、横転したトラックに突っ込んで、前方の席にいた4人が死亡した、と書かれている。

助かったのは後部座席にいた二人の少女。

一人は小船山英理。

そしてもう一人は、黒彦葵。

柗美のことなどどこにも書かれていない。

亡くなったのは、英理と葵の両親で。

つまり、英理の言う本の世界を創り出した従妹の少女とは、葵になるのだろう。

だとするなら、柗美は一体どこの誰なのだろう？

英理を姉と慕う少女。



両親を捜し求め、本の世界を旅する少女。

晃には、柗美が何の理由もなく、そこにいるとは到底思えなかった。

同じように、この本の世界に晃を誘ったことも。

柗美がそこにいるのは、きっと意味があるはずで。

それを知るには、当事者が本人に聞くしかないのかもしれない。

とりあえずコピーだけはしておこうと、晃が腰を浮かせたところで。

「十夜河君！ 葵を、葵をかえしてっ！」

「なっ……っ！」

突如背後からかかる、悲鳴のような少女の声。

しがみ付かれるような、その感触。

驚きのけぞり、振り向くとそこには……奏子がいた。

「お願い、お願いしますっ、葵をっ……っ！」

しまいには、縋り付くようにして泣き出す。

思いも寄らぬ奏子の言葉と行動に、葵への強い思いを感じるとともに。

何事かと騒ぎ出す、図書館にいた人々。

「わ、わかった、落ち着いて。落ち着いて話し合おう！」

晃は慌てて弁明するようにそう言って、すがり付いて離れようとしていない奏子を、そのままほうほうのていで引っ張っていく。

そして……。

休日でもまばらな食堂のオープンテラスまでやってきて。

自販機の紅茶を奢り……しゃくりあげる奏子が幾分落ち着くのを待ってから、晃は口を開いた。

「葵を返せとは、一体どういうことだ？ いや、そもそも何故大屋さんは俺にそんな事を言うんだ？」

「だって、葵からこんなメールが来たから……」  
真意を問うため、しっかり言葉が伝わるよう、ゆっくりと噛み締め  
るようにそう言う。

奏子はおずおずと携帯を取り出し、その文面を見せてくる。

そこにたった一言、『さよなら』の文字。

いたってシンプルで分かりやすい、別れの言葉。

しかしそこには、当然その別れに、晃が原因であるなどは一言も  
記されていない。

「どうして、それが俺のせいだと思ったんだ？」

晃は、自身ができうる限りの柔らかい言葉でそう問いかける。

晃のその態度に、奏子にも晃がちゃんとその話を受け止め、聞く  
としていたことが伝わったのだろう。

「だって、十夜河君は、葵の命をねらう刺客……正義の味方なんで  
しょう？」

返ってきたのは、かつて柗美も口にしていたもので。

たちの悪すぎるタローの冗談だったはずなのに、奏子は疑う様子も  
なく信じているようだった。

それは同時に、狙われるだけの理由が葵にはあるということになっ  
てしまうわけだが。

「何度も言うようだが、どうしてそう思ったんだ？ よければ詳し  
く知りたいんだが……」

もしかしたらそれこそが、葵が晃を嫌う理由なのかもしれない。  
それは、高校に入っただけで知りたかったことだった。

「大屋さんが言うような……葵ちゃんに対しての敵意は、俺にはな

いよ」

だから晃は、念を押すかのように、そう言って笑う。

それを見た奏子は、ひどく戸惑っていた。

自分は何か勘違いをしているのかもしれない。

あるいはとんでもない言いがかりをつけているのかもしれない。

初めて見る控えめな笑顔に、自然とそんな気がして。

「私が知っている範囲でなら、ですけど」

「ああ。それで構わない」

そう言ってくれるのが嬉しくて、だけど晃の口について出るのはそんなぶつきらぼうな言葉で。

榎美とは逆だけど自分だってよっぽど欠落しているじゃないかと、内心苦笑する晃がいたけれど。

それから。

語る奏子のその内容は、三ヶ月も近くにいたのにもかかわらず、気付かなかったことが悔やまれるほどに非現実なことだった。

いや、そこにあるのだからそれはもう紛れもない現実なかもしれないけれど。

「私がそのことを知ったのは中学にはいつてすぐのことでした……」  
それは、晃がこの地……東雲にいなかった頃の話。

その頃の葵は、今以上に他人を寄せ付けない、そんな雰囲気を持っていて。

たまたま隣に席になった奏子とも、ほとんど会話することはなかった。

だがある日、何日か葵の休みの日が続いて。

家の都合で隣町から引越してきたばかりの葵には、他に親しい人間がいなかったこともあって。

そこで、隣の席というよしみもあって、奏子がそんな葵にお見舞い兼、プリントを渡すために黒彦家に足を運んだのだが、家にいた葵の祖父に、葵は土蔵にいと、そう言われて。

「その場所で、私はみてしまったんです。葵が本からでてくるのを驚きに言葉を失う奏子。

その姿を見つける葵。

奏子以上に葵は驚いていたけど。

『あなたは刺客じゃないみたいね。……今見たことは忘れなさい。命が惜しくなかったらね』

とてもとても疲れている、淋しげな声で奏子から顔を背けて去っていくようにする葵。

それが、言葉とは裏腹に助けを求めているような気がして。

「それから、そんな葵が気になって、なんども葵の家にあそびにいっただんです。迷惑かな、とも思っただけど、なんかくやしかったから」

「……………」  
大人しそうに見えて、肝が据わっているというか、私の強いタイプらしい。

それは、なかなかできるものじゃないんだろう。

自分勝手と言われればそうかもしれないけど、少なくとも晃にはできなかつたことだった。

「しつこくつきまとう私のことを、葵は口ほどに邪険にはしません

でした。たぶん、だれかに話したかったってこともあるとは思いますが……そんなことをくりかえしているうちに、葵のほう折れてくれて、話してくれたんです。……葵の中にある、あの力のことを」

葵の内に潜みしその力……《フェアリーテイル》。

増えすぎた人間たちを滅するために地球そのものが送り出した呪いの力。

それは、異世界の扉を開き、現世と異世界の境界線をなくすという。そこに足を踏み入れたものが、その世界を肌で体験し、知ることによって。

その本の世界が作り物ではない、当たり前のものだと認識することによって。

放っておけば、その当たり前前は次々と世界を変え、世界は混ざり合い、滅茶苦茶になる。

様々な世界の幻想がぶつかり合い生まれる混沌。

そして現実の世界は……人間の暮らす世界は、やがてその軋轢に耐えられず滅んでしまう。

それは、晃がいつか垣間見た赤い空の終末へと世界が、向かっていくことを意味していて。

「葵は、その力をじぶんではどうすることもできなくて……こまっけていました。いつのまにかもっていたその力の、止め方がわからなかったんです。……そんな葵のもとにあらわれたのは、葵の命をねらう正義の味方、でした」

真剣な眼差しで、晃を見据えてくる奏子。

冗談みたいな話なのに、晃は笑う気にもなれない。

何故なら、実際世界は……どんどん変わっていたからだ。ほとんど誰にも、当たり前として気付かれないままに。オープンテラスを照らす赤に近い紫色の空が……如実にそれを示している。

「葵は私がそのことを知るずっと前から、そんな正義の味方さんたちと戦ってきたんです」

そんな葵の近くにいたことで、奏子自身も危険な目に遭う、なんてこともあつたらしい。

「……それで、その正義の味方とやらが今度は俺だと、そう言いたいんだな」

今の話の流れで導き出される答えはそれだろう、とばかりに晃はそう訊いてみる。

「はい、だって寂時さんがそう言ってたから……」  
すかさず返ってくる言葉に、ここ最近で一番のイヤな予感を覚える晃。

「待て待てっ……あいつはそういう人が迷惑するだろう嘘を平気でつくやつだぞ？　あまり鵜呑みにするものじゃない」

「でも、寂時さんもその刺客のひとりで、『今までのようにはいかない、十夜河晃が来ればお前らはもう終わりだ』……って」  
とんでもない言いがかりに詰め寄らんばかりの晃に、おののき、泣きそつになつてそんな事を言う奏子。

はっと我に返り、合間を取った晃だったけれど。  
思わず出てくるのは、力の抜けたヘンな笑い。

(……刺客って、あの馬鹿)

きつと、そう言われて面白いからノツたのだろう。

人の負の感情を煽って喜ぶ、まさしく悪魔のようなやつなのだ。

そんなデタラメを吐くほうもたいがいがだが、それを信じる奏子や葵もたいがいだらうと、ちょっと思う晃である。

まあ状況が状況だし、言葉だけで判断すると意外とタローは嘘を言っていないので、仕方ないのかもしれないが……。

「もしかして、葵ちゃんが俺を嫌ってたのは……」

「うん。そのせいだと思います。嫌ってるっていうより、警戒していたっていうか、怖かったんだと思いますけど。ほら、晃さん三ヶ月たっても知らないふりしてぜんぜんなにもしてこなかったから……」

知らないフリをしていたわけじゃないが、三ヶ月何もしてこなかったのは確かだ。

ひよんなところで解決してしまう、ここ数ヶ月の晃の悩み。ふつつつと沸き上がるのは、理不尽な怒りで。

今更ながら思い出される、屋上で的一幕。

不敵な……何かを企んでいた風の、タローの人が悪い笑顔。思わず友達やめるべきだろうか、なんて晃は思ったけれど。

「それで……葵ちゃんのメールを見て、これは俺の仕業だと、大屋さんはそう思ったわけだな？」

それにこくりと頷く奏子。

晃はそれに、深い深いため息をついたが。

晃は、その瞬間ふとひらめいた。

だったら、これを利用してやろうと。

「だったら望み通り、終わらせてやる。……本当の意味でな」  
それは、叶えることのできなかつたカーナの願いのかわりのようなもの。

晃は内心そう思っていて。

「ほんとうの……意味？」

何だか投げやりにそう言う晃の言葉を、反芻する奏子。

晃は再び奏子を見据えて頷いて。

「知っているか？ 本当の正義の味方ってのは、敵も味方も自分自身も、笑顔でいられるヤツのことらしい」

発せられたのは、やはりつつけんどんな、遠まわしな言葉。

「え？ それって……」

目を見開き、首をかしげる奏子。

対する晃は、何度もそれを口にするのは恥ずかしかったから……

「だが、まだ知らなければならぬことがある。一旦ここを出よう」  
それに答えることなく晃は席を立ち、

「あ、まっってください！」

後についてくる奏子を確認してから。

晃は再び、去ったばかりの上徳間家……いや、黒彦家へと足を向けたのだった……。



## 第26話

「知りたかったことって……?」

日が降りてくるにつれて、空の紫の気配が強くなり始めた、駅へと続く道。

普段なら橙に染まるために準備をするはずの背の高いコンクリートが、不気味な紫色を照り返している。

晃がそれにうそさぶいものを感じる中。

それに気付いていない様子の奏子がそんな事を聞いてきた。

いや、それは気付いていないのではなく、気にならないから、なのだろうか……。

「榎美さんのことだよ。葵ちゃんや大屋さんとは付き合い長いのか? 少なくとも大屋さんのように、葵ちゃんの事情を知っているようだったが」

いかにも本の世界が自分の創り出したものだ、そう主張している風でもあった榎美。

いや、それは榎美本人ではなく、全ては英理の言葉から始まっているわけだが……。

そんな榎美には気になる点があった。

それは……英理と葵が事故の遭ったあの記事。

そこに榎美の影が一切なかったということだ。

現実的なことを考えれば事故後に知り合って一緒に住むようになった、と言つ一文で事足りるはずなのだが。

「ええと、私知り合うのとあまり変わらないと思いますけど……上徳間さんは、葵の代わりに、英理先輩の妹になったって聞きました」

た」

まるで……葵の影武者であるかのように。  
晃の問いかけにさも当たり前のことのように奏子は言う。  
この、紫の空を見て何も思わないのと同じように。

「……」

思わず言葉を失う晃。

まさしく、奏子その言葉は榎美と言う一人の少女についての答え、そのものだったのだろう。

晃が水の力を使え、空が赤に向かっていているのと同じように。

上徳間榎美と言う少女がこの世界に存在していることは、この世界において常識なのだ、と。

それは裏を返せば、ついちょっと前までは彼女がこの世界に存在していたことが当たり前ではなかった、ということになるわけ。

「あら、戻ってきたのね？　しかも奏子ちゃん連れて」

何かに期待するかのような、英理の視線と呟き。

「随分と色々騙してくれたようだな。いやはや恐れ入った。それだけの功夫があるなら、演劇部にも入ればよかるうに」

「人聞きの悪いこと言わないで。私は何も騙してなんかいいわ。ただあの子を守りたかった、それだけなの。……怖い怖い正義の親玉からね」

いつの間にか辿り着いていた『黒彦』と表札のかかる大きな屋敷の

前で。  
箒片手に待っていたらしい英理と、通過儀礼めいた言葉を交わしあ  
つて。

それから、深く深くため息を吐く晃。

それは、結局こんな性質の悪いタローの冗談も、英理の語ってくれ  
た過去の悲劇も、偽りなど何一つなかったからで。

晃が一人貶められ、騙されていただけで。

自分は結局、舞台上の上の演者たちに毎回驚かされる観客なんだろう  
な、なんてしみじみ思う晃がそこにいて。

「何でも叶えてくれる。……そう言う約束だったわよね？ どうか  
お願いします、私の妹たちを、助けてください……」

「……っ」

英理は、あの世界であったことを、知っていたのだろうか？

ここにきて、まだ騙されていたことがあったらしいことにも驚きだ  
つたが。

それに乗じて切実な本音を口にするなんて……反則だと晃は思う。

「……情けは人のためならず、か。いい皮肉だよ全く」

だから晃はそんな捨て台詞を残して、期待と不安がないまぜになっ  
た表情を見せる奏子と英理に背を向ける。

向かうのは、あの本のある土蔵。

背後からの嬉しそうな気配が分かって、晃は逃げるように足を速め  
る。

そして、閉じられた鍵のかかっていない扉を開け放てば。

案の定、大きな冷蔵庫の上、奥の方にもう一つの光る本。背表紙にはラキラの懐中時計、下巻の文字。本当の物語の、フィナーレ。

「さっきまで行っていたのは、さしずめ中巻つてところか。……まあ、そんな事だろうとは思ったがな」  
晃は、誰にともなくそう呟いて。  
再び本の世界へと、旅立っていったのだった……。

そこは、地の国で一番地下深い、深遠なる水たゆたう場所。

クロイ……いや葵は、何も見えない闇の中、まるで宙にでも浮いている気分になりながら、その闇よりも黒い本物の闇の翼を広げ、水の流れるままになっていた。

その流れは激しく荒い。

間断なく波がたち、天井から降ってきた岩塊が、水を深く穿ち沈んでいく。

その、天井が落ちてくるのも時間の問題だろう。

「……これで、何もかもうまくいく」  
城が落ちてぺしゃんこになれば、流石に死ぬだろう。  
本の世界に足を踏み入れた『旅人』のように、その命を助けるものがないのだから。

自分が死ねば世界は……大切なみんなは救われる。  
どうしてそんな簡単なことに気付かなかったのだろうと葵は思う。

気付いたら世界を滅ぼしてしまうなんて世迷言のような力が背中に  
あって。

葵はそんなつもりはないのに、世界を滅ぼす悪だと、命を狙われる  
ようになって。

初めはずっと、ふざけるなど、葵はそう思っていた。

こんな目に遭う理由なんてない。  
関係ないのに、死んでたまるか、と。

何の罪もないのに死んでしまった、両親と伯父さん伯母さんのよう  
に、理不尽な死を受け入れることなんてできない。

死ななきゃいけない理由なんてない。  
葵は強く強く……そう思っていた。

だから、葵は葵の命を狙う正義の味方を名乗る者たちを撃退するこ  
とに、躊躇わなかった。

《フェアリー・テイル》の力は、少しずつ変わってゆく世界のこと  
を、当たり前前のものだと認識させるところに強みがある。

その力……本の世界に触れた彼らは、《フェアリー・テイル》の存  
在を当たり前前のものだと認識する。

つまり、葵に対する敵意や殺意をなかったことにする……そんな力  
を持っていた。

それはきつと、《フェアリー・テイル》が宿主である葵のことを守  
るためのものだったのだろう。

別に命を奪うわけじゃない。

ただ忘れさせるだけ。

たとえその事で世界が少しずつ変わっていったとしても、それは私のせいじゃない。

それは仕方のないことなのだ、葵はずっと思っていたのに。

現れた100人目の刺客。

彼は《フェアリー・テイル》の世界に触れても、葵のことを忘れなかった。

『ヒヒヒ、今までのようにはいかないってことを肝に銘じておくんだな。十夜河晃が来れば……お前らはもう終わりだよ』

そう言つて笑う、99人目の正義の味方、その少年の言葉。

それを暗示するみたいに……葵をこの世から消し去ろうと、鋭い殺意を向けてくる。

葵は怖かった。

いつかこんな日が来るとは思いながらも、その理不尽な滅びをどうしても受け入れられなくなかった。

だから、彼を傷つけた。

『私の視界から消えてしまえばいい』と、強い気持ちを込めて。

……なのに。

そんなひどい仕打ちをしたと言うのに。

彼は笑っただけだった。

その理不尽な仕打ちを、ただ受け入れて、納得して。

初めて垣間見た、その素顔。

いや、その素顔を葵は知っていた。

まだ何も始まつていなかった頃の、幸せな頃の葵が、仄かな恋心を抱いていた友達の……無垢で純粹な、素顔だったのだ。

その事に気付いたときには……もう彼の姿はなくて。

『あんだ見かけによらず子供なんだな、アイツと同じで』。  
明確な意味すら明かさず、相手を拒絶すること。  
意味がないのならそれを口にする必要はそもそもないはずだと。  
その後耳に入ってきたその言葉は、そう言う意味だったのだろう  
けど。

葵は、何気ない風を装って発せられた自分に対してのその言葉に、  
強く打ちのめされ……そして気付かされた。

生きていくために、変わらざるをえなかった葵と。

彼……十夜河晃は同じなのだ。

そんな彼に、今まで自分が受け続けたのと同じ、理由のない仕打ち  
をして傷つけてしまったことを。

葵は、そのとき初めて、自分のしたことに深く後悔したのだ。

そして……そうやって自身を見つめるうちに、葵はさらに気付く。

自分の受ける仕打ちに理由がないなんていうのは、自分勝手な言い  
訳だと。

ただ、目を逸らしていただけなのだ。

自分のせいで世界が滅びに向かっているのだと。

だから葵は、ここにいる。

それが一番いいことなのだ。

悪は滅びてこそ、なのだ。

そう……思っていたのに。

「葵ちゃん！」

聞こえてくるのは、聞きたくなかった少女の声。

それは、葵がピンチになったとき、いつも駆けつけてくれたヒロイ  
ンの声だった……。。



## 第26話（後書き）

いよいよ、次で最終話です。  
相変わらず唐突と言つか、明らかに続く感じですけど。

## 第27話

上徳間 榎美。

彼女が葵の側にいてくれるようになったのは、いつからだっただろう。

葵自身、はつきりとは覚えていなかったけれど。

両親を失って、《フェアリー・テイル》の力に目覚めて。

正義の味方が葵の前に立ち塞がるようになって。

その時には既に、側にいてくれたのを、葵は知っている。

そしてもう一つ分かっているのは、榎美が《フェアリー・テイル》の力で生まれた、幻想の少女だということだ。

両親の死を悲しむことも、自身を滅ぼそうとする正義の味方たちに對しての怒りも、彼女にはない。

昔の幸せだった頃の葵自身。

あるいは、葵の理想の少女。

「あ、翼のところ、怪我してるよ。早くここから出なきゃ」

気付けばそこにいた榎美はそう呟き、葵を起き上がらせる。

そして、朗らかな笑顔を浮かべたまま葵の手を取ろうとした。

しかし、ばちんと乾いた音を立てて払いのけられる、その手。

「葵ちゃん……?」

「水の魔精霊ぶぜいが、気安く私に触るな」  
不思議そうに首をかしげる柗美に対し、葵は自分でも驚くくらいに冷たい声が出た。

「水のませいれー？ 何言ってるの？ 柗美だよ葵ちゃん。もう悪い人は来ないから、お芝居はしなくてもいいんだよ？」  
それでも変わらない笑顔。

いつもなら、心地よいそれに苛立つ葵。

「近寄るな……そしてすぐにこの場から去れ。それとも、このまま殺されたいか？」

そんな葵の怒りと殺意に、呼応したかのように大地の揺れの激しさが増す。

ここが本格的に崩れる前に、早く柗美をここから出さなければならなかった。

柗美が、葵の力で生まれたことは確かだったけれど。

それでも彼女は、葵でもないしその代わりでもない。

葵のものでもなく、彼女は彼女の個を持っている。

上徳間柗美が、あの現実の世界に一人の少女として生きることとは、もうあの世界にとっては当たり前なのだ。

自由な彼女を、葵は縛りたくなかった。

それは、柗美と晁の……自分の理想とかつて好きだったかもしれない人の、楽しげな様子を見た時から……ずっと思っていたことだった。

自分がいなくなれば柗美はきっと幸せになれる。

そう思ってた……葵は一人でここにいるのに。

「いいよ、葵ちゃんがそれを望むなら」  
榎美はそう言って笑って。  
葵を抱きしめるから。

「……………どうして？」  
その、確かに榎美が幻ではなく生きていることを表わすかのような  
そのぬくもりに。  
葵の瞳から一粒の涙がこぼれた。  
それは水面に達し、波紋をつくる。

「葵ちゃんがない世界にいたって、つまないもん」  
答える榎美の声が近い。  
心の内まで届くその綺麗な声には真実しかなく。  
だからこそ、葵と運命を共にする……………そんな榎美の覚悟が伝わって  
きて。

「駄目よ！ あなたは生きなきゃ駄目！」  
すでに演じることも忘れて、葵は叫ぶ。  
「だったら葵ちゃんも一緒だよ。人質の命が惜しければ……………ってや  
っ？」  
自分の言葉に、可笑しそうに笑う榎美。

「駄目なの私は！ 榎美だって分かってるでしょう？ 私が現実の  
世界にいれば、いつかはっ……………」  
いつかは、滅びてしまうのだ。  
《フェアリー・テイル》の力を発動して初めに見た、血の色よりも  
赤い空。  
終末の世界のように。

「……だいじょうぶ！ 滅びないよ。わたしが何とかするから！」  
それに初めは言葉を詰まらせていた柗美だったが。  
それでもきっぱり、はっきりそう言い切った。

柗美がそう言うならば、この結末を選ぶ以外に、何とかなる方法があるのかもしれない。  
なんて葵は、思ったけれど。

「……根拠もなしにめでたい言葉、だな」  
低く、凍えるような……そんな呟きが突然あたりに響く。

それは、大地に張る水そのものが、喋っているように見えて、  
涙とともに広がった波紋。

それは次第に大きくなり、うねった。  
そして、人の背丈ほどまで波高が増すと。

瞬きする間に現れたのは、ラキラ・フェアブリズ……いや、十夜  
河晃だった。

「ど、どうしてっ？ 晃くん帰ったんじゃ……」

「あんなのはフリに決まっているだろう？」  
変わらぬ冷たい声。

それは何故だか怒っているようにも聞こえて。

「そんな……じゃあ騙したの？」

「その言葉、そのまま返すよ」

「……っ」

言葉を失う柗美。

その肩は、ちよっと震えていたかもしれない。

それは、何故晃がここに来たのか、気付いたせいもあつたのだろう。葵はそんな柗美を見、晃を見て。庇うように一步前に出て……言った。

「私を滅ぼしに来た……そうでしょう？」

「……………」

答えない晃。

葵なそれを、肯定と受け取り、言葉を続ける。

「なら、その必要はないわ。言われなくとも、私はここで死ぬから。この世界の人々を苦しめた、本当の闇の王。その最期としてね。…でも、この子は何も悪くないの。全て私のためを思ってしてくれたことなの。だから……過ぎた願いだつてことは分かってるけれど……この子だけは助けて」

「駄目だよそんなの、絶対！」

決意を示した葵の言葉に、悲鳴のような声を上げ、さらに前に立ちはだかる柗美。

その顔には紛れもない怒りの感情と、自分だけを犠牲にしようとする葵への悲しみが浮かんでいて。

「なんだ、欠けてなんかいやしないじゃないか」

対するは、そんな言葉と苦笑。

柗美も、葵も、晃の笑顔の意味が分からずに戸惑っていた。

それを見た晃は……もう何度吐いたかも分からない、癖になってきている深いため息を吐いて。

「ちなみにお断りだよ。……残念ながら、君達の言うようにはならない」

晃は苦い笑みのまま……そう言った。  
しかしそれは、この場所の崩壊を意味する大地震にかき消されて、  
榎美と葵の元には届かない。

代わりに二人が聞いたのは……そんな中で尚猛る、水の竜の咆哮だ  
った。

その姿が、まさに神を思わせて。  
無意識のままに、お互いを庇いあう二人。

「……………」

水の竜は、そんな二人をただじっと見据えて。  
伸び上がるようにして二人に迫る。  
思わず瞳を閉じる、葵。

その瞬間、葵が感じたのは。

葵を守るようにしてしがみ付く、榎美のぬくもりと。

背中にある翼へと、軽く触れるだけのキスの感触で……。

ラキラの懐中時計、下巻が終了して、数日後……休みの日。

「勘違いとは夢幻にも等しい、か……………」

晃はひとり、見慣れた長い長い坂道のその先、穏やかな晴天に恵まれた青空と、のどかで牧歌的な風景を眺めていた。

《フェアリー・テイル》の力が収まりつつあるその世界を。

全ての始まりは、やはり葵の両親の事故だった。

葵は、気がついたら《フェアリー・テイル》がその身にあったとそう思いこんでたのだろうが……

葵がそれを受け継いだのは、その時だったからだ。

それは、イレギュラーなことでもあった。

両親はおそらく、自分たちにその力があつたことすら、葵に話さず逝ってしまったのだから。

世界を破滅に導く七つの災厄のひとつとも言われる、《フェアリー・テイル》。

実のところそれは、もう過去の話だったのだ。

何故過去の話かと言えば答えは単純。

その解決方法が見つかったからだ。

それは、親から子へ、子から孫へ、分け合いながらその力を受け継ぐというものだった。

代々受け継がれたその力は和らぎ、いつしかその子孫とともに、力は天寿を全うする。

それを滅ぼすのではなく、情を持って受け入れていくことこそが、災厄に打ち勝つた一つの方法だったのだ。

本来なら、葵はそのことを両親から伝え話され、そのことを理解し、



儀式を持つて受け継ぐはずだった。

しかし、突然の両親の死により、葵はそのための儀式をすることができなかった。

儀式を行わないままに居場所を失った力は、その居場所を求め……葵についたのだろう。

葵の身に余る、力を持ったままで。

宿主が死ねばその力は行き場を探し、近くにいたものにとりつく。その世界を動かすことのできる力を、欲したものは多かつたに違いない。

守るための力があつたとはいえ、葵の苦勞は計り知れないもの、だつたのだろう。

「今度は俺も、狙われる側に加わるってわけだ……」  
風に流れる晃のぼやき。

背中に踊る出し入れ自由の、黒の翼。

その事を考えると、憂鬱で仕方ない晃だったが……。

『このヘタレめ、口にするわけでもあるまいに。黙ってるのがカッコイイってか？』

ふと思いつくのは、随分と勘違いを助長させることを言つてのけたタローを懲らしめようとして、返された言葉だった。

使命に失敗したお前が言うな、と返してやりたい所だったが。

その使命を負つて、東雲に来て三ヶ月近くも何もできなかったわけだから……。

言葉通りな晃には、言い返せるわけもなく。

そんな晃が負つた使命とは、葵の両親の代わりに、葵に儀式を行う

ことだった。

儀式……それは、親の持つ力を半分だけ受け取るもので。

その方法は、いたって単純。

受け取る側（子）が、力持つもの（親）の翼にキスをする……ただそれだけだったのだが。

「……言えるわけないだろう、そんな事」

カツコイイなんてとんでもないと、晃は思う。

三ヶ月何もできなかったのだから、全くもって事情を知らない葵に儀式の話をなるべくスムーズにできるようにと仲良くなることから始めようとして失敗した（その失敗は、タローの、自身が使命の任を下ろされたことへの腹いせだったわけだが）からだし、

結局儀式のことを話さずじやむやに終えたのは、自分のしたことを考えて、ただ単純に恥ずかしかったからだ。

そう、あの本の世界から帰ってきてからというもの、晃が儀式を行ったおかげで《フェアリー・テイル》の力が治まったことを、晃は話していないのだ。

しかし、わけも分からず長年の悩みが解決すれば、その理由を知りたくなるのは当然の理由だろう。

当然葵も榎美も、それを晃に聞こうとする。

でも前述した通り、晃は自分の口からそんな事言えやしないわけで、晃が休みにこんな坂道と空しかない場所で黄昏れているのは、

そんな二人からここ数日、逃げ回っているからなのだが……。

「あーっ、葵ちゃん！ いたよ！」

「っ、もう逃がさないわよ！ い加減説明しなさい！」

「しまった！ もう見つかるとはっ」  
不意に聞こえてきたのは、柗美と葵の怒りすら含まれているかのよ  
うな声。

慌てて晃が駆け出そうとして。

「よし！ 番に捕まえた人が願いを聞いてもらう権利があるってこ  
とで！」

「陸上部の力、伊達じゃないですよ」

「今度はナニを叶えてもらおうかなーっ」と

次々と聞こえてくる、不穏な会話。

どうやら、二人で追うには足りぬとみて、ついには数の暴力に頼っ  
たらしい。

「ぐっ……援軍か、卑怯な！」

思わずそんな言葉をもらし、晃がそちらに視線をやると。

そこには見慣れた葵や柗美の他に、香澄や奏子、何故か英理の姿ま  
である。

彼女たちは、すぐにここへやってくるだろう。

その足音すら、今にも聞こえてきそう。

傍目から見ればうらやましげなそのシチュエーション。

だが結局のところ女子が苦手な晃にとっては、それは苦行の意味合  
いが強かったのだろう。

「立ち止まればそこで負け、か……まあ、悪くない」

しかし何より問題なのが、そう言うつらいことがちょっと好きな晃  
がそこにいることだろう。

晃は不敵な笑みを浮かべてそう呟いて。

ストライドをぐっと伸ばし。

空まで続いていきそうな坂道を、駆け出していったのだった……。

それは。そんな晃の長い旅じんせの、まだまだ途中の、ほんの一幕。

第27話（後書き）

## あとがき

あとがき

またもや続きがありそうなところで切ってしまいました、

これにて旅の途中、了です。

前回の銀色クリアデイズと同じく、忘れた頃に別視点での補完話を  
予定しております。

その影響もあつてか、どうしてもキャラが多くなってしまふ傾向が  
自分の作品にはあります。

読み手さまにとってみれば分りにくいことこの上ないのですが、

いつかはそれが自分の個性として昇華できるように努力していき  
たいです。

そう言う意味でも、アドバイスお待ちしております。

それでは、また機会があれば、お目汚しおぼ。

伊吹ノアでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0136j/>

---

旅の途中

2011年6月4日13時09分発行